
魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの

ラグナシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの

【Nコード】

N9212J

【作者名】

ラグナシア

【あらすじ】

遙か昔、気が遠くなるほど遙かな昔…

かのアルハザードが存在した時代、大きな戦いがあった。

それは、後に黒王と呼ばれるモノが起こした幾度も続く悲しき戦い。

そして、遙か未来、伝説は語る

『緋き皇子と光の姫巫女、悲しき運命に弄ばれ、黒き王が蘇る。白亜の騎士、怒りと悲しみに包まれしとき、白銀の戦神が舞い降りる』

時は、「闇の書」事件から4年後

新暦70年、第97管理外世界現地惑星名「地球」海鳴の地にて戦いを宿命づけられた悲しき運命を背負いし戦士達の物語が幕を開ける

繰り返される戦いに果たして終わりはあるのだろうか

小説を読む前に

みなさん、こんにちは、お久しぶりの方はお久しぶりです。

今回、長期間小説を書けなくなり、改めて自らの小説を読みなおしました、そこで気がついたのが、あいまいな文章だということです。

そこで、改めてプロットを作り直し、登場キャラクター達はそのままに、設定を変更してこの『光を継ぐもの』を新生させようと思います。

これまで読んでくださった方には申し訳ありませんが、ブログからやり直させていただきます。

これから頑張りますので、これからもよろしくお願いいたします。

なお、この小説を読むにあたり、チート有、ハーレム有になっております。そのようなことが嫌いな方はこのまま戻るボタンをオススメします。

感想、励まし、アドバイスどしどし書いていただければ、励みになります。

ですが、まあ、このサイトを使っている方にこのような人があるとは思えませんが、「言葉遣いの悪い方」、「常識のない方」、「作品の誹謗中傷をする方」は読んでいただかなくて結構ですのでこのままお戻りください。

オリジナルキャラクター（9月4日変更）（前書き）

この物語の世界観は魔法少女リリカルなのはの平行ワールドと
お考えください。

6月23日イメージCDVを一部変更しました。

7月5日一部修正

オリジナルキャラクター（9月4日変更）

【主人公】

名前：御門^{ミカド} 錬^{レン}

年齢：13

性別：男

身長：175センチ（まだ成長中）

デバイス：レジェンドデバイス ブリユーナク（錬は相棒と呼んでいる）

待機状態は銀色のブレスレッド

デバイス属性：極光

1st：ガントレット&アングレット

（腕は肘まで脚は膝まで覆っていて、鉄鋼は鋼を一枚ずつ重ねてある。るる剣に出てくる真・無敵鉄鋼のような見た目）

バリアジャケットが2種類あり、ローブを着た魔術師タイプ「ウィザード」とローブを脱いだ軽装格闘タイプ「ファイター」がある。

2nd：槍（イメージ的には、TOVのジュデイスの武器ブリユーナクの形で色は白銀）

3rd：長銃（イメージは無限のフロンティアのヴァイスリッターアーベントのパルチザンランチャー）

魔導士ランク：推定総合B（AAA（バリアジャケットやデバイスの形態で変動）

1stウィザード時A、ファイター時B、2nd時A、3rd時AAA

魔力変換資質：水流

レアスキル：【五大元素使役】過去の【御門錬】が習得したスキルの一つで、火、水、地、風、雷属性の技、魔法等を使用することができる。しかしながら、使えるのはかつての御門錬が習得し、プリ

ユーナクが記録してあるものだけである。

特殊スキル：【真名解放】武具の秘められし、真名を解放することができるスキル。武具を真に理解することで使うことができ、錬と武具の相性で開放できたりできなかったりする。特に水属性、光属性は相性がいいが、逆に闇や呪い系統は相性が悪く解放できない。備考：人当たりの良い性格で負けず嫌い。すこし頑固なところがある。

アリサは格好のいじる対象である。

基本的に女好きで女性から言いよってくる場合、受け入れるだけの器量を持つが自分から惚れた女に対しては心の底から尽くすタイプ。本人いわく、「ハーレムだっていいじゃないか！」だそうである。

外見は赤眼の銀髪ですこし長めの短髪。学力は中の上か上の下だが、無駄にいろいろ知っている。

幼いころから剣術、槍術、格闘術を学んでいるため運動神経は抜群
白亜の騎士【御門錬】としてこれまで様々な平行世界の【御門錬】へ転生している。

白亜の騎士の宿命は光の姫巫女を守り、黒き王を消滅させることである。

ブリューナクも同様で、錬が転生すると同時に、その世界でふさわしい形になり、錬と廻り合うという特性がある。

ブリューナクには過去の【御門錬】が習得した技や術等が記録されており、記録をロードすることで、使用可能になる。

月村すずかとは許嫁関係であるが、友人として接しているが、なのは達に接するよりも優しく接している。すずかよりも前に許嫁関係にあった女性がいたが、現在は解消されている。

御門家は古くから伝わる家系であり、数百年前の当主の時に古代アイルランド人の血を引く家と繋がりができ、現当主である錬の父はアイルランドを本拠に曾祖父が起こした世界規模の貿易会社を取り仕切っている。

家族構成は父、母、兄、妹の5人家族だが、8歳のころから海鳴市に住み祖父のもとで古武術を学んでいる。現在は伯父が経営するマンションに一人で暮らしている。

イメージCV：宮野真守

【オリキャラ1】

名前：マドカ・F・アーヴィング（Fはフジワラの略）

年齢：13

性別：女

身長：157センチ

スリーサイズ：88、58、86

デバイス：レジェンドデバイス セレネ

待機状態は蒼色のイヤリング

デバイス属性：月光

1st：大杖（イメージはTOD2のハロルドの杖を大きくしたものでマドカより大きい）

2nd：西洋剣（イメージはスターオーシャン4のインフィニティサーベル）

3rd：大弓（月と狩猟の女神アルテミスが持っていたアルテミスの弓、イメージはスターオーシャン4の剛弓”烈風新月”）

フルドライブ：ヘカテモード、デバイスのコアを中心に両側に天使の翼のようなフレイムに上部に実体の両刃の刀身をもつ杖

魔導士ランク：総合S+

レアスキル【解呪】魔法や呪術的な封印、呪いの類を完全に解除することができる。また、自分に対しての呪い等を一切受け付けない。

レアスキル2【月光の衣】バリアジャケットを展開しなくても月の光に体が覆われており、Aランク以下の攻撃、闇属性の攻撃を完全遮断することができる。しかし、同族性の光属性の攻撃は防ぐこと

ができない。月が出ている場合は防御力が上がり、攻撃魔法に魔力を回すことで威力をあげることができる。なお、月が出ていれば、微量ではあるが体力と魔力の回復も行える。

備考：時空管理局の執務管。

7歳のころ飛行機事故に巻き込まれ次元漂流者となっていたところを時空管理局に所属しているレオン・アーヴィングに保護され、そのままアーヴィング家の養子となる。ミドルネームからわかるように、地球出身。

なのはたちより少し前に管理局に入り、魔法の素質があったことからわずか10歳で執務管になった天才。

セレネとは執務管としての初任務の時に派遣された遺跡の奥で出会い、セレネから蒼き月光の素質を見出された。

過去の蒼き月光の記憶が鍊に会ってから徐々に蘇っていく。

普段はおとなしく、お淑やかなお嬢様を演じているが、本来は勝気で負けず嫌い。義兄のレオンを尊敬しており、兄の命令には絶対に逆らわないどころか、兄の障害になるならば、味方でも容赦はない。

基本的にはいい娘であり、惚れた相手には一生尽くすタイプで一番でもなくていいから傍にいただけでいいという思考を持っている。外見は黒い髪を腰まで伸ばした超ロングヘアーで誰もが振りかえるような美少女である。瞳は蒼き月光に覚醒したときからバリアジヤケットを展開すると蒼になるが普段は黒。

普段は年相応の女の子で、ファッションに興味があり、暇な日はショッピングに出ている。

ちなみに外見だけなら、鍊の理想のタイプらしい。

イメージCV：名塚佳織

【オリキャラ2】

名前：レオン・アーヴィング

年齢：20

性別：男

身長：180

魔導師ランク：総合SSS

備考：時空管理局の一等空佐で、元エリート執務管。第1世界ミッドチルダ出身。

外見は長めの金髪に人のよさそうな顔をしている。いわゆるイケメンである。

だれにでも優しく接することのできる性格で階級などを気にせず
に接することから部下
たちからかなりの信頼を得ている。

アーヴィング家の当主であるが、実は彼も養子で幼いころに子供のいなかったアーヴィング夫妻に拾われている。それ以前の経歴は全く不明である。管理局入りした際そのもてる魔力量、知識から「天才」「管理局を担う男」として各方面から注目され、陸からも唯一信頼されている。

管理局の闇を知る人物の一人で、中から改革を起こそうと頑張っているが、なかなか旧体制を変えられないでいる。

現在彼のもとで働いている職員たちは彼が魔法を使っているところを見たことがないという。

イメージCV：三木眞一郎

【オリキャラ3】爽蒼先生発案

名前：海原ウミハラ ユキ雪

年齢：13（見た目小学校中学年）

性別：女性

身長：140センチ（成長限界）

デバイス：レジェンドデバイス アンフィバナジス（通称アン）

待機状態はひし形の青い宝石

デバイス属性：水・氷

1st：杖&円形の盾（イメージはスターオーシャン4のミステリーセプター）

2nd：細身の西洋剣&円形の盾（スターオーシャン4のミスリルレイピア）

3rd：大鎌（スターオーシャン4のグリムリーパー）

魔導士ランク：推定AAA

魔力変換資質：凍結

レアスキル：【海姫の祈り】自然に存在する水を操ることができる。ぶつちやけ川や海が近

くにある場所では負けない。空気中の水素なども制御可能。魔力を多く消費するが敵の魔力変換の水も操ることができる。

備考：明るい少しおっとりした性格。外見は、水色の髪をツインテールにしている。目の色は黒で貧乳。小学生の頃、北欧の方で暮らしていたが、6歳の頃事故に合いそうになった所をたまたま父親の仕事に着いてきていた鍊に助けてもらった。その時から鍊に恋心を抱いていて、その後、鍊を追って最近聖祥に転校して来た。アンフイは12歳の時に、当時住んでいた家の近くの湖のほとりで凍りついていたのを発見してそのままマスターに。普段おっとりしているが戦闘では的確な判断を行うことができる。

イメージCV：花澤香奈

【オリキャラ4】U・T先生発案

名前：真崎シンザキ剛ゴウ

年齢：13

性別：男

身長：180センチ

デバイス：レジェンドデバイス グラム

スピリットデバイス ファフニール

待機状態：グラムは赤色のピアス、ファフニールは金色の腕輪

デバイス属性：グラムⅡ竜殺し、ファフニールⅡ灼熱

1st：ロングソード&フアング（グラムはロングソード、ファフ

ニールはFateのバーサ

ーカーの斧剣）

2nd：バスターソード&ナパーム（グラムはFF7アドベントチ
ルドレンのクラウドの合

体剣、ファフニールは小太刀の大きさの斧剣）

3rd：両刃剣&クライシス（グラムはスターオーシャン4のイン
ペリアルソード、ファフ

ニールはナパーム形態の刀身に装甲が加わり、刀身が常に炎を纏っ
ている斧剣）

魔導士ランク：推定限定SS（バハムートインストール使用時）

魔力変換資質：炎熱

バハムートインストール

レアスキル：【竜王転送】自身の内に秘める竜の力を解放し、自身
の能力を上げる事が可能。しかし、魔力消費が高く、尚且つ最大ま
で解放するとその身が耐え切れず自滅してしまう為、50%までし
か使えない。

備考：竜の力を秘めていたせいで幼い頃両親に捨てられ、周囲に絶
望と怒り、悩みと苦しみを抱えながら生きていた時に、フリーの魔
導師「真崎凜」に保護され、その後は凜の子、そして弟子として、
今を生きている。

鍊とは中学に入学してから面識があり、あることがきっかけでお
互いの事を認め合っている。「めんどくせえ」が口癖。

容姿はボサボサの金髪・青空の様に澄んだ水色の瞳。

学校の制服は真面目に着るが、普段は黒系統の服を良く着る。

性格は無骨かつ無愛想。乱暴な言動を取るが、根は優しい。

戦闘スタイルはデバイス2機を同時に使う二刀流

ファフニールはかつて凜が開発した模造レジェンドデバイスである。

イメージC V諏訪部順一

【オリキャラ5】 早乙女伊織先生発案

名前：紅 くれない 五和 いつわ

年齢：13

性別：女

身長：160センチ

スリーサイズ：85、58、85

デバイス：レジェンドデバイス シリウス

待機状態は犬型のキーホルダー

デバイス属性：蒼炎

1st：狙撃銃（StSでのヴァイスが使っていたストームレイダーと同じ形）

2nd：ガトリング砲（銃口が五つあるガトリング砲。イメージはバイオハザードシリーズの物だが、少し小型化している）

3rd：ガンソード×2（イメージはスターオーシャン3のグラビティレイザーの砲身の下から片刃の剣が設置されている。簡単にいえばFF8の顔ブレード）

魔導士ランク：総合A、陸戦AA、空戦BBB -（内包魔力はSクラス以上）

魔力変換資質：風迅

携帯武器：直刀（銘：影刀焰）

レアスキル【鋼鉄の牢^{アイアン}メイデン】鉄牢を造りだし相手を閉じ込めることができる。この牢獄にとらえられたものは魔力運用が著しく低下し、防御形の魔法、術技をすべてキャンセルされる。

備考：錬の幼馴染で従姉妹。御門家に連なる紅家の娘で代々御門家と共に生きていくことを習わしとしている。

御門家が古武術の家に対し、紅家は陰陽や魔術などの力を受け継いでいる。紅の名前の通り、赤い瞳と赤い髪を持つ少女。

髪型は基本的に降ろしているが、気分によってはポニーテールにしたりツインテールにしたり、団子にしたりと色々変えている。学校内ではキチンとした服装だが、休日は打って変わって、胸元を開けたり、かなり大胆な服装をしている。

普段の性格は大人しく、休み時間は専ら図書室で読書をしていることが多く、休日の彼女とは比べものにならないほど落ち着いた娘である。しかし、休日はどちらかと言うと不通の年相応の女の子である。

魔法の力は錬と同時期にシリウスと出会い手に入れている。

内包魔力はSクラスの魔導師以上あるが、リンカーコアから出る魔力とは別に陰陽や魔術を使う力を持っているため、魔力運用が上手く、AAクラス近くまでしか出すことができない。

さらに、感情が高ぶりキレると魔力が暴走するため、魔力の過剰使用には十分気をつけている。飛行魔法は使えなくもないが、使用するとかなりの魔力を喰ってしまうため、あまり使用はしない。

しかし、それでも空戦はするため、シリウス監修の元、飛行用デバイス『ホバーブーツ』を造った。

イメージCV広橋涼

【オリキャラ6】空牙刹那先生発案

名前：空牙遊騎くつがゆうき

年齢：13

性別：男

身長：177センチ（まだ成長中）

デバイス：アーマーデバイス ソウルゲイン（AIなし）、アーマーデバイス ソウルサーガ（AI有 愛称ソル、AIは完成しているが調整中のため使用不可）レジェンドデバイス 鳳皇・応龍（レジェンドデバイスはまだ持っていない）

待機状態：アークは蒼いバングル、ソルは漆黒のバングル、鳳皇・応龍は銀のピアス

デバイス属性：轟炎・蒼雷

1st：ブレード（無限のフロンティアでアクセルが持っているブレード、2本）

2nd：ランチャー（スパロボのアシュセイバーのハルバードランチャー）

3rd：両手剣（スパロボのヴァイサーガの剣）

特殊兵装：ソードブレイカー（アシュセイバーのソードブレイカー、ランチャー時にのみ使用可能だが、ランチャーとの同時使用、長時間稼働はできない）

アーマーデバイス外見：ソウルゲインはまんまスパロボのソウルゲインそのまま、ソウルサーガはちょっと改造しまして、にヴァイサーガのボディにアークゲインの頭部、ソウルゲインの腕部パーツを組み込んだものと考えてください。色は黒に統一し、黒いマントを着用です。

魔導師ランク：総合S+

魔力変換資質：閃光、疾風

レアスキル：【破魔】魔力でできたものをキャンセルする能力、遊騎は防御系魔法が使えない代わりに人為的に疑似AMFを展開することができる。

常に発動しているが、自然発生の状態で無効化できるのはAランク以下の攻撃か攻撃力の低い物のみ、防御として発動すればなのはのエクセリオンバスターも無効化できる。しかし、スターライトブレ

イカーやフォースバーストのバスターは無効化ではなく半減、全力全開スターライトは軽減までしかできない。

また、攻撃に使用することで敵のシールド、フィールド、結界破壊にも使用できる。

備考：備考：何故かスパロボのアクセル・アルマーの記憶まで持っており、たった一人の宿敵と認めた相手のことを「ベーオウルフ」と呼ぶ癖がある。

髪の毛はエリオの髪型で黒髪の前髪に赤いメッシュが入っており、後ろ髪は昔なのはにもらったりボンで縛っている。

私服はスパロボのアクセルと同じ白い服を着ていることが多い性格は冷静だが、内に熱い感情を秘めている。

普段は面倒臭がり屋でサボり魔のため、学校ではアリサによく叱られているが、

魔法サイドになると性格が豹変していつものクールな性格になり、何かと仲間相手に気遣ったり、諭したりするような発言を行う等と面倒見がいい。

また、口癖である「〜だ、これがな」「〜、こいつがな！」「〜、これがな」等をたびたび使う。

アーマーデバイスはフルスキンの全身アーマーのためなのは達にばれてはいない。

なのはが話相手だと好きな為か焦ってしまい、いつも照れてしまうが

いつも無茶ばかりしているのはを一番に気にかけている。

出身はヴァイスと同じ第4管理世界カルナログだがヴァイスとの面識はない。

父親が管理局員で任務中に殉職、母親が交通事故で死亡、更に心臓病を患っている妹がいたため、なのは達やマドカよりも早く管理局の門を叩く。

そして管理局で同じ部隊になったのはと出会い一目惚れした。

仲良くなり、その年の誕生日にもらったリボンで髪を縛っている。

その後なのはの撃墜事件が発生、その際の報道でなのは以外にも撃墜されたり殉職した友人がいたにもかかわらず、その人間たちのことに管理局が触れていないこと、なのはの撃墜をプロパガンダに使う管理局に疑問を持ち、調べていくうちに管理局の闇を知る。そして、闇の書事件の時に死んでしまった妹の死の真相が治療用に移植したリンカーコアを蒐集して心停止による死亡を引き起こした犯人が仮面の男に変装していたリーゼ姉妹であったことを知る。

そして、管理局の本性をしり、管理局を退役、傭兵として生計を立てる。

地球へはとある依頼を受けてやってきて、ついでとばかりに聖祥に編入した。

学校ではふざけた態度を取るなど学生生活を満喫している

イメージＣＶ：神奈延年

オリキャラ紹介2（前書き）

オリキャラ紹介第2段

オリキャラ紹介2

オリジナルキャラクター

名前：桜守姫 オウスキ 蓮華 レンゲ

年齢：13

性別：女

身長：152センチ

スリーサイズ：83、59、85

備考：鍊のクラスに転校してきた少女で鍊が塵鳴流剣術を習得する際に見た絵画に描かれた【桜守姫桜】おうすきくわいと瓜二つの桃色がかった薄紫の腰まである髪に澄んだ青い瞳をもつ。

桜守姫の性を持つが桜守姫本家ではなく分家に当たり、聖祥には親の仕事の都合で鳴海に引越すことになったための転校である。
しかし、桜姫とまったく同じ容姿を持ったことから本家から政略結婚の道具として使われ、婚約者がいる。

本人は婚約者がいることは知っているが、どこの誰なのかは知らない。

その為、あまり乗り気ではない。

しかし、親から少し聞いた話ではかつて一度会ったことのある人とのことだが、本人はあまり興味がない。

転校初日、鍊と話してからというもの、妙な既視感を胸に抱いており、鍊と会話すると、嬉しかったり、さびしかったりと複雑な感情を抱いてしまう。

性格は良家のお嬢様といった感じで丁寧な言葉使いで誰にでも優しく接することができる。

リンカーコアを保有しているがコアは未覚醒状態。

普段から左耳に桜色のイヤリングを付けているが、学校では髪の毛で耳を隠しているのかわからない。

服装は白やピンクのワンピース等を好む。

イメージＣＶ：堀江由衣

名前：御門 ルリ

年齢：１１

性別：女

身長：１４９センチ

スリーサイズ：７９、６１、８１

備考：鍊の妹。現在はイギリスに両親と共に住んでいる。容姿は黒い癖のないストレートな髪をツーサイドアップにしており、大きな瞳に長い睫毛とまさに人形のような整った顔立ちをしており、家族全員に愛されて育った。

口調は基本的にお嬢様口調で鍊のことは【お兄様】と呼んでいるが、もう一人の兄である翔のことは基本呼ばないか呼んだとしても【愚兄】と言うほど嫌っている。

理由は鍊の婚約者にすずかが決まったことが原因ですずかの姉であるしのぶと翔が友人であったことが月村家と御門家を繋いだと思っておりそれ以来、翔を嫌っている。

ちなみに鍊に対してはブラコンである。そのため、鍊の婚約者であるすずかをいまだに認めていない。

リンカーコアを保有しており、コアも覚醒している。

そのことは誰にも言っておらず、イギリスでとある人物から魔法を教わっている。

イメージＣＶ：高垣彩陽

prologue

黒き王が世界に反旗を翻し、魂を喰らう魔物を従えしとき、世界は破滅へと向かう

黒き王、使徒たる七つの災厄を率い、世界には影の魔物が溢れる……

緋き皇子、光の姫巫女と共に自らの騎士たちを率い黒き王を討伐せんとする

しかし、緋き皇子の力も黒き王には通じず、光の姫巫女その命を持つて黒き王の魂と魔物を封印し、とある騎士達に未来を託し、神託を授ける。

遠き未来、封印の棺より、魂を喰らうもの甦りしとき、黒き王の封印も解け、世界は再び混沌につつまれ、悲しき運命は繰り返される。

悲しき運命は、神々の祝福を受けし子が光を受け継ぎしとき、子は戦神となり、運命を断ち切るであろう。

時空管理局『無限書庫』内にて司書長として勤務していた「ユー・スクライア」により無限書庫奥深くで発見された題名もない石版に書かれた一説……

この発見により、時空管理局は『黒き王の棺』を第1級搜索指定ロストログアとして認定管理局の総力をもって確保するように通達
がなされた。

この命令は、かつて『PT事件』『闇の書事件』にかかわった彼女たちにも例外なく命令される。

だが、すでに物語の歯車は動き出していた。

管理局の未来を担うエースと謳われた彼女達3人が出会う以前から悲しき運命の物語は少しずつ少しずつ、その悲しい終末へ向けて歩み始めていた。

石版の裏側に掘られていた一説

「私の願いはただ一つ、■ ■、どうかあなたが幸福でありますように……」

第1話『エース集結、そして始る物語』（前書き）

新1話目から少し長くなってしまいました。

作者の技量的に文章的におかしなところがあると思いますが大目に見てください。

感想、アドバイス待っています。

第1話『エース集結、そして始る物語』

時は新暦70年、時空管理局が設立されすでに69年が経過していた。

第97管理外世界、現地惑星名【地球】この星には管理局が定めた法が適応されていない管理外の世界に定められている、なぜならこの星には魔法文化が存在しなかったからである。

しかし、日本、海鳴市、そこでは2度の魔法にかかわる事件が起きていた。

次元航行中であつた輸送船が時空間攻撃を受け、輸送中であつたロストロギア【ジュエルシード】が散らばり、それをめぐり、偶然にも発掘者であるユーノ・スクライアと魔法に出会うこととなった、現地の9歳の少女【高町なのは】と事件の首謀者であるプレシア・テストロッサの娘アリシア・テストロッサのクローンである【フェイト・テストロッサ】が出会うことになった『PT事件』

そして、同じ年の冬、ロストロギア【闇の書】をめぐり管理局戦艦アースラのスタッフと民間協力者である高町なのは、当時アースラの囑託魔導士となっていたフェイト・テストロッサ、そして、闇の書の主【八神はやて】とその守護騎士たる【ヴォルケンリッター】達が関わった、過去から続く負の連鎖の原因であつた闇の書の闇を消滅させた【闇の書事件】

2つの大きな事件と、大魔力保持者を輩出したこの世界を二つの事件の詳細や「エース」と呼ばれる三人を知っている管理局員は少なからずこの世界に注目していた。

そのためであろうか、先日本局より発せられた、

『ロストロギア【黒き王の棺】を最重要指定ロストロギアと認定、管理局全職員はこれを発見、確保せよ』

との命令もクロノ・ハラOWN提督の率いる戦艦アースラにも同様に下される。

その命令内容に艦長であるクロノが眉を顰めながらも、最優先命令として実行に移した。

【次元航行中戦艦アースラ内】

戦艦アースラの艦長席に座るクロノ・ハラOWNは先日下された命令書に再度、目を通していた。

「クロノ・ハラOWN提督率いる戦艦アースラの乗組員は第97管理外世界にてロストロギア【黒き王の棺】の搜索を命ずる、なお、現地出身者の魔導士をチームに組み込み搜索に当たるべし……か」

命令文を読み上げたクロノはため息をつく。

人手不足が深刻な時空管理局では、一つの部隊に戦力が傾くことを避けるため、一部隊に保有できる魔導士ランクの総量を一定に定めている。

しかし、地球出身者の魔導士と言えば、高町なのはや八神はやてと言った高ランク保有者であり、なのははSランク、はやてはSSとオーバーSが二人にこの命令が下る前に別の仕事関係でアースラに乗艦していた彼の義妹フェイトも1年前Sランクに上がっており、はやての保有戦力であるヴォルケンリッターもニアSランクの実力者だ。

つまり、今回のアースラの戦力は、なのは、フェイト、はやてとヴォルケンリッターの4人明らかに過剰戦力といえる。

そのせいか、現在アースラには武装局員は一人も乗船していない
そのことを考えるだけでクロノは頭痛を感じてしまう。

一体誰がこのような命令を考え付いたのか先ほども言ったように
この戦力は異常すぎる。

「あんまり気にしても一度下された命令だから覆らないよ、逆に馴染みのメンバーだしちょうどいいと思うよ」

頭を捻らせていると、いつも彼をサポートしてくれる女性、エイ
ミィ・リミエツタが声を掛けてきた。

「エイミィ、君は軽く考えすぎだ。最重要搜索指定だからと言って、
管理外世界にこれだけの戦力を派遣するなんて、おかしすぎる。」

クロノはいつも軽い口調で話す彼女に事の重大さと異常さを咎める
ように話す。

「以前、地球にはジュエルシードや闇の書が自然と集まったから、
もしかしたらつていう可能性を上層部も考慮してるんじゃないのか
な？」

そこへ、クロノの義妹、長い腰まである金髪をなびかせ黒い制服
を着た美少女、時空管理局執務官 フェイト・T・ハラオウンがブ
リッジにやってきてクロノに質問を返した。

確かに過去、地球からは優秀な魔導士が数人排出されている。そ
の時何故か魔法文化のない地球からロストロギアも発見されている
のである。

クロノは自らのかつての恩師、ギル・グレアムも地球出身だった
ことを思い出した。

「それじゃあフェイトは地球に棺が現れる可能性があるって言うのか？」

「うん、まったくないとはいえないと思う」

彼女は真剣な眼をしてクロノを見返した。

「確かに、0とは言い切れないか。まあ、フェイトは久しぶりに家に帰るんだ、メインの搜索は僕達に任せて、普段は学校に行けばいい」

クロノは艦長の顔から義兄の顔になりフェイトに告げた。

「うん、ありがとう。お義兄ちゃん」

フェイトも義妹の顔になりその言葉に答えた。

アースラのブリッジのモニターにはすでに青い惑星が映し出されていた。

海鳴市 高町邸

「うにゃああああああ」

現在4月7日午前7時55分、高町邸から猫のような大きな叫び声が上がると同時にドタバタと大きな音が響き渡っていた。

「お母さん、なんで起こしてくれなかったの？」

栗色の長い髪を左側で一つにまとめ大慌てで二階にある部屋から

降りてきたのは我らが白いあ「ちがうもん！悪魔じゃないもん！」
もとい、彼女こそ、かの社会に適合できなかった天さ「ねえ、フ
ザケテルノカナ、カナ？」……………いえ、滅相もございません、けっ
して次はお宝案内ができると「次にふざけたらO H A N A S
Iなの」

では改めまして、時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊所属、不
屈のエースオブエース、高町なのは二等空尉その人である。

彼女はキッチンで朝食の用意をしている彼女の母、高町桃子に挨
拶もしないで文句を言うが、3人の子を持ちいまだに若々しい容姿
をした彼女の母親は娘を窘めるように返答を返した。

「起こしたわよ、30分も前に部屋に行ったけど、起きなかったの
は、なのはでしょう？」

「そうだよ、早くしないと遅れちゃうよ」

桃子に次いでそういうのは彼女の姉である高町美由紀である

「いつけなしい、遅刻しちゃうってきまゝす」

そう言っただけなのはテーブルに置いてあったトーストを一枚だけ
とると口にくわえて走って家を飛び出していった。

「ねえ、お母さん」

「何？美由紀」

「聖祥の始業式って明日だよな？」

そう、今日は4月7日私立である聖祥であつても新学期の始まり

は公立と同じ4月8日からであるのだ。

「ええ、そうよ」

「じゃあ、なんで、なのはは制服で出て行ったのかな？」

「……………ひ、久しぶりの長期休暇だったから気が抜けたんじゃないかしら？」

海鳴市のとある交差点、ここはいつもなのは達が学校へ登校する時に集合する場所である。

その集合場所にはすでに4人の人間が集まっている。

「あゝもう！なのははまだなの！」

そう声を上げるのは、肩で切りそろえた金髪に吊り目がちの勝ちきそうな美少女、アリサ・バニングス

「アリサちゃん、心配しなくてもいつものお寝坊さんだと思うよ？」

苛立つアリサを諫めるのは、ゆるくウェーブのかかった紫色のロングヘアで優しそうな雰囲気をもつ美少女、月村すずか

両名とも高町なのはの古くからの親友である。

「なのはのやつ、最近はお寝坊なんかしたことなかったのによ」

二人に続いて声を上げるのは、小学生「あたしは大人だ！」と見間違えるような身長と赤い髪に吊り目で大きな瞳をもつ時空管理局

本局航空隊1321部隊所属　ヴォルケンリッター鉄槌の騎士であるヴィータ三等空尉である。

「まあ、おそらくやけど、長いこと仕事が続いたから、久しぶりの長期の休暇で気が抜けたんやろ」

そう語るのは、ショートカットの茶髪で京都風関西弁でしゃべるため「なんやて？」

時空管理局特別捜査官八神はやて一等陸尉だ。

各言う4名とも現在私服である。

そこへ

「いめ〜ん」

聖祥中等部の制服を着たなのはが走ってやってくる。

「あんたね、一体どれだけ待たせるつもりよ！そもそも、なんで制服なのよ！」

アリサが到着したなのはに一気にまくし立てた。

「だって、今日始業式だよ……………ってなんでみんな私服……………あ……………」

なのははアリサの質問に答え、皆の格好を見ていき、そこにあるはずがないヴィータの姿を見てそこでようやく気がついたようである。

「なのはちゃん、今日は4月7日だよ」

「そやで、今日は長期任務から帰ってくるフェイトちゃんを出迎えるっていう集まりやで」

「うっ……寝坊して慌ててたみたいなの……」

「まあいいじゃねえか、それよりさっさと行こうぜ」

ヴィータの鶴の一声でこの街での転送地点となっている月村邸に向かった。

なのは達が月村邸に到着してすぐ庭がまぶしい光に包まれ光が収まると同時に庭の中心にフェイトとクロノ、エイミィに本局に行っていたはずのシグナムの姿が現れた。

「フェイトちゃん……ん」

なのはの呼び声に気がついたのか、フェイトは声のした方向を見ると、親友達が出迎えてくれていた。

サプライズな出来事にフェイトは内心びっくりするも、嬉しそうに親友達に駆け寄った。

「なのは、アリサ、すずか、はやて、それにヴィータも」

「お疲れ様、仕事大変だったでしょ？」

「平気だよ。そこまで大きなものでもなかったし」

「しばらくはこっちにいられるんでしょう？」

「うん、しばらくはね」

そう言うと、フェイトはクロノ達の方を向く

「そついやなんでクロノ君達まで来てるん？シグナムも部隊の方の仕事あつたんとちゃうんか？」

はやてがみんなを代表したかのようにクロノに言う

「はい、主、今回少々特殊な命令が下りましたので戻ってまいりました。」

ピンク髪のポニーテールの美女シグナムが主であるはやてに向かって答える。

「そついうことだ、なのは、はやて、ヴィータ、夕方になったらとりあえず家に来てくれるか？」

クロノがそつなのは達に告げると、彼女達は局員の顔をして黙って頷いた。

夕刻、ハラオウン家のリビングにかつて闇の書事件にかかわった魔導士達が勢ぞろいしていた。

クロノは人数がそろつたことを確認し、空中モニターを展開させた。

「今回、本局の上層部から管理局全局員に命令が下つた。ユーノが発見した石板に書かれていた封印の棺というものが目撃されたという情報が入り、上層部はその棺を最重要搜索指定ロストログアとし

て搜索せよとの命令が下りたんだ。」

クロノが命令の概要を説明する。

「クロノ君、封印の棺って？」

なのはが封印の棺について尋ねるも

「それが、まだ詳細は分かっていない。ユーノ達無限書庫の職員達が現在最優先で検索中だ。ただ、目撃情報によると、黒い棺に十字架が刻まれているという話だ」

「それとアースラのメンバーが地球に着たことにはなんか繋がりあるんか？」

はやての疑問にはエイミイが答えた

「それがね、地球って過去に何度もロストロギアが関連の事件があったんだって、なのはちゃんもはやてちゃんも魔法との出会いはロストロギアがきっかけでしょ？」

エイミイにそう言われてなのはとはやては頷く

「おそらく、上層部にこの世界を注目している人物がいるんだろう。そこでこの世界にゆかりのあるアースラとこの世界出身のなのはにはやて、守護騎士達に、フェイトが地球での搜索メンバーに選ばれたわけだ。」

「しかし、魔導士ランクはどうするんです、艦長？リミッターを掛けるのですか？」

シグナムが部隊における保有魔導士ランクの総量について尋ねる。

このように過剰戦力を集める際に裏技として、魔導士にリミッターを掛けてランクを一時的に下げることがある。

「今回はリミッターはなしと上から言われている。搜索は基本アー・スラメンバーが行うし、実質君たちの出番は棺が現れてからだな。だからリミッターもないし、普段通りに生活してくれればいい」

そこにクロノとフェイトの母リンディ・ハラウンが会話に入る。

「おそらくは三提督のお口添えがあつたのね、三人はこの世界の学校に通っているし、まだ義務教育期間だから」

その言葉にヴィータが三提督の面々を思い浮かべながら頷く

「あのじーちゃんたちならありえるな」

三提督をじーちゃん達と一まとめにするヴィータにシャルマルが窘めるように言う

「ヴィータちゃん、三提督の方々は偉いんだからそんな言い方したらだめよ。」

「いいじゃねーか、本人たちここにはいねーんだからよ」

その一言にリビング内に笑いが起こる。

「さて、搜索は明日からだ、みんなは普段通りに生活して緊急呼び

出しのときには集まってくれ、アースラはステルスモードで衛星軌道上で待機しているが、指揮本部は前と同じでここで行う。」

「了解」「」

全員がクロノに向かって敬礼する。

「はい、それじゃあ夕食にしましょう」

「はい」「」

リンディの一言で皆は夕食の準備に取り掛かった。

そして、このときより動き出していた悲しき運命の物語は加速していく、彼女達の意味とは関係なく……………

三度、この海鳴の地にて戦いの幕が上がる

【次回予告】

加速し始めた物語、そこに巻き込まれたエース達、彼女たちはこれから知ることになっていく、悲しき運命に従い幾たびの悠久の時を生まれ変わりながら闘ってきた騎士たちの存在を……………

そして現れる封印の棺と棺を狙う魔物、はたして封印の棺とはいったい何なのか……………

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第2話『黒き王の棺』

『封印の棺は破壊させてもらっどけ公僕！』

第2話『黒き王の棺』（前書き）

なんか、サブタイトルと内容があってないような気がする……

文章力なくてすいません。

いよいよオリ主の登場です。

第2話『黒き王の棺』

時空管理局、無限書庫内、ユーノ・スクライアは封印の棺について詳細を調べていた。

最初に棺と遭遇した部隊の報告書と共に、かつて起きたであろう同様の事件の内容を検索していたのだ。

そして、彼は一つの伝承にたどり着いた

「これって……はやくクロノに知らせないと」

ユーノはすぐに通信装置を展開していく

そのユーノの傍にあるモニターに映っていた文献の内容にはこう記されていた

『封印の棺に封じられし魂を喰らう魔物を求め、影の魔物は棺を求める。棺には触れてはならない、棺に近づくものは伝説の名を継ぐ騎士達の怒りを受けるであらう。』

4月8日午前5時、まだ夜が明けきらない早朝、海鳴市にある高層マンションの部屋にて美しい銀髪を持つ少年【御門鍊^{みかどれん}】は目を覚ました。

「ううん……もう、朝か……」

彼はベッドの上で大きく背伸びをすると窓のカーテンを開け、電気を付ける。

朝と言っても早朝のため朝日がまぶしいなんてことはない。

鍊の一日はこの時間から始まる。

朝5時に目を覚ましてインスタントコーヒーで意識を覚醒させた後、ジャージに着替えてジョギングを行う。

もちろん、出かける前にコーヒーメーカーのセットも忘れない。今日から中学の新学期だが、彼はいつも通り、ジョギングをするべく早起きをした。

インスタントコーヒーを飲みながらジャージをタンスから出しておく。

鍊自身インスタントコーヒーはあまり好きではないが、朝の時間を節約でき目ざましにちょうど良いことから、常に常備している。

『マスター、おはようございます』

彼がいつも身につけている銀色のブレスレットを右腕にはめると、中央にはまっている宝石が光り、言葉を発した。

「おはよう、相棒」

彼は相棒と呼ぶ自身の愛機に声を返した。

彼が身に付けたブレスレットは彼の愛機、レジェンドデバイス『ブリューナク』である。

そう、鍊は魔導師であった。彼が魔導師として目覚めたのは7歳のころ、アイルランドにいたころである。

鍊の父親は貿易会社を経営しており、その父親が趣味としていたアンティーク集めで見つけてきて、誕生日に鍊がそれをもたらしたことが鍊の魔法との出会いであった。

そして、彼は黒き王をめぐる宿命を受けた『白亜の騎士』の生まれ変わりであり、ブリューナクは白亜の騎士の専用デバイスである。その出会いは当然のものといえ、鍊は愛機との出会いで騎士としての使命を引き継ぎ、その運命を受け入れた。

そして、運命に立ち向かうべく、8歳のころ一人親元を離れ、御

門本家のある日本に移り住み、代々家に伝わっていた古武術を本格的に学んでいたのである。

『今日もジョギングからですか？』

「ああ、そのつもりだよ」

いつもと同じやり取りをして、鍊はジョギングに出かけて行った。

それから2時間後、鍊はジョギングと筋力トレーニングを終えて家にもどり、シャワーを浴びて学校の制服に着替えた。

彼の通う学校は私立聖祥大学付属中学校の男子校であったが、本年からとある事情で共学に変更された。

まあ、その事情とやらは生徒に知られることはないので、鍊自身も知ることはない。

といっても、小学校時代からのエスカレーター式で中学に上がった者が大半なので、男子は顔見知りがほとんどだし、女子も1年間別のクラスだったと考えれば今までと変わらない。

そう考えながら朝食を済ませて家を出ると、まったく同じタイミングで隣の部屋の扉が開いた。

その扉から出てきたのは紅いロングの髪の毛をツーサイドアップにした聖祥中の制服を着た美少女が出てきた。

「おはよう、五和。今日はツーサイドアップか、いいね、似合ってるよ」

鍊がその少女に声を掛けた。

隣から出てきたのは鍊の従姉妹である【紅五和】くれないつわである。

かつて、紅家は御門家に仕える家であつたが、現在は一番近い親戚となっている。

「おはよう、鍊。朝から口説いてくるんなんてね、そういうセリフは許嫁に言つてあげなさいよ」

そう言つて、エレベーターのほうに鍊と共に歩いていく。

「許嫁つていつてもまだ結婚するまで5年はかかるんだぞ？俺男だから18までは無理だし」

「だからと言つて、誰かれ構わず女性を口説くのはどうかと思ひますが？」

「いやいや、口説いてるんじゃない、褒めてるだけだつて、女性は褒めて愛でるもの、これ家の家訓だし、てか、敬語やめろよ」

「それは家訓じゃなくて、あなたとあなたの父親だけのポリシーみたいなものでしょう？まったく、母さんも言つてたけど、変なところだけ遺伝してるのね」

「それを言ふなら、家の父さんだつて、五和の猫かぶりは母親譲りだつて言つてたぞ」

五和の母親は鍊の父親の妹に当たり、紅家に嫁いでいる。更に、鍊の母親は五和の父親の姉に当たっている。そもそも紅家は御門家に使える形であるが、鍊と五和は親同士が兄妹のため、普通の従姉妹と言うよりも兄弟のような感覚で育ってきているため、上下関係というものが全くないと言つていい。

おそらく一昔前の両家なら、五和の鍊への態度は禁忌であつたの

だ。

「猫かぶり？なにを言ってるのかしら？私は一度も猫を被ったことなんて……ちょっと聞いているの？」

「この辺にしようぜ、他の生徒もちらほら見えてきたぞ」

鍊がそう言うと、確かに通学路にはほかの聖祥の生徒の姿が見える。

「く……そうしておきます。」

そう言うと、五和は言葉使いを敬語に戻す。彼女は鍊の前や家族の前では普通に話すのだが、学校や知らない人物の前になると敬語を使いおとなしい性格になってしまう。

別に人見知りではないのだが、先に述べたように、五和は知らない人の前では母親譲りの猫かぶりを発揮してしまうのである。

その後は二人とも会話することなく一定の距離を保ち学校に到着した。

学校に到着すると、昇降口前に人だかりができていた。

おそらく、クラスの張り出しだろう。

鍊と五和はクラスを確認した後、自分のクラスへ移動する。

「一年ぶりにおんなじクラスだな、よろしく頼むよ」

「こちらこそ、ね」

教室に入る前にそんな会話をした二人、昨年は男女別だったため仕方がないが、小3から小6まで同じクラスで従姉妹のため何かと

協力してきたので正直お互いに同じクラスというのはやりやすかったりする。

教室に入ると鍊は窓際の後ろから一つ前の席に座り、続けてそのひとつ後ろの席に五和が座った。

「おい、なんで後ろなんだよ、隣でいいだろ？」

「そこは彼女の特等席になるみたいですし」

そう言って教室の入り口に視線を向ける五和にならない鍊も同じ方向を見ると、紫色の髪に軽くウェーブのかかった少女が驚いた顔をしてこちらを見ていた。

「す、すずか？」

鍊が名前を呼んだ直後

「鍊くん！」

すずかは小走りで鍊の目の前までやってきた。

「あの、また一緒のクラスだね、隣誰か座ってる？私が座ってもいいかな？」

「あ、ああ」

すずかにまくしたてられ鍊は反射的に頷いてしまう。

御門鍊と月村すずか、この二人は許嫁とされている。彼女の姉である月村忍と鍊の兄が古い友人らしく、更には月村姉妹の後見人の

人物が鍊の祖父の知り合いということもあって二人は10歳のころ許嫁とされた。

元来女好きの性格が父親から遺伝している鍊にとっては許嫁とは堅苦しい縛りである。と最初は思っていたが、すずか自身が美人であつたため、それに承諾、ただし18になるまでは自由に恋愛をしていきたいということを条件にしており、すずかも鍊の性格を知っているためかそれを承諾、すずかは自身が傍にいればそうそう簡単にほかの女性が近づいてこないであろうという計算の元承諾しているのであるが

「御門くん、五和ちゃん、久しぶり」

「ひ、久しぶり」

すずかと一緒に入ってきたのは小学時代に一緒だつた高町なのはとフェイト・T・ハラOWNであつた。

「お久しぶりです、高町さん、ハラOWNさん」

「二人も一緒か、すずかもだけど二人も大人ぽくなつたね。ところで、タヌキとバーニングは一緒じゃないのか？」

「はやてちゃんとアリサちゃんは別のクラスになつたよ。と言つても隣だけだね」

鍊の疑問にすずかが答えた。なのはとフェイトはと言うと、鍊の一言に若干頬を染めながら何かブツブツ言っている

「そうなんだ。（すずか、なんではやてとアリサとわかつたんだ？）あの二人がいないなら平和に…ぶほっ」

突如飛来した通学バックが鍊の頭に直撃した。

「誰と誰がいないと平和ですって!？」

「これは一回話しあわんといかんようやな、御門君？」

青筋を立てたアリサとはやてが教室の入り口から鍊を睨んでいた。

「おまつ、鞆投げてくる奴があるか！顔に当たったらどうすんだよ
！」

「べつに構わないわよ、鍊だし」

「まあ、御門君なら平気やろうしな」

「そんな短気だからいつまでも男が寄りつかないんだよ、アリサくんにはやてくん」

「なんやて（ですって）！」

「ふ、二人とも落ち着いて」

さすがに二人を諫めていると予鈴が鳴った。

「鍊、覚えてなさいよ」

「今度きつちりO H A N A S I Iやで」

そう言って二人は自分の教室に向かって行った。

「相変わらず、騒々しい」

着席してからずっと本を読んでいた五和がボツそつと呟いた直後担任が教室に入ってきた。

その日は始業式のみであったため、学校は午前中で終了し、なのはとはやてはフェイトの家に着ていた。

そこでクロノからユーノからもたらされた棺に関する情報を聞いていた。

「今日ユーノからきた報告と、棺に遭遇した部隊の報告書が届いてわかったことがある。エイミィ。」

「はいはい」

そう言ってエイミィは空中モニターを操作する。

「今回わかったのは封印の棺が現れる場所にはこの影のような魔法生物が出現することが分かった。」

「現在確認されてるのは、集団で現れる4足歩行型、少し大きいサイズの二足歩行型、それに飛行タイプの三種類だね。」

その説明と同時にその姿がモニターに映る。

「影っていうけど、これって実体はあるん？」

はやてが思ったことを発言する。

「いや、実体は無いどちらかというと魔力のみで構成されているようだ。この状態では物理系の攻撃は通用せず、魔力攻撃しか受け付けないようだ」

「この状態ってどういうことなの？」

「この生物なんだけど、実体がある生物、つまり動物に憑依するところがあるらしいの。そうすると物理攻撃も通用するんだけど、攻撃力も防御力も更には知性もあがるみたいなんだよ」

「じゃあ、憑依する前に叩いた方がいいんだね？」

「そうなるんだが、集団で出現することが多いため魔力切れになる可能性もある。だから出撃する時はチームを組んで行う。一人で対応することがないようにしてくれ」

「『了解』」

「みんな、それとなんだけどね、ユーノ君が発見してくれた文献に乗ってたんだけど、棺に封じられてるのは【魂を喰らう魔物】らしいんだよ」

「ああ、魂を喰らう……おそらくかなり危険なものだろう。それにこんな一節もあるらしい『棺に近づくものは伝説の名を継ぐ騎士達の怒りを受けるであろう』つまりは棺を狙っている勢力があるということだ。今回の任務、かなり厳しいことになると思う」

「そんなこと最初からわかってるの」

「うん、任務に簡単なものなんてあるわけないよ」

「そうやで、それにこれだけの戦力やなんとかなるはずやで」

クロノの発言に三人がそれぞれ答える。

「すまない、ありがとう」

クロノが改めて3人に礼を言った直後、アラートが鳴り響いた。

「どうした？」

「魔力反応増大、この反応、シャドウモンスター！」

エイミイの言葉に全員に緊張が走る。

「やはり、地球にも現れたか、一番近くにいるのはだれだ？」

クロノがアースラに連絡を取る

「ヴィータ三等空尉です。現場より5キロの地点にいます」

その報告を聞き、フェイトがクロノに切り出した。

「クロノ、私が行く。現場までならここからのほうが近いし、この中だと私が一番早く現場につける」

「……わかった、ただしヴィータが到着するまで無茶はするなよ？」

「うん、わかってるよ」

「よし、今回はフェイトとヴィータにまかせる、他のメンバーは待機していてくれ」

「フェイトちゃん気をつけてね」

「しっかりな」

「うん、いつてきます」

クロノの言葉にフェイトは頷きそのまま走って家を出ていく。

『広域結界展開完了』

その言葉を通信で聞いたフェイトは自らの愛機を取りだす

「行くよ、バルディッシュ」

『Yes, sir.』

「フェイト・T・ハラOWN、行きます！」

愛機が答えると同時にフェイトの姿はバリアジャケットに変わり現場へと飛翔した。

結界内部、魔力反応を感知した現場の森に近づいたフェイトはそこに異様な数の黒い揺らぎを発見した。

その揺らぎこそ、シャドウモンスターと呼ばれる魔物である

「すごい数、だけど、陸型だけ、これなら」

敵を確認したフェイトはバルディッシュを振るう。

『get , set』

「プラズマランサー、ファイア！」

フェイトの周囲に現れた金色の魔力スフィアが影を撃ち抜き霧散させていく。

フェイトはランサーを放ちながら木々の間を抜け、影が向かう方向へと進んでいく。

そして、少し森が開けた場所に出ると、そこに横たわる黒い棺にケルト十字をあしらった棺を発見した。

「これが、黒き王の棺！？」

目的物がいきなり発見できたせいでフェイトの思考が一瞬棺に向けられた。

その瞬間を狙ったかのように5体の影がフェイトに飛びかかった。

「しまっ」

フェイトが攻撃を受ける覚悟をした瞬間、白い魔力光が影を一気に霧散させた。

（今のは？）

フェイトは自身が助かったと分かり、今の攻撃が放たれた方向を見る

そこには白いフード付きのローブをまとった人物がいた。フードを被っているため男か女かはわからない。

（魔導師！？いったいどこの）

フェイトはすぐさま身構えバルディッシュをその人物の方向へ向ける。

「フードを取って所属と名前を答えなさい」

「やれやれ、助けたというのにもう敵扱いか、名前を聞くにはまず自分からと習わなかったのか？」

その人物は怯むことなく、どうどうとフェイトに言い返した。

その声からその人物は男だと分かった。

フェイトはその言葉で一層眉を寄せると、先に名乗ることにした。

「時空管理局、執務官、フェイト・T・ハラOWNだ。繰り返す、フードを取って所属と名前、目的を答えなさい」

その言葉にフードの男は肩をすくめる

「やれやれ、ここは管理外世界ではなかったのか？まあいい」

その瞬間、男は魔力スフィアを作りフェイトの方へ放った。

「くっ！」

フェイトはすぐ横に回避すると、さっきまでフェイトが立っていた真後ろで影が霧散していくのが見えた。

「黒き王を目覚めさせようとするやつは誰一人として棺には近づかせん、封印の棺は破壊させてもらう、どけ、公僕！」

そう言い放ち、男はフェイトに向かって行った。

【次回予告】

ついに戦いの火ぶたは切って落とされた。

出撃したフェイトを待っていたのは棺と魔物、そして正体不明の魔導師だった。また、海鳴の地にて魔導師達がぶつかり合う。

鉄槌の騎士と金色の閃光が出会った魔導師とは

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第3話『その名は白騎士』

『さあ、マスター、ついに始まりますよ。私たちの闘いが』

第3話『その名は白騎士』（前書き）

戦闘描写って難しいですね。

今回から通信とデバイスの発言は『
念話は【】で表現します。

ご意見等どしどし待っています。

第3話『その名は白騎士』

時間はさかのぼり、フェイトがなのは達と報告を聞いていた同時刻、鍊は雑木林のなかで武術の訓練をしていた。

本来、鍊のあつかう古武術『塵鳴流』は御門家に代々伝わる武術であり、御門本家にいる鍊の祖父、御門家先代当主、塵鳴流第39代継承者である御門宗煉のもとで本来修行するべきではあるが、御門本家は海鳴市から少し離れた場所にあるため、現在は週末のみ道場で祖父の師事の元修行していた。

そのため、平日は一人雑木林の中でブリューナクが魔力で生み出す魔力体と訓練をしていた。

魔力体は現在の鍊よりも遥かに強く設定されているため、一人で修行していても十分に事足りていた。

『さて、マスター、今日は何分持ちますかね？』

ブリューナクがどこか楽しそうに鍊に告げた

「今日こそ記録更新と行かせてもらおう。」

『では、15分に設定します。』

直後、魔力体が動き出し、鍊に向かって一直線に向かってくる。その動きは瞬きをした瞬間に見失うほどの速さだ。

「ちっ、こなくそ！」

鍊は魔力体の打撃に合わせて上段蹴りを放つが魔力体は前進しながらもしゃがむことで蹴りを回避し正拳突きを鍊の腹部に叩きつけ

る。

「かはっ……こ、のおおおお」

錬はのけぞりながらも、足を振り上げ魔力体を引かせると同時に魔力弾を撃ち更に距離をあけさせる。

「今度は、こっちの番だ！」

錬は体制を低くすると、足にありつた力の力を込める。

次の瞬間、魔力体の前から錬の姿が消える。

直後、錬が魔力体の真後ろに現れる。

「幻影拳！」

そのまま右拳を叩きつけ、怯んだところで左拳で魔力体を浮き上げらせるように下から叩きつける。

「追連脚」

直後、飛び上がり、回転を含んだ踵落としを撃ちこみ当たった衝撃を利用し更に飛び上がる。

「轟天烈震脚」

前身の筋肉を使って一気に撃ち落とした相手に向かって降下する。その攻撃が当たる瞬間

『塵鳴光纏衝』

右拳を空中に打ち上げるように振り上げると、衝撃波が巻き起り錬を飲み込んだ。

「ぐう、おおおおおお！塵鳴流、閃光狼烈破！」

衝撃波に飲み込まれて攻撃を弾かれた錬はそのまま別の攻撃を繰り出して魔力体の衝撃波を同じく衝撃波で押し返した。

そして、追撃に移ろうとした瞬間、

『マスター、魔力反応増大。これは、シャドウ？まさか棺まで現れたようです。』

ブリューナクのその台詞は自らの使命を果たすべき時が訪れたことを示す。

「遂に……か……」

知らず知らずのうちに錬は呟き、知らず知らずのうちに拳を握りしめる。

『場所は少し移動した雑木林の中ようです。』

「わかった。相棒、セットアップ、フォーム、ウィザード。バイザーも頼む。」

『yes・my・master。』

錬は純白のローブに身を包んだ姿に変わると、愛機が示す方向へ駆け出した。

現場へ向かう途中、周囲一帯が広域結界に包まれる。

「結果？」

『おそらく、別の魔導師と思われます。なにせよ、我々以外を近づけるのは危険です。』

「わかってる。棺は必ず破壊する。アレさえなくなれば……」

会話をしながらも駆けていた鍊は徐々に林の中の異変に気がついた。

ところどころに何か揺らぎの様なものが見えた。

『マスター、あれがシャドウです。』

「相棒に聞いてたのとまったく同じか。」

『さあ、マスター。始まりますよ、私たちの闘いが』

「ああ、行くぜ、相棒！シャイニングシューター！」

『shot』

鍊は白い魔力スフィアを無数に浮かべてそれを放ちながらシャドウを消していった。

そして、鍊は棺に近づくフェイトを発見する。

（フェイトside）

そして、時間は戻る。

男が私に向かって向かってくると同時に、私もバルディッシュを握りなおし相手に合わせて斬りかかる。

「はあああああ」

敵は無手、間合いに入られる前に持ち前のスピードと得物のリーチを生かして決めるつもりでバルディッシュを振り下ろす。

「甘い！」

そう言つと男はさらに一步踏み込み、バルディッシュの柄を腕で受け止め、開いた右手を私の腹部に掌をかざしてきた。

「しまっ……」

「不用意に飛び込みすぎなんだよ、執務官殿」

『photon buster』

直後白い魔力光が私を包んだ。

（side out）

うまく懐に入り込んでショートチャージの魔法を放った鍊は魔力が収まるのを警戒しながら待っていた。

理由は簡単、手ごたえがなかったからだ。

「高速移動……か」

【おそらくは、あそこまで潜り込みましたがまったく手ごたえがな

かった。だてに執務官ではないということでしょう】

錬の呟きにブリューナクが念話で答える。

【速い相手にウィザードは向かないな】

【ええ、ただの前衛タイプならともかく、高機動タイプ相手にウィザードでは……ランサーモードを推奨しますが？】

ブリューナクはデバイスの第2形態を進めるが、錬は首を横に振る。

「いや、ここはファイターで行こう。敵に手の内を見せすぎるのは良くない。それに武術を習得しているわけでもなさそうだ。それならファイターでも十分に戦える」

【わかりました。間合いを見誤りませんように】

「わかってる」

直後、上空から電撃を帯びた魔力スフィアが何発も降り注ぐ。

錬はそれを避けながら後ろに後退するが

『sonic move』

「はぁあああああ」

バルディッシュをハーケンフォームに切り替えたフェイトが斬りかかってくる。

錬は纏っていた白いローブを掴みそれを盾にするかのようにフェ

イトの方へ引き剥がす。

一瞬、フェイトから錬の姿が見えなくなる。

フェイトは構わずに魔力刃でローブを斬り裂くが、すでにそこに錬の姿は無かった。

直後、上空から

『バリアジャケット、パージ。フォーム、ファイター』

「轟天烈震脚！」

上空からガントレットとアンクレットを身につけた軽装でバイザーで顔を隠した錬が降下してくる。

フェイトは一步後退することでギリギリで避けるが、体制をたて直すよりも早く、錬が攻撃を仕掛ける。

「連牙弾」

蹴りの9連撃をフェイトは辛うじてシールドとバルディッシュの柄で防ぐ

「このっ！」

「流麗弾」

フェイトが反撃に出るが、そこを錬が魔力を圧縮した魔力弾で牽制する。

「くっ、反撃できない」

フェイトはラウンドシールドで魔力弾を防御する

『データ、四聖奥義リロード。』

「奥義……朱雀衝撃波！」

直後、錬の身体から炎が巻き起こり、朱雀の姿を持ってフェイトに襲いかかる。

「炎の変換資質！？」

フェイトは再びラウンドシールドを展開するが、徐々にシールドに罅が入っていく

（このままじゃ持たない）

「こらえる必要はない」

「なっ！」

真横から声が聞こえ、フェイトは横をむく、そこにはすでに次の攻撃を放つ準備をしている錬がいた。

「我はヴァイスリッターが一機、白亜のアーベント、その名、その身に刻みこめ！四葬幻影陣」

直後、錬の姿が四体に分かれ、同時に打撃を連続して放つ。防御中であつたフェイトはなすすべなく打撃をすべて受けてしまふ。

「かはっ」

「しばらく眠っている」

一つの姿に戻り、錬はフェイトの首筋に当て身をあてて気を失わせた。

「よし、あとは……」

『ええ、破壊しましょう。』

錬が再びロープをまとい、棺に近づいた時

『Schwalbe fliegen』

「っ」

錬はとつさにシールドを張るが、空から襲いかかってきた攻撃はシールドに罅を入れていく。

『バリア貫通攻撃！？』

「それなら！」

錬はバリアを解くと同時に空へと飛び上がるが、弾丸はそのまま錬の後を追ってくる。

「誘導型か！」

「でりゃあああああ」

錬の意識が弾丸に向いた瞬間、前方の上空から赤い騎士甲冑を纏ったヴィータが愛機グラーファイゼンを大上段に構えて突撃してくる。

『執務官の次はベルカの騎士ですか、ついてませんね』

「仕方ない、水よ！決り穿て！スパイラルウォーターバレット！」

錬は魔力スフィアを生み出すと、その魔力に水流が宿り、ドリルのように回転して錬を追ってくる弾丸に向けて放つ。

そしてヴィータの攻撃を真正面からシールドで受け止める。

「フェイトをやりやがったのはテメーか！？」

競り合いをしながらヴィータが尋ねてくる。

「だとすればどうする？小さき赤い騎士？」

錬はニヤリと口元をゆがめるとそう答えた。

「ぶっ潰す！アイゼン！」

『R a k e t e n f o r m』

グラーファイゼンからカートリッジが一発吐き出されると、光と共にハンマーから片側がスパイクに変わり反対側が推進剤噴射口に変わる。

「ぶち抜け！」

『J a w o h l』

噴射口から炎が見えると、鍊のシールドに罅が入る。それは見る見るうちに広がると、こなごなに砕け散った。

「ぐっ」

鍊はとっさに離れるが

「ラケーテンハンマー」

ヴィータは一気に加速して間合いに踏み込んでくる。

「ふざけるなあああ！」

『p h a n t o m m o v e』

鍊の叫びと同時に魔法陣が現れ、膝を曲げると同時にブリューナが高速移動魔法を使用する。

筋肉の伸縮と同時に高速移動を行うことによって通常の高速移動魔法よりもさらに速い移動を可能にした魔法である。

目にした相手にはいきなり消えたか、いきなり目の前に現れたかのような現象に陥る。

この魔法は塵鳴流を学ぶにあたって鍊が習得しなければならなかった魔法である。

塵鳴流の学ぶにあたってまず大切なのはその驚異的な速さ、通称神速と呼ばれる歩法を可能にすることが前提である。

そしてその奥義にあつては神速を超える超神速を身につける必要があった。まだ完全に超神速を使えない鍊はこの方法を持って疑似的にスピードを超神速の域に持つていくという方法を思いついたの

だ。

「塵鳴流、奥義！瞬牙！」

その一瞬でヴィータの懐に入り、両の拳を顎と鳩尾に向かって放つ。

だが、さすがは歴戦の騎士、本能的に後退して拳の威力を最小限まで減少させた。

「ぐっ……おまえ、なにもんだ！」

ヴィータは睨みつけながら錬に対して声を荒げる

「ほう、鉄槌の騎士は覚えていないと見えるな」

「何！？」

「ならば、再度名のろう。我が名は白騎士、白亜のアーベント、棺を破壊するものだ！」

そう言っ、錬は魔力を収束させ、砲撃魔法を放つがそれはやすやすとヴィータに回避される。

「砲撃ならなのはの方がもつと速ええ」

そのまま接近してくるが、錬は魔力弾を放ち一定の距離を保つ。

【このままじゃじり貧です】

ブリューナクが声を掛けた時、棺が置かれている方向から魔力が

溢れた。

「何!？」

『転移!？』

魔力が収まると、棺の姿は跡形もなく消えていた。

『時間切れですか……やはり、棺は巫女姫の力で長く出現はできないようですね』

「そのようだ……が、このままではこっちも退けない」

棺が転移したせいでヴィータの攻撃も止んでいた。

だが、それもつかの間、ヴィータはこっちを睨んできている。

「おまえ、一緒に来てもらうからな!」

(どうする……セカンド、使うか?)

鍊がブリューナクのセカンドフォームを使おうとした瞬間

【援護するからさっさと退きなさい】

念話が響いた瞬間、長距離から細い翠と紅の魔力光が幾筋も飛来する。

『マスター今です。』

「フォトンスパーク!」

ブリューナクの声と共に、鍊は魔力スフィアを爆発させて周囲を光に包みそのすきに撤退した。

〈ヴィータ side〉

いきなりどこからか射撃魔法が放たれたと思うと、白騎士は魔力スフィアを爆発させてそのすきに撤退した。

『ヴィータ、大丈夫か？』

「うん、大丈夫だよ、はやて」

『そか、じゃあ、フェイトちゃん連れて戻ってきてな』

はやてからの通信でようやく我に戻った私はまだ気を失っているフェイトのところに降りていく。

「おい、フェイト、大丈夫か？」

フェイトをゆすると、ようやく目を覚ました

「う……うう、ヴィータ？」

「おう、大丈夫か？」

「うん、なんとか。特に怪我もないみたい」

怪我がない？気を失ってたのに？

「それで、棺は？」

「ああ、どっかに転移しちゃった。どうやら一筋縄ではいかねーみたいだな」

「うん、敵もいるみたいだし」

そう言って、私はフェイトに肩を貸してハラオウン家に戻った。

【次回予告】

ついに始まった闘い。

白騎士と名乗る敵の出現に戸惑うアースラの面々、敵の正体と棺の謎は深まるばかり

とある夕暮れ、夜天の王とその剣の騎士はとある主従と出会ふこととなる。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第4話『翠炎の聖少女』

『あなたが彼女を守るように、私も彼を守るの、そう、この命に代えても……ね』

第4話『翠炎の聖少女』（前書き）

遅くなつて申し訳ありません。

急に仕事が忙しくなつて執筆する時間が減つてしまいました。

少しずつ更新していきますのでよろしく願ひします。

さて、いきなりですが、ふと考えたことがあります。

皆さんが二次創作を書かれるに至つて、アニメやゲームをたくさんされていると思います。

自分がいつたい何がきっかけでゲームやアニメが好きになったのかをふと考えたわけです。

私の場合はアニメにはまるきっかけはガンダムや勇者シリーズ、エルドランシリーズ等といったロボットアニメなのですが、みなさんはいつたいなにがきっかけだったのでしょうか？

次回から前書きにはまったきっかけの作品の紹介を書いていこうと思います。

もしよければ感想板等に皆さんがまった作品やお勧めなどがあれば書き込んでいただければ幸いです。

ではでは、光を継ぐもの第4話始まります。

第4話『翠炎の聖少女』

その家系は代々、血を重んじ、力を受け継がせてきた。

時には陰陽を、時には魔術を、そして時には武術を……

其の家系はある一族に恩を持ち、子孫代々に至るまでその一族の影となり仕える

その家、名を『紅』と言う。

フェイトとヴィータが帰還したハラオウン家では先ほどの戦闘について会議が行われていた。

内容は例によって幻影魔物と先ほどの戦闘で現れた白騎士についてである。

あらかじめフェイトとヴィータから報告がなされ、現在はエイミイによる戦闘力分析待ちである。

「じゃあその男はアーベントと名乗ったんだな、テストロッサ？」

「はい、シグナム」

「アーベント……確か、夕暮れに開かれる演奏会って意味やったと思うで？」

「演奏会？なんでそんな名前なの？」

「おそらくは通り名だろう。白騎士が一騎、白亜のアーベント……一騎と名乗ったということはつまり白騎士は一人ではないということか」

皆が話している間、ヴィータはずっと物思いにふけていた。

（あいつ、あたしを知ってた………どういうことだ………思い出そうとしても昔のことって上手く思い出せねえんだよなあ。それにフェイトの奴が怪我ひとつしてねえって………）

「どうしたの、ヴィータちゃん？」

「なんか気づいたことでもあるんか、ヴィータ？」

考え事をしていたヴィータに気がついたなのはとはやてが声を掛ける。

「ん？あ、なんでもないよ、はやて。さてつと、あたしはそろそろ帰る。あんまり遅いとシャマルが料理始めちまいそうだしな。」

そう言つてヴィータはサツサツとハラオウン家を出て行った。

「どないしたんや、ヴィータは？」

「うん、なんだかヴィータちゃんらしくなかったなの」

「私と帰ってくるときからあんな感じだったよ。」

なのは、はやて、フェイトがヴィータの様子について話していると、戦闘分析が終了したようだ。

「はいはい、みんな、分析終わったよ」

エイミイの一声と同時に空中パネルに白騎士の解析データが表示された。

白騎士 アーベント 魔導師ランク推定A 戦闘タイプ：近距離
格闘及び中距離射撃型

魔力変換資質：炎、水

「変換資質が2つ？」

「そんな、変換資質を持っているってだけでも珍しいのに、炎のほかに水も！？」

フェイトはなのはの呟きに先ほどの戦闘で実際に見た炎の変換資質以外にも資質があることに驚きを隠せないでいた。

「変換資質は生まれ持ったものが多いから、二つ以上持つてる人がいてもおかしくはないだろうけど、彼はちょっと異常だよ。」

「どうしてなん？」

はやての疑問にクロノが答えるように回答する。

「変換資質とは無意識的に魔法に属性を持たせることだ。例えばシグナムなら攻撃が炎熱系、フェイトなら雷系が自然と付加される。」

「そんなんは言われんでも訓練校で習ったで？」

「主、白騎士の攻撃を見てください」

そう言って、シグナムははやてに画面を見るように促す。

『朱雀衝撃波!』

画面では白騎士が炎の鳥を形どり攻撃していた。

「この攻撃は魔力を炎に変えて攻撃しています。攻撃形態からみて術式はベルカのものに近く感じます。そして次はこれです。」

シグナムは画面を操作すると、アーベントがヴィータと闘っているところに切り替わる。

『水よ! 決り穿て! スパイラルウォーターバレット!』

ヴィータのシュワルベフリーゲンを相殺させた魔法が映る。

「これはミッド式だね。ミッドの魔法陣が出てる」

「水の魔力弾……一定方向に回転させることにより破壊力を増しているのか。なるほど、ただの魔力を回転させるのは難しいが風や水、炎に属性変換された魔力弾ならこう言ったことも可能か」

その映像を見てエイミィとクロノがその攻撃を分析していく。

「これはAランクだからって甘く見るわけにはいかないね」

「せやな、私が一人で戦闘になったら瞬刹されるやろうし、最低でも二人一組で当たるべきと思う」

「そうだね、でも組み合わせはどうする?」

この場にヴィータがいないのに決めていいのかなのはが提案する。

「ヴィータはザフィーラと組んでもらうわ。このメンツなら、なのはちゃんとフェイトちゃん、私とシグナムでええか？」

「うん、いいよ。はやて。なのはにはまだ無理させたくないしね」

「私も構いません。高町、復帰してまだ間もないんだ。Sを取ったからと言って無理するなよ」

「うう、わかったなの」

フェイトとシグナムが同意を示し、なのはも首を縦に動かし承諾した。

「近接と遠距離のペアで組んだのか」

「そやで、まあ基本やしな」

クロノの呟きにはやてがニヤリとしながら答える。

「なるほど、これならロッサが心配するほどではないか。」

「ロッサ？ロッサがどないかしたん？」

「いや、なんでもない。はやて、この事件が解決したらお望みの指揮官研修、推薦状をだしておく、今回は前線指揮官として頑張ってくれ」

いきなりの発言にはやては驚き、困惑する

「私が前線指揮！？できるやるか……」

「大丈夫、はやてならできるよ」

「そつだよ、がんばってはやてちゃん！」

親友二人に励まされ、はやては決意を新たにす。

「よし、いっちょやったるで！」

その決意にみんなで盛り上がっていると、リンディから夕食ができたとの声がかかり、その日の会議は終了となり、はやてとシグナムはハラオウン家を後にした。

【鍊の自宅】

戦闘から離脱した鍊はまっすぐ家に戻っていた。

シャワーを浴びて部屋着に着替えるとリビング横にあるグラントピアノが置かれた部屋に向かいピアノを弾いていた。

ピアノを弾くのは鍊の日課であり精神を落ち着けるための一つの方法であった。

しばらくピアノを弾いていると、玄関が開く音が聞こえた。

いつも玄関にはかぎが掛かっているのでこの家に入れるのは合鍵を持っている人間のみである

実家の家政婦かメイドならインターホンを押すし、基本来るのは鍊が学校へ行っている時だ。

それを除くと合鍵を持っているのは婚約者である月村すずかとも

う一人なのだが……

今回の来客者はすずかではないらしい。

そもそも彼女なら入る前に一度インターホンをならすからだ。となると、合鍵を持つもう一人しかいない

「今日は『愛の夢』？相変わらず素敵な音ね、アーベント」

部屋の外から声が掛けられる。

錬は曲を続けながらその声にこたえる

「ありがとう、今日は助かったよ、^{ジャンヌ}聖少女」

「そう思うなら、私のいないところであまり無理しないでね」

「わかった。じゃあ少し付き合ってくれるか？」

「何かあったの？」

錬の言葉にジャンヌと呼ばれた女が返答する。

「因縁かな、見つけたよ。『闇の書』をね」

その言葉にジャンヌが息をのむ

「じゃあ、回収しないといけないわね。闇の書に記されたあの『魔法』を」

「ああ、それじゃあ、行こうか」

そう言って錬は白いローブを纏い、家を出た。

【住宅街】

ハラオウン家を出たはやてとシグナムは買い物をするため、少し遠まわりをして帰る途中であった。

「なんとかヴィータが間に合ってくれたみたいでよかったわ」

ハラオウン家を出たはやてにヴィータから電話がありシャルの料理阻止には完了したが、冷蔵庫に何も無いとの連絡があったのだ。

「そうですね。ですがやはり長期間家を留守にすると食材のことをつい忘れてしまいます」

「せやな、でもしばらくはこっち見たいやし、シグナムもおるからチヨイ多めに買って帰ろうか」

「はい、そうですね。」

家族の会話をしながら歩いていると、急に周囲の色が灰色に変わる。

「これは!」

「封鎖結界!?主、下がってください」

シグナムがすぐさまはやてを下がらせると、はやては念話でクロノやなのは達に連絡しようとする。

「あかん、ジャミングされとる」

「一体誰が？」

するとはやての後方から白いロープで顔まで隠した男が現れる。

「っ！白騎士か！？」

シグナムがはやてと場所を入れ変わろうとするが、水の魔力弾で牽制され動けなかった。

「一体なにが目的なんや！」

はやてがアーベントに向かって声を質問を投げかける。

「剣の騎士と見受けた、ならばお前が闇の書の主か？」

「「！」「」」

アーベントの言葉にはやてとシグナム両名の顔がこわばる

二人にとっていや、八神家の人間にとって「闇の書」という言葉は過去の楔でしかない。

しかも、地球の海鳴でこのことを知っているとしたら、もしかすると闇の書事件で巻き込まれた魔導士である可能性も少なくない。

「闇の書の王、恨みはないが其の魔道書を渡していただく。」

アーベントはそういうと同時に、はやてに向かって突撃する。

「させん！レヴァンティン！」

シグナムは自らの愛刀を出現させると、はやての前に出て横薙ぎに剣を振るう。

アーベントはガントレットで受け流すようにしてそのまま跳躍し、またもはやての方に立つ。

「貴様は邪魔だ、烈火の」

そう言つと同時にシグナムに向けて砲撃を放つ。

『photon buster』

近距離からのショートバスターにシグナムは思わずはやてとの距離をあげる。

それを見たアーベントが追撃しようとするが

「させへん！刃を持って穿て、ブラッティダガー」

はやてが最速の射撃魔法でアーベントを阻む。

「そちらから来てくれるとは、こつちとしては思つっぽだぞ？」

「バカにしんときや、私だって管理局の魔導士や、簡単にはやられへんし、家族だって守って見せる」

アーベントは追撃をやめると、はやてと対峙するように立った。シグナムは距離をあげ、自らをおとりにしようとするも、はやての攻撃でアーベントが追つてこなかったのに気がつくとい急いではやての元に戻るうとした。

しかし、飛行するシグナムに向けてアーベントがいる逆方向から幾条もの射撃魔法が走り、シグナムを妨害した。

「くっ、何者だ！」

シグナムは射撃を回避しながら射線軸の方向を睨む。

そこには赤い髪をポニーテールにし、膝下まである赤いズボンに緑と黒の胸元が開いたインナー、その上から朱い燃えるようなジャケットを着て、更にその上から白い外套を纏い顔にはアーベントと同じ形で緑のラインで淵どった黒いバイザーを付けた女性が狙撃銃を持ってシグナムを狙っていた。

「貴様、白騎士の仲間か！？」

「彼の言った通りね。本当に覚えてないみたい、いいわもう一度名乗ってあげる。」

「もう一度だと？」

女の言葉にシグナムが思考を巡らせる。しかし、彼女のような人物と出会ったことがない。

はやてに召喚されてからではないかもしれないが、かつての記憶は曖昧で思い出せない。

「私は白騎士が一騎、翠炎の聖少女^{ジャンヌ}、その名をしっかりと胸に刻みなさい！」

その言葉と同時に射撃が放たれ、シグナムは接近できないでいた。

「お前たちの目的はなんだ、黒き棺ではないのか？」

「そうよ、私の目的はあくまで棺、その目的のために【闇の書】が必要なのよ」

その言葉にシグナムはジャンヌを睨みつける。

「ならば、主の剣としてこの命に代えても主を守って見せる。貴様を倒し奴も倒す」

シグナムが宣言しながら剣を構える。

「そう、あなたは彼女の剣だものね」

その言葉にジャンヌは口元をニヤリとゆがませる。

「それなら私も宣誓するわ。彼の剣、そして盾として」

ジャンヌは腰に差していた片刃の直刀を左手で抜き、狙撃銃を右手に持ちバレルを短くする。

「あなたが彼女を守るように、私も彼を守るの、そう、この命に代えても……ね。」

直後二人の剣が交差した。

【次回予告】

二人目の白騎士は自らを聖少女と名乗り、アーベントの剣と語る。対峙するは夜天を守る剣の騎士。二人の従者の対峙と並行し、夜天

の王と白亜の騎士が対峙する。

なぜ白騎士は夜天の書を狙うのか、謎は深まり闘いだけが広がっていく。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第5話『光の魔法』

『この子はもう闇の書やない、祝福の風を受け生まれ変わった新しい力や、いくで、リイン、ユニゾンや!』

第5話『光の魔法』（前書き）

こんにちは、ラグナシアです。

今回はどうしてか難産だったのがありますが、ちょっとどうしてこ
うなった？

って感じです。

さてさて、今回のお題ですが、みなさんがハマったRPGってなん
でしょう？

私はこの小説でも設定で使っている通り「テイルズオブシリーズ」
です。初めてやったのは「PS版テイルズオブデスティニー」です。
これにはまったのは簡単な理由です。プレステを買った時について
きた体験版ディスクにデスティニーの体験版が入っていてやってた
ら簡単にはまってしまったんです。

ストーリーもそうですが、話の内容ができてすぐにどっぷり
ハマってしまいましたね。それに当時好きだったDEENがオープ
ニングを歌ってるってのもありますし、なによりリオン・マグナス
の話が切ない！

PS2版のディレクターズカットももちろん買いました。

てかほとんどのテイルズはプレイさせてもらってます。

さて、長くなりましたが皆さんはお勧めのRPGありますか？

私は9月のでる予定のテイルズ最新作【エリクシア】楽しみでしか
たないです。

ではでは、本編へどうぞ！

第5話『光の魔法』

く???く

とある場所にある一室、その中にはきらびやかな服を着て大きなソファ―に腰を掛ける男と、彼を補佐するように傍に立つ眼鏡をかけた秘書のような女性が1名と男の部下であるだろう青年がいた。

「クロノ・ハラウンからの定時報告によりますと、白騎士と名乗るものが棺回収を妨害した模様です」

その報告に男はやはりかと一言呟くと静かに目を閉じる。

「やはり文献と彼の言う通りになりましたね。どうされますか?」

男の反応を見て、秘書が男に声を掛ける。

「あの女を使え」

その言葉に青年は一人の該当する人物を思い出す。

「彼女が我らの命令を聞くとは思えませんが」

「ならば、奴の兄のことを盾にすればいい、そうすればあの娘は動くよ」

青年の言葉に男はそう返すと口元をニヤツと歪ませる。

「では、私が伝えに行きましょう」

「ああ、頼むぞ」

「はっ」

青年と秘書は男にそう返すと部屋を出て行った。

男は一人になった部屋でモニターに映る古文書のデータを眺める。

「必ず手に入れてやる。そのためにまずは……」

（結界内部）

上空でシグナムとジャンヌが剣を交差する中、地上にいるはやてとアーベントには動く気配がなかった。

いや、動く気配がないのではない、むしろ、はやてはシュベルトクロイツを構えたまま、自らに正対し動かないアーベントを警戒して動けずにいたのだ。

（あかん、完全にあつちに流れを持ってかれてる……うかつに動けば一気にやられてまう）

はやては内心焦っていた。まさかこうも早く白騎士の仲間が現れるとは思っていなかったのだ。

（仕掛けてこない、さすがは夜天の王となる器か、洞察力、観察力、状況判断、素晴らしいものだな）

アーベントは仕掛けてこないはやてを見てはやての評価をしていた。

取るに足らないような相手ならば、この時点で完膚なきまでに叩

きつぷすつもりであったからだ。

（これなら、多少は使える……か？）

そう考えていた時

「ああ、もう、待つのはうちには合わへん！クラウド・ソラス！」

我慢の限界が来たのか、距離をあげたまま砲撃速度の速いクラウド・ソラスを放つ。

『sanctuary wall』

直後、アーベントのデバイスが光の壁を出現させて砲撃を防ぐ。

「やはり、そう簡単には渡してはくれないか……ならば、奪わせてもらうぞ！」

『フォーム、ファイター！』

アーベントが駆けだした瞬間、彼が纏っていたローブが消え、ファイターフォームに変わったアーベントがはやての懷に潜り込む。

（まずっ）

はやてはとつさにシュベルトクロイツを盾にするとそこにアーベントの蹴りが入る。

「飛燕脚！」

攻撃は防御できたものの、アーベントの蹴りあげ技によってはや
ての身体が宙に浮き上がる。

「しもた！」

はやてが呟くが時すでに遅く

「飛燕墜迅脚」

アーベントはそのまま飛び上がり二段蹴りで更にはやてを撃ちあ
げると空中で身体を一回転させ、踵落としをはやての肩に叩きつけ
地上に向かって撃ち落とし、はやては近くの空き地に建てる小
屋へと激突した。

空中では地上とは逆の戦闘が繰り広げられていた。

互いに剣を持ち交差するように空中を駆けて剣を合わせる。

剣のみの闘いならば間違いなくシグナムが優勢だったであろう。

しかし、ジャンヌはもとも銃を使う中・長距離戦闘をメインとし
ている。

その為、右手に持っている狙撃銃を使い離れた状態でも攻撃を行う
ため、さすがの剣の騎士も苦戦を強いられていた。

そして、何十合も切り結んだところで両者が同時に動きを止める。

「片刃の直刀に逆手持ち……なるほど、まっとうな剣ではない、か」

シグナムがそう答えると同時にシグナムの騎士甲冑の右肩部が真
つ二つに切れ、そこから血が流れる。

「……………次で決めるわ」

そう返すジャンヌのバリアジャケットも刀を持つ左腕の袖が避け血をにじませる。

「それはこちらのセリフだ」

シグナムはそう言いながらレバンティンを鞘に納めると抜刀の構えを取る。

それを見たジャンヌは刀を鞘にしまい腰を落とす。

「真っ向勝負というわけか、しかし、貴様にそう時間を取られるわけにはいかない、決めさせてもらおう」

シグナムはジャンヌの構えを見てニヤリと笑うもすぐに表情を戻し顔を引き締める。

「シリウス、次で決めるわよ」

『心得ています、主』

ジャンヌの言葉に彼女のレジェンドデバイスである「天狼シリウス」が声を返す。

そして、次の瞬間両者が動いた。

「飛竜一閃！」

シグナムはレバンティンにカートリッジを一発消費させると、抜刀術と同時に剣形態から蛇腹剣形態であるシュランゲフォルムに切

り替え中距離攻撃を行う。

対するジャンヌは抜刀術と見せかけ、後方に飛ぶと同時にシリウスを狙撃銃からガトリング砲に形態を切り替えると、剣に向かって魔法を放った。

「サイクロンシューター！ファランクス！」

『fire』

魔力弾の弾幕がシグナムの剣を弾こうとするもその剣は魔力弾をもともせずジャンヌの首をめがけて進みもう少して直撃と言うところでジャンヌの姿が塵気楼のように消えた。

「何！？」

シグナムが驚くもつかの間、自身の真上に影が差した。

「塵鳴流暗殺剣一ノ剣、陽炎」

ジャンヌがシグナムの上空に現れすれ違う瞬間に左手で刀を抜きシグナムを斬り裂こうとするも、シグナムはとっさに左手で持っていた鞘でその刀を受け流す。

「二ノ剣、刹牙」

そのまま降下していたジャンヌはシグナムに身体を向けて刀を振るうと同時に風を纏った横一文字の真空波がシグナムを襲う。

『Panzergeist』

とつさの攻撃にレバンティンが主を守るために防御を展開するが真空波は防御ごと切り裂きシグナムの左腕を斬り裂いた。

「シリウス！」

『fire storm』

直後、ジャンヌの炎を纏った魔力弾の嵐がシグナムを包み込んだ。

「ふう……シリウス、あつちは？」

『あちらも終わりそうです。主、そろそろ飛行限界時間です。ホバ―ブーツの展開を』

ジャンヌの質問にそう答えると、ジャンヌは黙ってその指示にしたがった。

「いつつ……」

小屋に叩きつけられたはやてはなんとか体を起こす。

『はやてちゃん、大丈夫です？』

ふいに声が掛けられる。

今日はデバイスの中で寝ていたはずのはやてのユニゾンデバイスであるリインフォース？が衝撃で起きてしまったようだ。

「大丈夫や、リイン。それにしても接近戦になると手も足も出えへん……」

するとこちらに近づいてくる足音が聞こえる。

「休憩は終わり見たいやな」

『はやてちゃん、無理したらだめです。ここは逃げたほうがいいです』

リインははやてに逃げることを進言するも、逃げようにもシグナムを置いて逃げられるわけがなかった。

「まだや、まだうちはやれる」

そう言って足に力を入れて立ち上がり、アーベントを睨みつける

「さあ、闇の書を渡してもらうぞ」

はやてはその言葉を聞いて手に力を込める

（また闇の書っていうた……ゆるさへん、この子はもう闇の書やないリインフォースがあの子が命をかけて残してくれたこの書はもう闇ではないんや）

はやては痛む全身に力を入れて叫ぶ

「この子は夜天の書や闇の書なんて言わんといてんか」

「それが闇の書の正式な名前か、どちらにしる其の書はいただく。

『今の君では其の書にある力は使いこなせまい』

アーベントの言葉にはやては一瞬眉をひそめるも、自らの家族が守った夜天の書を渡すわけにはいかない。

その想いがはやての心をしめていた

「確かに、今の私にはこの子を完全に扱い切れてへんのはわかってる。でもこの子は私の家族が命をかけて守ったもんや、それに、この子はもう闇の書やない、祝福の風をうけ生まれ変わった新しい力や、いくで、リイン、ユニゾンや！」

『はい、です』

直後、はやてが光に包まれ、髪の毛の色が変わり瞳も緑色に変わる。

すると、夜天の書が浮かび上がり、とあるページが開かれる。

（なんや！？こんな魔法今まで見たことあらへん、いままでなんで書かれてなかったんや？）

はやてが光に包まれた直後、アーベントは驚きの表情を浮かべその場を動くことができなかった。

「この光……この輝きは」

アーベントの言葉をブリューナクが引き継ぐ

『間違いありません、これは、この魔法は巫女姫の魔法』

「『光の魔法……ライトオブデザイア』」

アーベントとブリユーナクの言葉が重なる。

上空にいたジャンヌもその魔法に気がついたのか、すぐにアーベントに声をかける。

「アーベント、撤退よ。アレが彼女に使える以上、無理に奪う必要はない」

そう言いながらアーベントの元へ向かうジャンヌだが、とっさに殺気を感じ身をひるがえす。

「逃がすわけにはいかん」

「くっ」

騎士甲冑がボロボロになったシグナムがジャンヌと切り結ぶ

「力を貸してくれるんか？ありがとな、必ず誓いこなして見せるからな。いくで、ライン」

『いつでもいけるです。』

「いくで！天の光よ、闇を包みこめ！ライトオブデザイア！」

はやてが杖を振るった瞬間、大いなる光が結界内を包み込む。

光がようやく晴れた時、はやての目の前には誰もいなかった。

「主、大丈夫ですか？」

「うちはなんとか、シグナム、白騎士達は？」

「すみません、光に包まれた後見失いました。それよりも先ほどの魔法は？」

「わからへん、急に夜天の書に浮かび上がったんや。それに白騎士が最後気になること言うとなし、少し調べてみなあかな」

そうして二人は騎士甲冑を解除すると同時に結界が破壊された。

「ま、今日のところは家に戻ってクロノ君に報告といこか」

「はい、主」

そう言うてはやてとシグナムは家へと帰路に就いた。

路地裏、そこにアーベントとジャンヌはいた。

「ごめん、助かったわ」

「いいさ、属性的に俺は耐性があるからな。ほい、治療終わり」

アーベントは回復呪文でジャンヌの傷を治すと武装を解いた。
それに倣いジャンヌも武装を解除する。

「それにしても、八神はやて……か」

「最後の夜天の王、闇の書の闇を討ち払っただけはあったわね」

「ああ、ライトオブデザイア……光の巫女姫の唯一の光属性広域殲滅攻撃魔法」

「うん、彼女がアレを使えるなら話は少し変わってくるわね」

鍊は頷きを返し少し思案するが、すぐに考えることをやめた。

「さてと、そろそろ帰るか、腹減ったし。五和、何食いたい？」

そう言っただけ彼女を振り返る。

ジャンヌ……五和は髪を整え終わると少し悩んで

「鍊特製ビーフシチュー」

ニッコリと笑いそう言った。

「おま、今から作るのか!？」

「当然、今日なんか助けたと思ってんの? ついでに外食却下だから」

そう言っただけ、五和は歩き始める。

「俺だって助けましたよね!?? ちょっと、五和さーん」

鍊は慌てて五和を追いかけて帰路に就いた。

『次回予告』

つかの間の平穩、鍊は学校に通い、許嫁や友人たちとの会話に花を咲かせる。

とある休日の昼下がり、高町なのはは魔法を自然公園を散歩中海鳴にはいないはずの友人と再会する。

そして、その後、彼女は目撃する。淡く輝く月光と白亜の騎士の闘いを…………

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第6話『墜ちてきた男／月の輝き、白き光』

『まあ、仕事ってなら受けるが、俺は管理局を信用してはいないんだ、これがな』

『あなたに恨みは無いけど、消えてもらっわ。行くわよ、セレネ！』

第6話前編『堕ちてきた男』（前書き）

長くなりそうなので前編後編に分けることにしました。

第6話前編『堕ちてきた男』

【首都クラナガンのとある店】

首都クラナガンにあるとある路地裏にある地下の店、そこに一人の男が訪れてた。

「君が噂の傭兵かい？」

店の中では、黒色の髪に前髪は明るい赤色のメッシュが入り、後ろ髪は肩まで伸ばされそれを綺麗な白いリボンで一つに縛った少年がコーヒーを飲んでいた。

男がその少年に声をかけると、

「そうだが…管理局のエリート執務官のレオン・アーヴィング殿がなんのようだ？」

少年はエリート執務官と呼ばれた男に不機嫌に言葉を返した。

「君に依頼がしたい。一度は管理局の門を叩いた君に是非とも頼みたいんだ。」

そのレオンと呼ばれた男の言葉に少年は手に持っていたコーヒークップを机に置く。

「エリート様とは初めてお会いすると思うんだがな、これが」

「君のことは少し調べさせてもらったよ、空牙遊騎くん。いや、ここでは、剣帝レーヴェと呼んだ方が良いかい？」

少年は一度眉をひそめると、肩をすくめて話を進めた。

「それで、俺に依頼したい話は？」

その言葉に、レオンはニコリとほほ笑み、資料を渡す。

「地球に行ってもらいたいんだ。詳しくは中の資料を見てくれ」

遊騎と呼ばれた少年はしぶしぶと資料に目を通していくと、その内容に知った名前があつたので目を見開いた。

「彼らの監視を君にお願いしたい。」

その言葉に遊騎はニヤリと口をゆがませた。

「依頼なら受けるが、俺は管理局を信用してはいないんだ、これがな」

そう遊騎が言うと、レオンはニツと笑顔を浮かべ

「これは、私個人の依頼だよ」

と返すと彼もニヤリつと笑いながら

「わかった、この依頼受けよう。」

遊騎がそう返答すると、レオンは通信端末と書類を置いて店を出て行った。

遊騎はそれを目だけで追うと、レオンが置いて行った書類に目を向けその人物達の写真を見て呟いた。

「……腐れ縁だな、どうも」

レオンが依頼をしていた同時刻

マドカ・F・アーヴィングの執務室

マドカは先日まで行っていた捜査の書類を整理していた。
今回の命令で一時捜査打ち切りになってしまったからだ。
ちょうどその時、通信端末に連絡が入る。

「はい、マドカです。」

その通信に出ると相手の画像は出ず、モニターにはsound
onlyの文字が出て、女性の声が聞こえてくる。

『マドカ・F・アーヴィング、上層部からの命令です。地球に向かい棺回収を邪魔する白騎士を排除せよ』

（上層部？またアイツの独断でしょうに）

その通信を聞きマドカはそう思いつつも通信を聞く、どうせ断ろうにも兄の身体の事を盾にしてくるのはいい加減わかってる。

『従わない場合はレオン執務官がどうなっても構わないと受け取ります』

（ほら、やっぱり……でも、これも義兄さんを守るため……ごめんなさい）

予想通りの切り口にマドカは少し思案したのち、其の通信に答える。

「了解しました。マドカ・F・アーヴィング執務官、地球に向かいます」

そう言って、マドカは通信を切った。

【海鳴市 聖祥大付属中学校】

錬が白騎士のアーベントとして管理局とことを交えてから数日が経過していた。

その間、まったく棺は出現しなかったが、影魔物は出現を繰り返していた。

しかし、錬と五和は対応することはせず。すべてなのは達アースラチームが対応をしていた。

錬と五和は目的物である棺が現れないなら管理局と関わるのを避けるために対応しなかった。

理由としては白騎士団とアースラチームの戦力差が大きい。

錬達が現在2人に対し、少なくとも4人の魔導師がアースラ側にいることが錬の中で気がかりの一つであり、更に純粋な魔法での勝負となれば推定Aランクの二人がフェイトやはやて、ヴォルケンリッターと言ったオーバースランクに勝てるはずがない。

これまでの優勢は全て魔力と武術を用いた奇襲にも似た短期決戦タイプの戦闘のおかげだと二人は理解している。

ブリューナクやシリウスの話では、鍊も五和も本来はSランククラスの魔力を保有しているらしいが、鍊にあつては魔力総量の殆どが封印されているらしく、ブリューナクでも解析が不能であり、五和は何故かリンカーコアが二つ存在し現存している魔力の運用法ではその魔力をまったくと言っていいほど使うことができず、シリウスと共に考案した独自の魔力運用法によりようやくAランククラスの魔力を使えるようになったところで、飛行魔法も長時間は使用が不可能な状態であるという制約の元戦闘をしている。

その分、二人には武術等の各家に残された戦術を魔法と同時使用することであろうやく、エースクラスと闘うことができている。

そのほかにも、管理局員が八神はやてやフェイト・T・ハラオウンと言ったクラスメイト、友人であることが関わりたくないという理由でもあるのだが……

話を戻そう。

そんなこんなで、管理局組はここ最近毎日戦闘をローテーションで繰り返しており、全員が影魔物と戦っていた。

影は夕方から夜に出現するため、学校が終わると飛ぶように帰る3人をほかの生徒が不思議がるのと同じように、鍊も不思議そうな顔をしていた。

五和は本を読みながら興味なさげにしているが、目だけは走って出ていくのは達に向けられていたりするのだが。

ちなみに、五和は普段はフレームレスの楕円の眼鏡を使用している。

しかも、学校では大人しくしているため、寡黙な美少女として人氣があったりする。

現在は四時限目の授業中といっても自習になったため、みんな好き勝手に席を離れて5月末に行われる修学旅行の話で盛り上がっている。

「それにしても、明日でようやく五月に入るっていうのに、もう修学旅行の話か？」

「明日で五月、です。五月末に旅行なんですからもう一カ月切っています」

鍊の呟きに後ろに座る五和が猫かぶりモードで答えてくる。

その返答に鍊はため息をつきながら言い返す。

「他の奴聞いてないんだから普通に話せばいいのに」

「何か言いましたか？」

そっぴいながら、五和は読んでいた本から顔をあげると目を細めて鍊を睨みつける。

「いえ、何にも……って、五和も旅行雑誌読んでののか？」

「私だって少しは楽しみにしていますから」

二人で話していると、すずかがなのはとフェイトを連れて席に戻る。

ってきた。

「鍊くん、五和ちゃん、修学旅行の自由行動の班は私たちと同じ班でいいよね？」

「二人ともまだ誰と組むか決めてないよね？」

「大丈夫なの、すでに班構成名簿に名前を記載しているの！」

と三人がまくしたてるように言う。

「私は構いませんよ。」

「別にいいけど、高町、そういうことは事前に承諾を得て取るものだと思っただけど？」

「御門くんはさすがちゃんをお願いなら事後承諾でもOKくれるってわかりきってるの」

と、なのはは当たり前のように言った。

「そうかい。じゃあ、あと一人誘ってもいいか？まあ、そいつが一緒に行動するかは分からないけど」

「鍊くん、誰のこと？もしかして……」

さすががもう一人と聞いたとたん少しだけ黒いオーラを纏う。

「男が俺だけっていうのもアレだし、俺のダチをちょっとね。何処回るかは任せるから、4人で決めててよ」

そう言って、鍊は席を立ち教室を出て行った。

鍊は教室を後にすると一度一回まで降りた後、屋上に上がった。

屋上の扉を開けて周囲を見渡すと、奥の少し影になっているベンチで顔に雑誌を載せて横になっている金髪の少年を見つけると、鍊はニヤリとわらい、気配を消してゆっくりと近づいていく。

そしてベンチのところに来ると、後ろ手に隠していた缶ジュースを少年の首筋にピタっとくっつける。

そのとたんに、少年がガバッと状態をおこして雑誌がベンチから落ち、少年は起き上がると同時に拳を鍊に突き出してくる。

鍊は軽くバックステップを踏んで拳の届く範囲から遠ざかる。

「おいおい、そんなにピリピリするなよ、剛」

剛と呼ばれた少年は青く澄んだ瞳を鍊に向けると、一度舌打ちして、ベンチに座る。

「鍊……なんのようだ？」

鍊は剛の座るベンチの横に立つと、屋上から見える海鳴市の町並みを見ながら持っていた缶ジュースを渡す。

「ほれ、差し入れた。おまえ、今日も朝からいなかっただろ？」

少年の名前は『真崎剛』^{しんざき 剛}といい、鍊とは昨年知り合い、とあるも

め事をきっかけにつきあうようになった少年であり、今年も同じクラスになっていた。

彼の席は鍊と逆サイドの廊下側最後尾の席であり、今日は朝通学してきたのに、1時限目の開始時にはすでに教室にいなかった。

その態度と自毛である明るい金髪から周囲の生徒や教師からは不良と思われるている。

「別に……俺の勝手だ」

このそっけない無愛想な態度が周囲から不良と呼ばれる一番の原因だろう。

「まあいいさ、そうだ、修学旅行だけだな。俺の班なら入るだろ？」

鍊がそう尋ねると、剛はジュースを飲みながら額にしわよ寄せる。

「勝手にしろ、俺は好きに動く」

そういうと、雑誌に目を落とした。

そんな剛に鍊はやれやれと肩をすくめるも、立ったまま剛が読んでいるファッション雑誌に目を向けるながら、これが剛には似合うなどと雑談をしている（といっても鍊が一方的にしゃべっているだけで剛は返事をしない）時だった。

「うおわあああああああ」

「ん？」

上空から声が聞こえたかと思い二人して上を見ると、空から同年

代と思わしき黒髪で前髪に赤色のメッシュが入った髪を白いリボンで縛り、白い服を着た少年が落ちてきた。

そう、その言葉通り、空から「落ちて」きたのだ。

「おい、剛」

「……言っな」

鍊のつぶやきを剛は一蹴する。

「今、あいつ……」

「言っな」

どうやら剛は今の光景を認めたくは無いらしい。

「いつつつ、なんで毎回こうなるんだ、こいつは」

その少年がむくりと起き上がると、ちょうど正面にいた鍊と剛に目が合ってしまう。

「おい、お前……」

鍊が少年に声をかけようとした時、少年は内心焦っていた。

（やばいな、まさかいきなり人に見られるとは……ここはとぼけた振りでもしておくが吉か）

「あゝっと、ここどこだ？俺……何してたんだっけ？」

とっさに少年はとぼけた振りをする。

「おい、頭打ったのか？」

「いやいや、大丈夫ですよ？」

「なぜに疑問形？」

二人のやり取りを見ていた剛が待ちきれなくなったのか

「おい、今、空から……」

落ちてきたよな？そう尋ねようとした時、少年が持っていた携帯のようなものが音を發した。

その音を聞いたとたん、少年は助かったとばかりに

「おっと、もう行かなくちゃ、じゃあな御二人さん」

そう言つて屋上から出て行つてしまった！。

「剛、アレ、なんだったんだ？」

「俺に聞くな」

その後チャイムが鳴り昼休みになったため鍊と剛は屋上を後にし昼食を取りに戻った。

第6話中編『堕ちてきた男／月の輝き、白き光』（前書き）

思ったよりも長くなってしまったので中編も作ります。

遅くなつてすいません。

第6話中編『堕ちてきた男／月の輝き、白き光』

鍊が空から墜ちてきた男を見た次の日、土曜日の早朝、高町なのは毎日の日課である魔法の訓練をするため、愛機レイジングハートと共にいつも訓練をする森林公園に足を運んでいた。

「じゃあ、今日もよろしくね。レイジングハート」

なのはは自らの愛機に声をかけると、リハビリを兼ねた軽い魔力循環を始めようとする。

『待ってください、マスター。あそこのベンチに誰かいます』

愛機の言葉ですぐさま魔力行使を中断し、愛機の言った方向をなのはが見ると、特徴的な上下の白い服、伸びた黒髪を後ろで縛っている白いリボン、そして前髪に入っている紅いメッシュ、それはなのはにとって忘れることができない人物の一人であると同時に、ここにはいるはずがない人間だった。

かつて、管理局入りしてすぐに配属された部隊に同期として配属された同年の少年。

彼は管理局にはなのは達より1年速く入局していた。

しかし、彼は独自の戦闘スタイルを持つがゆえに支給品のデバイスではデバイスの耐久力や魔力運用が上手くいかないことから訓練校を出てすぐデバイスマスターの資格を取る勉強と自らの専用デバイスの開発のために本局の開発部に入り、資格の取得と専用デバイスの完成と共に部隊に配属されていた。

その部隊では年少組がなのはと少年しかいなかったことと、中・遠距離戦型のなのはと接近戦特化型の少年と戦闘スタイルも組みやすいということでコンビを組んでいたこともある。

そしてなにより、入局してできた最初の同年の友人であった。

そして、彼は、なのはが撃墜された後、突如管理局を去っていた。

「うそ……遊騎……くん？」

なのはの呟きは聞こえなかったのか、遊騎はぶつぶつと何かを呟いていた。

「なんで手配されるはずのアパートの入居日が一日ずれてるんだよ。初日から野宿する羽目になっちまった」

遊騎は本来手配されているマンスリーのアパートで寝るはずだったのだが、何故か入居日が一日ずれてしまっていたのだ。

その為、夜は公園のベンチで寝ることになってしまった。

「転送も何故か空中に出るし、魔力結合もなんでか上手くいかなかったし……ついてないなこりゃあ……まあ地理は把握できただけ良しとするかな」

遊騎はまだぶつぶつ言っていると、後ろから自分に向けられた視線を感じた。

遊騎は何事かと思い自らの後方へと視線を向ける。

そこには遊騎を見て目を見開いている高町なのはが立っていた。

「た……高町……？」

恐る恐る彼女の名字を呼ぶと、なのはは目元に涙を浮かべながら遊騎に駆けよるとその手を取る。

「遊騎くん、久しぶり。なんで海鳴にいるの？どうして何も言わないで管理局やめちゃったの？今は何してるの？」

なのはは矢継ぎ早に遊騎に質問を投げかける。

「た、高町、て、て」

「手？」

なのははそう言われて遊騎の手をにぎりしめていることに気がついた。

なのはは一瞬で顔を赤く染め遊騎の手をすぐさま離す。

どうやら、再会が嬉しくて無意識のうちに掴んでいたようだ。

（あ……もう少し握ってくれててもよかったんだけど……）

遊騎は手を離されたことに少しさびしさを感じてしまう。

ここで説明しておこう。

遊騎にとって高町なのはは初恋の相手であり、今でも現在進行形で惚れている相手である。

同じ部隊で初めて顔を合わせた時にその笑顔に一撃で心を撃ち抜か

れたのだ。

そして、何を隠そう、遊騎が髪をまとめているリボンはかつてなのはが使っていたもので、遊騎の誕生日をいきなり当日になって知ったなのはが髪が長かった遊騎にプレゼントしたものである。

話を戻そう。

遊騎が先ほどまでであったなのはの手のぬくもりの名残を感じていると、なのはが声を駆けてきた。

「そのリボン、使ってくれてるんだね？」

「ん？ああ、高町がくれたものだしな」

遊騎は照れているのか後ろ手でポリポリと頭をかく。

「そう言えば、なんで地球にいるの？」

その質問に遊騎は一瞬返答を悩む

「前に高町の出身世界の話を聞いただろ？それでこっちに住もうと思っただけ。いろいろ申請してようやく許可もらって今日から管理外世界暮らしだ」

「そうだったんだ。びっくりしたよ。目の前のベンチで遊騎くんが座ってたから。管理局も勝手にやめちゃうし、心配したんだよ？」

遊騎はなのはからまっすぐに見つめられ、恥ずかしくなり目をそらす。

「いや……まあ……その、いろいろあったんだよ」

そうして話しているうちになのはは一度家に戻る時間になってしまふ。

『マスター、そろそろ一度戻る時間です。』

「え？もうそんな時間なの？そうだ、遊騎くん、朝ごはんまだでしょ？みんなに紹介したいし、家に食べにこない？」

遊騎にとってとても魅力的な一言である。

「あーうれしいけど、今日はごめん。ちょっとこの後用事があるんだ。」

そう、遊騎は言うところの海浜公園近くのアパートに住んでいることをなのはに告げると、その場を立ち去った。

「なんだか遊騎くん変わったね、レイジングハート」

『そうですね。少し堅くなったような気がします。それよりも一度戻りましょう』

「うん、朝の訓練できなかったし、お昼に神社の雑木林で結界張って訓練しよう。」

『ええ、そうしましょう。』

なのはも愛機とそう言葉を交わすと公園を立ち去って行った。

【雑木林】

なのはは朝食を取った後、すぐに家を出て雑木林へ向かう。

そして雑木林へ入るとすぐさま結界を張り魔法の訓練を開始した。

訓練を始めてしばらくがたったころ、

『master、結界内に侵入者です。近くにいます』

「え、嘘!？」

なのはは、とっさに木陰に隠れた。そして、その人影に愕然とする。

「あ、あれは……御門くん？」

サングラスをかけた、鍊だった。鍊は森の中を進んでいくと、少し広くなったところで立ちどまった。

「……………」

鍊の前にあるのは黒い色をした棺

(あれは、ロストログア!そんな、反応はなかったのに)

次の瞬間、鍊の姿が輝き、バリアジャケット「ウィザード」を展開した。

（御門くん・・・魔導士だったなんて・・・しかもあの姿って・・・）

鍊はバリアジャケットを展開させ、周囲を探る

（後ろに一つ・・・だが、覇気がない、問題ないか・・・あとは、2時の方向にやけにでかい魔力反応と殺気があるな。たく、今日は五和がいなくてのに）

直後、魔力弾を2時の方向へ発射する

「出てこい、俺をおびき出したんだろっ？」

そう声を掛けると、森の奥から、黒い髪を腰まで伸ばし、鍊と同じ年齢位の美しい少女が姿を現した。

「何のつもりだ、女」

「これも仕事です、悪く思わないでね。」

「その制服……管理局だな」

「だとしたら、どうだというの？」

俺の挑発的な攻撃に焦りなど見せることなく女は言い放つ

「時空管理局執務管、マドカ・F・アーヴィング。命令によりあなたを排除します。」

「白騎士……白亜のアーベント」

互いに名前を名乗り合うが

「白亜の騎士、アーベント。その正体は御門家の次男、御門錬、よね？」

錬は本名を言い当てられ、バイザーの下で驚愕した顔になる。

「これでも執務官だからね。相手のことくらいは調べるし、何より、この子を見れば理由が分かるはずよ」

そう言って、マドカは自らのデバイスを取り出し、バリアジャケットを展開する。

マドカのジャケットは、白いロングスカートに蒼いインナーを纏い、上から白と青を基調とした法衣を纏っている。その姿はまさに彼女に似合っていた。

デバイスは杖型で、先端に蒼い宝珠が浮かび、その周りに三日月をかたどった様な黄色いフレームが球体を保護し、その長さは、マドカ本人よりも長い。

『あれは、レジェンドデバイス……セレネ！あなたは蒼き月光なのですか！？』

「ええ、私が今代の『蒼き月光』よ。それより、セレネ、なんで黙ってるのよ」

『……ひさしぶりですね、リユウ』

マドカに声をかけられたデバイスがそれにこたえるかのように言葉を発し、鍊のブリューナクに声をかけた。

『セレネ…』

ブリューナクは昔の仲間との突然の敵対の再会に驚きを隠せずにいた。

「相棒、昔馴染みと会ったのはいいが話は後だ。」

「そうね。敵同士になってしまった以上、長話は禁物よね。あなたに恨みは無いけど、消えてもらっわ。行くわよ、セレネ！」

そういうと、デバイス2機は沈黙する。まさか、かつての仲間同士が殺し合うことになるとは思っていなかったからだ。

「セレネ、シューティングスター！」

『all right shooting star』

マドカが魔力弾を発射する、数は10発、小手調べというところであろう。

『master』

「ウォーターバレット！」

鍊も水の魔力変換を施した魔力弾を10発放ち、全弾相殺させる。

「なかなかやるわね。それなら、これでどう！」

マドカは空へ舞い上がり、杖の先端を地上の錬に向ける

『まずい！』

「砲撃か」

マドカの攻撃に気がつき、錬が対処行動に出ようとするが、

「遅いわ！」

『Lunatic baster』

なのはと同クラスの集束の速さと砲撃の速さで発射されたマドカの攻撃を、錬は発射と同時に空へ舞い上がり、

「光よ、撃ち抜け」

『photon baster』

ショートチャージの砲撃を撃ち返すが、

「ルナティックバスター！」

マドカもショートチャージで砲撃を放ち、互いの攻撃が衝突し、拮抗したのも一瞬、錬の砲撃が競り負ける

「く……」

錬は競り負けたと分かるとすぐさま砲撃を中断し、自動設定の防

御呪文でマドカの防ぐが、ダメージを負いその衝撃で吹き飛ばされた。

その際木の枝で切ったのか左腕から血が流れている。

「その程度なの？」

「く……そ……」

（なのは視点）

初め、現れたサングラスをかけた人が御門くんに似ていたから追いかけてみたら、まさかこんなことになっているなんて

この間に話があつた白騎士さんが御門くんだったのはとても驚いた。でも、それよりも衝撃的だったのはさっきの攻撃のぶつかり合いだ。二人ともショートチャージの砲撃なのにAAクラスの砲撃を放っている。女の人はそれ以上だろう。

御門くんはさっきの魔法のぶつかり合いで左腕から血を流している。砲撃でバリアジャケットが砕かれて気の枝が何かで切ったのかもしれない。

でも、なんで？

なんで、管理局の、しかも執務管が御門くんを攻撃するの？
おかしい理由は他にもある。結界の中に入った人の反応は御門くんだけだったはず。

となると、彼女ははじめからこの場所にいたことになる。

それにあのロストログア、最優先で回収するべきなのに全くその様子を見せないってことは、あれはおそらく偽物。

となると、アレで御門くんをおびき寄せたってことだ。

それにさっきからアースラやほかのみんなに連絡が取れない。おそらく向こうでも結界を張っているんだろう。

『マスター、どうされますか？』

レイジングハートがどう動くかを尋ねてくる。

「……うん、とりあえず、なんとかしてアースラに連絡しよう」

『わかりました。やってみます。』

はやく、この状況をどうにかしないと。
そんな気持ちばかりが私の中を渦巻いていた。

くなのは視点endく

「力の出し惜しみをしていたら私には勝てないわよ？」

マドカが錬に向かってセレネを向けながら言い放つ

「言われなくても！相棒！」

錬はすぐにブリューナクに指示を飛ばすと、ブリューナクもすぐにそれに答える。

『わかりました。過去の転生時習得術技の記録をロード、術技の使用可能。いけます！』

「よし、いくぞ！」

錬はマドカに向かって構えなおす。

『わかっていますね。今のマスターでは上級クラスの呪文はほとん

ど使えませんよ?」

そこに、ブリューナクの注意が入る。

「ああ、わかっている! 無数の氷刃よ、疾風の如く撃ち貫け!」

『freeze lancer』

鍊の前に魔法陣が展開され、無数の氷の刃がセレナに向かって飛翔していく

「ふん……セレナ!」

『Lunatic bastard』

マドカの砲撃魔法が氷刃を消し去っていく。

「大したことないわね」

まどかが呟いた瞬間

『phantom』

マドカの後方から声が聞こえた。

「なっ!」

「エリアル・レイド!」

ファイターフォームに姿を変えた鍊がマドカの後方、少し高い位

置から降下して、マドカを蹴り落とす。

マドカは反応できずに攻撃を受け、地上に落下する。

「つつ……最初の魔法は目くらましだったのね。」

マドカが立ち上がり上空を見上げるが、

『マドカ!』

「え!?!」

セレネが叫んだ瞬間、鍊がまたも後方に現れる。

「ここは、俺の距離だ! 噴竜撃」

「この……なめるな!」

『2nd form set up』

鍊が拳の二連撃を繰り出そうとした瞬間、マドカはセレネのセカンドフォームを起動させ、デバイスを大杖からレイピアの形に変化させる。その際、腕と足、肩と胸に蒼く輝く装甲が展開され、剣で鍊を薙ぎ払った。

「くっ……剣型……」

「これで、近距離も私のものね」

「そんなもの、やってみなければわからない!」

二人はそのまま幾度も攻撃を撃ちあいながら空へと上がっていく。

「なのは」

二人が撃ち合っているころ、なのははアースラに連絡しようとする度にも試みていたが、やはり全く連絡が取れない。

その間にも、錬はボロボロになっていく。

「このままじゃ、御門くんが本当にまけちゃうよ」

『私は、マスターに従います。マスターの思う通りに』

「レイジングハート……」

御門くんは白騎士のアーベントだった。つまり、私達と敵対しているはず。でも、マド力っていう執務官はなぜわざわざ御門くんをおびき出したんだろう。

私の中に確かに迷いというものが渦巻いていた。しかし、直後、私を促す決定的なことが起きた

「終わりよ！セレネ！」

『bright slash』

マド力執務官の持つデバイスの刃が蒼い魔力光を帯びると、その剣を御門くんに振り下ろした。

「うわああああ」

魔力を帯びた斬撃を御門くんが受け、墜落した。

「なのは視点end」

何十合打ち合っただろうか、拳と剣、間合いの長いマドカが有利にことを運んだ。

「く……くっ……」

「終わりね」

マドカがレイピアを大杖に戻し、魔力を溜め始める。

おそらく、次の一撃でけりをつける気なのだろう。

「悪く思わないでね。あの人を守るためなの」

マドカがそう呟いたのを錬は聞き洩らさなかった。

「あの人……？」

錬が呟いた瞬間

「ルナティックバスター！」

砲撃が放たれ、それは錬に直撃するはずだった

『Divine buster』

突如放たれた桜色の砲撃が、蒼色の砲撃を直撃し、二つの砲撃は相殺した。

「何!？」

「っ、いまの砲撃は!」

二人が砲撃の発射先を見ると、バリアジャケットを纏い、レイジングハートを構えた高町なのはが立っていた。

「なんで……魔力隠ぺいと不可視、通信妨害の結界を張ったはずなのに……まさか……最初からここにいて結界を張るタイミングが同じだった?」

マド力がなのはを見たまま呟いていると、

「御門くん!」

そう際に、なのはが鍊に駆け寄る。

「高町……さん」

その行動を見たマド力が正気に戻る

「どういっつもりですか、高町二等空尉?」

なのはは、マド力の方を向き言い放つ。

「待ってください。彼は私の友達なんです。」

「どきなさい。私は白騎士の排除の命令を受けているのよ。」

「でも、話を聞けば、協力もできるかもしれないじゃないですか」

「これが私の受けた命令なの。全てはあの人を守るため」

「それって、どういう……」

「もういい、高町さん」

「御門くん？」

「管理局に話すこともないし、協力する気もない」

「でも……」

「相棒、アレを使う」

『……使い切れますか？今のあなたに』

「できなきゃ、まける……そうだろ？」

『……2nd form drive ignition』

鎧の姿が、白いズボンとインナーになり、インナーの上に紺色に白いラインの入ったジャケットを纏い、腰、肩、足に白銀の装甲、手には指先が出るグローブの格好に変わっていた。

特徴的なのが、ブリューナクであろう。

ブリューナクはガントレットではなく、刃の部分が大きく両刃の槍になっていた。

刺すだけでなく、斬ることもできるようになっていた。

『lancer form set up』

「いくぞ……まだ俺は、戦える！」

第6話後編『月の輝き、白き光』（前書き）

後編です。

お待たせしてすみません。

第6話後編『月の輝き、白き光』

【雑木林】

「無理だよ、ボロボロなんだよ」

なのはの言うとおり、鍊の体には切り傷が至る所にできており、そのどこからも血が流れている。

「あんまり無理しない方がいいわよ」

「お前もな」

マドカも無傷ではなかった。鍊ほどではないが肌が露出しているところに痣ができている。

そもそも、マドカ自身は接近戦タイプではないうえに、蒼き月光の象徴であるレジェンドデバイスのセレネも、レイピアモードは存在するが、本来は遠距離型の支援タイプなのである。

『マドカ、気をつけて、アレに刺されると、近距離で二又に分かれている刃に刺されることになる』

「……傷の治療が困難になるわけね」

槍に変形したブリューナは、刃先がほんの少しだが二又に分かれている。さらに、横の刃も広くなっているので斬撃にも使用できる。

「今度はこちらから行かせてもらっ！うおおおおおおお！」

「っ！」

鍊は連続して突きを繰り出し、時折、袈裟切り、横薙ぎ等の斬撃を織り交ぜて攻めていく。

マド力はレイピアで攻撃を捌いていくも、すべてを捌き切れるはずもなく、少しずつだがダメージを負っていく。

その攻防がしばらく続いたのち、鍊が一瞬だけ攻撃の手を緩める
「もらった！」

『bright slash』

マド力が再び斬撃を放つが、その瞬間、鍊がニヤリと笑った。

「月影刃！」

マド力がセレナを振り上げると、すかさず、鍊が高速で突進し、槍の突きを繰り出す。

マド力は慌てて攻撃を中断し、刃を槍の分かれている部分に差し込んで受け止めるが、鍊は槍で剣をからめ取るように回転させ、上へと振り上げた。

そのためマド力の足が地面を離れ空中に浮く

「しまっ……」

「嵐月・燕！」

鍊がはなった魔力の旋風がマド力を追撃する。

「く……セレネ」

『p r o t e c t i o n』

マド力が防御呪文で旋風を防御するが、その隙をつかれ、鍊に連撃を許してしまう。

「尖月！」

槍を斜め上に飛び上がるように繰り出し、マドカのプロテクションにあてることで、さらに空中に打ち上げる。

「月破墜迅脚」

更に、全身の筋肉を使い、空中でファントムを発動させ、マドカよりも高い位置を取ると、蹴りでマドカを地面に叩きつける。

「きゃああああ」

ここぞとばかりに鍊は追撃を仕掛ける。

「いまだ！相棒！」

『w a t e r c a g g e』

鍊の魔法でマドカが水の球体に包まれる

「蒼華月瀑封！」

槍を袈裟から叩きつけて水球を叩き割る……しかし……

「調子に……乗るなあ！」

マドカはセレナを大杖に戻して槍を受け止めた。

「シューティングスター！」

間髪いれずに至近距離から魔力弾を鍊に撃ち込む。

「ぐう……がは……」

10発の魔力弾がすべて鍊の腹部に連続で同じところに直撃する。
鍊はたまらず、息を詰まらせてしまう。

「いいかげんにやられなさい」

「ぐ……」

マドカが鍊に杖を向けると、そこになのはが割って入った。

「もうやめて！」

「どきなさい、なぜ局員のあなたが邪魔をするの？」

「地球での活動はアースチームに任されてるはずです。」

「これは命令なの！いいから邪魔をしないで！」

マドカが魔力弾を操作して鍊にだけ攻撃しようとするが

「アクセルシューター！」

なのはが魔力弾を放ちすべてを叩き落とす。

「そう、あくまで私には攻撃しないで、彼を保護しようというのね」

「そういうことです」

「それなら、私の攻撃をすべて防いでみるからね」

マド力は、鍊を狙って、魔法を撃つが、なのはが自らの攻撃ですべてを相殺していく。

「さすがは不屈のエースオブエース、一度撃墜されても腕は落ちないようね」

「一体誰の命令でこんなことを」

「あなたの知るべきことじゃないわ」

『Lunatic baster』

「負けない。絶対に！」

『Divine baster』

互いの砲撃どうしがぶつかり相殺される。

同じタイプの魔導師の二人は実力も拮抗していた。だが

「はあはあ」

なのはの息が切れ始めた

「さすがのあなたも、しばらく現場を離れていたから息切れしているようね」

「負けない、守って見せる！」

（錬side）

意識が薄れていく、攻撃を受けすぎたか？

『……スター……マ……スター……』

相棒が呼ぶ声も遠くなっていく。このまま俺は死ぬのか・・・？
目的も達成できないまま、使命を全うできないまま次の俺へと転生するのだろうか？

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だイヤダ！

まだ為すべきことがある。

オレハマダシネナイ　ダカラ　ダレカ　オレニチカラヲ　モット
ツヨイチカラヲ

『力が欲しいか？』

その声が響いた瞬間、脳裏に巨大な門が過る。
門の扉は閉まったまま、その前に男が立っている。

誰……だ？

『初めましてだな、ミカドレン』

そいつは名を名乗らず、俺に挨拶してきた。その姿は男の後ろから光が来ているせいでハッキリとは見えない。

『力が欲しいか？』

欲しい。使命を果たすための力が

『そのためだけに力を求めるのか？』

あたりまえだ、俺が戦わないと、俺がアレを破壊しないと

『それは本当に君の意志か？』

そうだ、俺が決めた、御門錬である俺が

『それはちがう。君は白亜の騎士『ミカドレン』の使命に取りつかれているだけだ。そこに君という『御門錬』の意志はない』

ちがう、俺が戦わないとこれまで散って行った『白亜の騎士』たちの意志を無駄にしてしまう

『ブリューナクを満足に扱えていないのによく言っ』

それでも、俺は闘う。俺として、今代の白亜の騎士として、御門錬としてそして、この生を全うする

『そうか……じゃあ、ほんの少しだけ、私の力をあげよう。ただし、一つだけ条件がある』

条件だと？

『また会うことがあると思う。それまでに、君の意志を見せてくれ』

俺の……意志？

『そう、君の『ミカドレン』ではなく、『御門錬』としての意志。さて、告げる、このものに解き放つ力を』

門が、ほんの少しだけ開き、中から輝く水が流れ出し、世界に満ちていた水かさが増し、意識が遠ざかっていく。

『私は『ルー』次に会う時を楽しみにしているよ。御門錬、大丈夫、君は私と同じ武器を使っているんだから、心配するな』

直後、意識がブツリと切れたかと思うと同時に急激に浮上する。

『マスター！』

「相棒……さっきのは何だ……」

錬は先ほどのことを愛機に聞くがブリューナクはその問いには答えず。

『マスター、なぜだかは不明ですが、リミッターのようなものが一つ外れています』

昔、ブリューナクに説明された自身に掛かるリミッターのようなものが解除されていることを告げてきた。

それと同時に自身の内方魔力が増加していることに気がつく。

「なんだ、この知識は……はっ！」

そして、これまで知らなかった知識と戦闘方法が頭の中にあることに戸惑うが、すぐに思考を中断し、マド力を探す。そこには、マド力と戦闘をするのがいた。

く錬sideoutく

なのはは肩で息をしながらマド力の攻撃を防いでいた。

「あいつらは何をしているんだ？」

『高町さんがマスターを守っていたんです』

「……………（なぜ、敵の俺を助けようとする？ まあいい、考えるのは後だ）相棒、次にすべてを掛ける。俺と高町さんを転送させる準備をしておけ」

『ですが、この結界封鎖型で』

「大丈夫だ。結界を破壊する方法がある」

そして、錬は槍の形のブリューナクを構え、なのはに念話を送る。

（高町さん。とりあえず、君を連れて脱出する。一瞬だけが結界を破壊するから時間を稼いでほしい）

（御門くん、傷は平気なの？）

(問題ないよ。それじゃあ、頼むね)

(うん！)

なのはは、マドカが鍊に気づかないように誘導を開始する。

「いいかげんに諦めなさい」

「私はあなたには負けない！レイジングハート！」

『load cartridge』

「そう、あくまで彼を守るのね。セレネ！」

『limit charge』

なのははカートリッジで、マドカはレジェンドデバイスに宿る魔力を一部開放しチャージする『リミットチャージ』を行い互いが魔力を底上げする。

「デイベイン…」

「ルナティック…」

「バスター！」

両者の砲撃がぶつかり合う。

すさまじい魔力の奔流が周囲にあふれる。

そこでマド力が気がついた。

自分たち以外の魔力の奔流があることに

「何！？あれは！」

マド力が、鍊の方に目を向ける。異常な魔力がブリューナクに集束している。

「get set」

「一体何を！？」

マド力が呟いた瞬間、拮抗していた砲撃が同時に収まる。

その時、鍊が動いた。

「貫け、極光！『突き穿つ大いなる光の神槍』」

鍊が光を纏ったブリューナクを思いつきり上空に投擲する。

次の瞬間、大いなる極光が空を翔け、結界内を光が覆った。

光が収まったとき、そこになのはと鍊の姿はなく、マド力だけが残されていた。

「……………しくじった」

『マド力……………』

マド力が落ち込んでいると、空中に通信画面が展開される。そこ

に映ったのは、彼女の義兄、レオン・アーヴィングであった。

『マドカ、もういいから一度戻ってくるといい』

「ごめんなさい。勝手なことをして」

『彼からの指示だったのだろうか？仕方がないさ。それに結果的ではあるが、白亜の騎士の実力を知ることができた。はやく戻っておいで』

「はい、レオン義兄さん」

そう答えた後、マドカはその場から転移した。

【神社】

人気のない神社の境内になのはと鍊はいた。

「俺のこと、管理局に報告するのか？」

「わからないよ。でも、とりあえずは理由を教えてほしい……かな」

「……………教えられない」

「そう……………なんだ……………」

沈黙が二人を包む。

「報告したいならするといい」

「……………しないよ。御門くんが自分から名乗り出るまでは絶対に」

「……………」

「なにか理由があるんでしょ？それじゃあ、今度魔導師として闘ったときに私が勝ったら教えてくれる？」

「……………好きにすればいい」

「うん。好きにするね。」

それだけ言うと、鍊は境内から立ち去って行った。

一人だけ残されたなのは感じていた。

これは、かつておきた事件よりも激しい戦いが待ち受けているということを

白騎士同士の闘いの次の日、鍊は祖父から呼び出しを受ける。

そこで、彼は一本の魔刀と出会うこととなる。

その魔刀がもたらす御門家の始まりと御門の使命、そして鍊は過去と出会う。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第7話『魔刀、そして御門の使命』

『塵鳴流第39代目継承者、御門宗煉、推して参る』

第6話後編『月の輝き、白き光』（後書き）

結局、対マド力戦は依然投稿していた内容とほぼ一緒に……すいません。もっとちゃんと書けるように精進しますのでこれからもよろしく願います。

第7話『魔刀、御門の使命』（前書き）

今回は御門家の説明回の前半です。

いつもより短いです

第7話『魔刀、御門の使命』

マドカとの戦闘があつた次の日、鍊は五和と共に遠見市にある御門本家を訪れていた。

遠見市郊外にある巨大な面積をしめる日本屋敷、古くからその地にあり、周辺の家の人間達は、御門家に由来あるものが多く住んでおり、本家に隣接するように立つ紅神社も御門と繋がりができ、この土地に移ってきた一族の一つである。

昨日、マドカとの戦闘を終え、疲労困憊でようやく家にたどり着いた鍊を出迎えたのは前日の夕方から現状報告のため本家に戻っているはずだった五和であつた。

傷ついた鍊を見た五和は慌てて鍊の治療を行い、鍊をソファに横にして、久しぶりに鍊の代わりに料理を行う等、いつもは見せない年相応の女子の対応を見せるという行動があつたのだが、その話はまた別の話である。

五和はひと段落つくつとブリューナクから話を聞いた五和は御門本家に電話で連絡を取ると、数分のやり取りの後に電話を切り、鍊に向き直つた。

「本来は来週になる予定だったんだけど、急遽変更になったわ。鍊、明日本家に行くわよ」

「本家に？先週行つたばかりだろ？」

鍊は本来週末に本家に顔を出し武術訓練を受けていたが、最近は

棺の出現頻度から2週に1度に減らしていた。

「さっき聞いたことを宗煉様に連絡したの。そうしたら少し予定を早めるって」

五和のその言葉に若干の違和感を覚えながらも、鍊はその言葉に黙って頷いた。

そして、時間は戻り、鍊と五和は本家に入り、屋敷奥にある道場に通された。

御門家には道場が二つあり、一つは屋敷の門をくぐりすぐ右手にある剣道や柔道、空手合気道等の武道を教えるために一般に開かれた道場。

もう一つは、屋敷奥にある御門家が代々伝える塵鳴流を教えるための一族で塵鳴流を学ぶことが許された者だけに入ることができる道場である。

鍊と五和が道場に入ると、神棚に向かって座る男がいた。

その男が、今回、鍊を呼び出した、先代御門家当主第39代塵鳴流継承者、鍊の大伯父である御門宗煉である。

鍊と五和は静かに宗煉に近づくと、静かに後ろに座る。

「宗煉様、鍊様を御連れしました。」

五和が声をかけると、宗煉は座ったまま鍊達の方を向く。

「着たか。五和、ご苦労だった。」

宗煉がそう告げると、五和は礼をして鍊の右斜め後方に下がる。それが本家に出向いたときの五和の立ち位置である。

「御門鍊、御呼び出しにより、まかり越しました。」

「蒼き月光が現れたそうだな？」

宗煉はいきなりそう切り出してきた。

「はい。敵対する勢力の人間が今代の蒼き月光のようです。」

「そうか………うむ、両名共、着いてまいれ」

宗煉はしばらく思案すると二人についてくるように促すと、自らも立ち上がり道場の壁にある木刀掛けに近づくと、おもむろに一番上の木刀を下に引く。

すると、神棚の真下の壁が開き通路が現れる。

「隠し通路？」

「見たいね」

鍊と五和は驚いたような、呆れたような曖昧な顔をして先を進む宗煉を追った。

通路は人が一人通れるくらいの広さで薄暗く、長く作られており、決して避難用ではないことが明らかで、何かを隠すためのものであることがうかがえた。

しばらく進むと通路ははまだ先に続いているが、右手に扉が現れる。

宗煉はその扉の前で立ち止まると、その扉を開き中に入っていく。

鍊と五和もその後を追い中に入ると、室内は壁には全て本棚になっておりそのすべてに本が敷き詰められており、更に入りきれないのか床やテーブルにも本が積み重なっている。

「ここには御門家の歴史、成り立ち、使命……そして、白騎士、黒き棺に纏わることが知られる限りではあるが記されている。」

その言葉に鍊は眉を寄せる。

それもそのはず、宗煉には鍊がブリューナクと出会い、日本に一人で帰ってきたことをきっかけに白騎士のことを話したことがあるが、それ以前に父や母、ましてや祖父のほか、本家に通う人間からもそれまで一度として白騎士や棺に関しての話を聞いたことがないからである。

更に、部屋を見渡すと、これらの本はここ数年にまとめられたものではなく、数十年、いやもっと長い数百年近くのもものが明らかにあるのが見て取れた。

「待ってください。その話が本当なら、御門家はもともと白騎士や棺のことを知っていたとでもいいますか？」

しかし、鍊のその問いに宗煉は何も返さず、一冊の一番古そうな本を手にとると、部屋を後にし、通路を更に奥へと進んでいく。

その背を鍊と五和も追う。

二人が追いついたのに気がついたのか、宗煉は背を歩き続けながら話を始めた。

「御門家の始まりはそもそも、平安の世までさかのぼる。」

宗煉のその言葉は二人に口を挟むことを許さないという気持ちが込められており、二人も黙って話を聞くことにした。

「御門の本流は平安期、京にあった土御門と言う陰陽道の家系が始まりであった。その後、土御門家は家系で陰陽を扱うことができないものが出ると、その者を本家から遠ざけ山で武術を学ばせるようになった。」

土御門家は血を大切にする家系であったことから、力がなくてもその者を排斥したりすることはなく、土御門として別の力を付けさせた。

当時、朝廷の腐敗や藤原家の政治の専横等と時代が変わりつつあることをいち早く気がつき、武力を付けようとした。

しかし、土御門は名の知れた家系であり、同じ陰陽の安部等と同じく、政治にかかわることも少なくなかった。

その為、公に力を付けることができず、ごく一部の人間のみが扱える塵鳴流を編み出すに至る。

その後、源平の争乱の折、源氏に助力したことから、平家から圧

力をかけられ、土御門家は四散、本流は京に踏みとどまれたものの、昔日の権力はなく、細々と下級貴族と同じ程度扱いになってしまう。

四散した一族は日本各地に広がりその存在を隠して生き延びることになった。

そして、一人の者が、かの源九郎判官義経の奥州逃亡を手引きし、国外への脱出を手引きしようとして失敗、そのまま国外から出て行方不明となったこともある。

そして、時は進み、鎌倉時代後期になると四散した一族は再び京の本家の元集った。

その後、群雄が割拠した戦国時代初期、土御門本家から一人の男が出奔し、自らを「御門」と称し、とある小規模武家に使えることとなった。

「これが御門家の始まりだ。」

宗煉はそこまで一気に語ると一息ついた。

いつの間にか通路の終点であろうか、正面に大きな鉄の扉がある。

「そして、御門家初代当主、その男は赤眼の銀髪という日本人離れた容姿をしていたという。」

その言葉と同時に宗煉は扉を開く。

その先は大きな闘技場になっており、正面に祭壇があり、その中央に刀らしきものがつきたてられている。

そして、その正面の壁に肖像画が飾ってある。

その絵には男女が並んで描かれており、桃色がかった薄紫の腰まである髪で桜色の着物を纏う女性と、その横に立つ男性は長身で赤い瞳に銀の髪、そして銀色に輝く槍を持っていた。

その絵を見た瞬間、五和が驚いて鍊に視線を向ける。

その鍊も、自らとまったく同じ容姿をした人物画を見て驚いている。

「あのお方の名は『御門 鍊』御門家初代当主にして、塵鳴流剣術の創始者だ」

宗煉はゆっくりと祭壇横に立てかけてある太刀と日本刀の中間くらいの長さを持つ刀を2本持つと、内1本を鍊に向かって放り投げる。

「鍊、私はな、お前が生まれた時には大層驚いたものだ。何せ伝承にあった通りの子供が孫として生まれたのだからな」

そう言いながら宗煉は刀をゆっくりと鞘から抜く

「紅家との間の子であるから赤い眼は理解ができた、しかし、日本人離れたその銀髪を見てわしは思った。この子は初代様の生まれ変わりであり、伝承にあった子であるとな」

宗煉は抜いた刀の切っ先を鍊に向ける。

「鍊よ、今からお前には塵鳴流正統後継者のみが学ぶことを許される『塵鳴流剣術』の後継の義を行う。五和、お前はその立会人だ。」

鍊に向けた刀を切っ先はそのままで刃を上空に向け、柄を目線の高さに持つていき、左半身になって宗煉は構える。

「お前が持つ塵鳴流のすべてを持って、わしを打ち倒せ。さすれば、御門家に伝わる白騎士と棺、そして『ミカドレン』のことについての全てを教えてやる」

宗煉の言葉を聞き、鍊はしばらく思案したのち、腰に剣を帯刀する。

「わかりました。これまで学んだ全て、そして俺の全力をもって、あなたを討ちます。」

鍊は右半身になり前に出した右足に重心を置き、刀の柄に右手を添える。

いわゆる抜刀術の構えである。

鍊は塵鳴流を継ぐべく、塵鳴流剣術を習得してはいたが、槍術、格闘術と違い、いまだ免許皆伝をもらっていなかったのだ。

「相棒、サポート頼むぞ。俺だけの力じゃあ、じい様には勝てない」

『ええ、任せてください。』

鍊とブリューナクは一言だけ声を交わすと、再び宗煉を見やる。

「白騎士が一騎、白亜の騎士、御門鍊と聖なる極光ブリューナク、

いざ、参る！」

鍊の名乗りを聞いて宗煉はニヤリと笑うと、

「塵鳴流第39代目継承者、御門宗煉、推して参る」

宗煉が名乗り終えると同時に両者は相手に向かい突撃した。

御門の成り立ちと、自らの生まれた意味を知る鍊。

そして、決意を新たにした鍊の前に現れる、堕ちてきた男と二人の少女

運命のいたずらともいえるこの出会いは物語を加速させていく。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第8話『君の名は』

『御門鍊くん。なんだかとっても懐かしくて、切ない響き……鍊、あなたは一体？』

第8話『君の名は』（前書き）

まあ、いろいろとアレな内容になってますが、温かい目で見てください。

第8話『君の名は』

「白騎士が一騎、白亜の騎士、御門鍊と聖なる極光ブリューナク、いざ、参る！」

「塵鳴流第39代目継承者、御門宗煉、推して参る」

“ドンッ”という音と共に両者が突撃。

宗煉は刀をそのまま前に突き出し、鍊の喉元に向かって突きを放つ。

鍊は宗煉の胸を狙って抜刀し始めていた刀を無理やり軌道修正し、宗煉の刀を弾くも、宗煉はその弾かれた力を利用し、右回転し返す刀の切っ先を地面と擦らせるように鍊の左斜め下方から切りあげる。

(っ！)

抜刀術後、無防備になっていた鍊は、とつさに後方へバックステップして刀を回避するも、巻き上げられた土や石が勢いよく、鍊に向かって飛ぶ。

とつさに鍊はあいた左腕で目を隠す。

土ぼこりや石で視界を奪われないようにするためだ。

その隙を見て宗煉は鍊との距離を詰めると両手で刀を握り締め上段から鍊の頭に向かって刀を唐竹に振り下ろす。

鍊はその殺気を感じ身体を右にステップさせる。

直後、“ドンッ”という音が響き、先ほどまで錬がいた場所は地面が抉れていた。

『塵鳴流剣術 轟破断』

先ほど宗錬が放った技で、両手で刀を握り全身の力で相手の唐竹から振り下ろす型とその前に放ったように地面を抉り、土や石つぶてを飛ばす型、轟破断の派生技である『轟破断・烈』が存在する。

もともと、一撃の破壊力と振り下ろしの剣速に重点を置いた技であるが、烈のように、石つぶてを飛ばすことで牽制や間合いの外の敵を攻撃することや、相手の視界を奪うこともできる。

しかし、その反面、攻撃した後に一瞬ではあるが無防備になるという側面を持っている。

錬はその隙を見逃すことなく宗煉に向かって剣を連続で振るう。

（止まるな、止まるな、止まるな。止まったらやられる）

錬はようやくつかんだ先手を逃すまいと動きを止めることなく刀を振るう。

もとより、塵鳴流剣術は幼いころから宗煉に叩きこまれたこともあり、習得すべき技はほとんど体得している。

それでも、宗煉に一度も勝ったことがない錬は動きを止めると一気に追い込まれることがわかっており、塵鳴流を知り尽くしている宗煉に対して技を出すことをせずに攻め立てる。

宗煉もすぐに態勢を立て直すと、鍊の剣撃を全ていなししていく。

鍊が攻撃を始めて何十合撃ち合ったかわからなくなったところ、宗煉が先に動いた。

鍊の放つ斬撃に合わせて自らの刀を返し、鍊の刀に絡めるようにして上方へ巻き上げると同時に、左手を柄から離し、鍊の鳩尾に拳を叩きつけると、鍊の身体がくの字に曲がり、その隙について、左足で鍊の胴に蹴りを入れる。

『塵鳴流格闘術 幻狼槌破』

塵鳴流格闘術の幻影拳を昇華させた技で、相手の虚を突いて拳を叩きこみ、相手の体勢が整う前に蹴りを入れて地面に叩きつける技である。

「どうした、鍊。その程度か」

宗煉は刀の剣先を鍊に向け言葉を放つ。

「これは塵鳴流剣術秘奥義をお前が体得できるか否かを見極めるためでもあるのだぞ？」

「ぐっ」

鍊は意識が半分飛びかけていた。

先ほどの幻狼槌破が完全に鳩尾に入っていたためだ。

鍊が宗煉に一撃も当てられない理由は実力の差ではない。

そもそも、純粹な剣の実力ならばほぼ互角と言っていいたろう。ならば、なぜ鍊は宗煉に当てられないのか、それは圧倒的な速さの違いである。

塵鳴流はそもそも「各武術と同時に扱うことができる柔軟さ」「剣戟の速さ」「圧倒的な速さ」の三つに重点が置かれている。

その中で、「各武術と同時に扱うことができる柔軟さ」に関しては鍊こそが塵鳴流の中でもっともすぐれている。

実際にブリーナクに記録されていた『ミカドレン』達がこれまで習得してきた技や術を応用し、塵鳴流にもともと伝わっていた技と組み合わせることで新たな派生を生んでそれを使いこなすことができるからだ。

そして、「剣戟の速さ」これならば宗煉と互角であろう。

しかし、「圧倒的な速さ」これにおいて、鍊は塵鳴流に置いて基本となる速さ、神速の域に達していない。

高速移動魔法と同時使用で疑似的に神速の域にまで高めているが、宗煉は完全に神速の域に達しているのだ。

この差が徹底的な鍊と宗煉の差であった。

「塵鳴流剣術の秘奥義は神速を超えるスピードを持ってしか使うことはできぬ。わしもすでに超神速の速さを扱うことはできぬ身になっってしまったが、お前に奥義伝授をするくらいはまだまだできそうじゃな」

その言葉を聞いて鍊はようやく立ち上がる。

宗煉の言葉は真実だろう。

数年前に比べて宗煉のスピードは確かに落ちていた。

かの剣豪も年齢には勝てないものである。

「まだまだ、これからだ。相棒！」

『データ、リロード完了』

ブリューナクのその言葉と同時に鍊が剣を下段から振り上げると、宗煉に向かって魔力刃が飛ぶ。

「ぬう！」

宗煉は魔力刃に交差するように剣を振るい魔力を打ち消す。

「何！」

魔力刃を打ち消した向こう側にすでに鍊はいなくなっており、宗煉の後方に回り込んでいた。

『phantom』

宗煉が振り返った瞬間、六つの斬撃が同時に襲いかかる。

『塵鳴流剣術 六連牙斬』

唐竹、逆風、袈裟切り、逆袈裟、右薙ぎ、刺突の六つの斬撃を放

つ技で鍊が最も得意としている技である。

塵鳴流剣術で無類の速さを誇り、突撃型の攻撃であるが、気や魔力を纏わせ斬撃だけを飛ばす方法もある。

鍊が今回使ったのは突撃型だ。

斬撃が当たると同時に宗煉の懐に入った鍊は刀を地面に突き刺し、宗煉の首めがけて地面から刀を引き抜くように打ち上げる。

『塵鳴流剣術 轟破断・土竜』

塵鳴流剣術轟破断を鍊が即興で作り上げた派生技であった。打ち上げるとともに土ぼこりを纏わせ、攻撃が当たらなくても相手は後退を余儀なくされ、更に視界も奪われる。

「蒼龍醒雷破！」

鍊は雷の魔力を帯びた衝撃破を宗煉が後退した方向に放つと、そのまま衝撃波の後を追って突撃した。

宗煉はよもや衝撃波が追撃で来るとは思わず、身を転がして回避すると、そこに鍊が突撃してくる。

手には刀と第2形態の槍の形をしたブリューナクが握られている。

「はぁ あぁ あぁ あぁ！」

鍊は刀と槍を同時に右斬上に振るうと、宗煉はそれを刀でいなす。

鍊は弾かれた槍と刀を今度は左斬上から大きく宗煉に向かって渾身の一撃を叩きこむ。

『この一瞬に、我らの全てを！』

ブリューナクの声と共に刀と槍の穂先に光を帯びた魔力が帯びる。

「塵鳴流剣術奥義、こうつせんこうは虎狼閃光破！」

鍊は刀と槍を同時に突きだすと、そこから光の魔力斬撃が無数に宗煉に向かって放たれる。

『塵鳴流剣術奥義 ろつはそうじん狼破爪陣』
『塵鳴流槍術奥義 ろうこせんれつ そう蒙虎閃烈槍』

今、鍊が使った技は塵鳴流剣術奥義である、神速の連続斬撃を放つ狼破爪陣と塵鳴流槍術奥義である、神速の連続刺突を放つ蒙虎閃烈槍を同時に放ち、その攻撃に気ではなく、魔力を纏わせることにより威力を底上げた、現在の鍊の切り札である。

しかし、槍と剣の同時使用で普段剣を持っていない鍊は通常使うことはできない技であるし、隙も大きく、相手の虚や、攻撃の連携時にしか使うことができない技でもある。

その攻撃はようやく、宗煉に届き宗煉は初めて鍊との修行で膝をついた。

「ふむ……いい技だ。これならば少しは期待できよう。」

そう言いながら宗煉は立ち上がると、刀を鞘にしまう。

「これより、秘奥義の継承を行う。といっても、塵鳴流の秘奥義継

承は特殊でな、教えるのは秘奥義の名称と教えるものが使う秘奥義の型であり、後は継承したものが自らに一番合う型を独自に編み出すことだ」

その言葉に鍊は黙って頷く。

その様子を見た宗煉も満足げにうなずくと、再び刀を抜いた。

「鍊、わしが最も得意とする攻撃は刺突だ。よって一番得意な攻撃も刺突を主とする、牙連閃系統だ。」

そう言いながら宗煉は最初と同じ、切っ先を相手に向ける構えを取る。

「鍊、そこを一步も動く出ないぞ」

「わかりました。」

そう言つて、鍊が剣を鞘に納めるのを見届けると、宗煉は目を閉じ集中する。

そして、宗煉が目を開くと同時に宗煉の剣はその場で突きを放った状態になっており、直後、鍊の右横を何かが通り過ぎ、はるか後方にある壁がものすごい音を立てて崩れ去った。

「今のが……秘奥義？」

鍊は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

『一步でも動けばマスターの身体は完全に穴が開いていました』

ブリューナクも先ほどの技の威力を感じたのかそう呟いた。

「これが塵鳴流秘奥義、『無影^{むえい}』だ。神速を超える超神速、それを極限まで高め、鬪気と剣気を纏わせ放つ技。それが無影。その名の通り、影は無く、見切ることとは不可能の一撃必殺……しかし、通用するのは一度だけだ。わしは、もう超神速は出せぬから、現在可能な神速を極限まで高めたにすぎぬがな」

そう、一度だけの一撃必殺。

剣気と鬪気を纏わせ、超神速を極限まで高める。

つまりは完全に隙ができるということだ。

その為の一撃必殺。

使う機会を間違え外してしまえばあとは無い。

「無影……神速にも達していない俺が使うには………これしかない」

錬がゆっくり構える

その構えは抜刀術

古武術、特に古流剣術の各流派はそのほとんどが抜刀術、居合を含んでいる。

塵鳴流剣術も居合の技がある。

錬は実際に斬撃系統の攻撃が得意で抜刀術を多用する。

自らの剣速を最大限に生かす方法を錬は自覚していた。

「ふむ、いい答えだ」

錬はその声を聞き、目を閉じて集中する。

「はあああああ！！」

そして、一気に抜刀

「一步とどかず……じゃな」

そう、錬の無影はただの衝撃波に終わってしまふ。

「まだ超神速まで達しておらんだ、しかたあるまい」

そう言って、宗煉は錬の肩を叩く。

「これから精進することじゃ。五和、そこにある刀を持ってこい」

「はい」

五和は言われるがまま、祭壇に刺されている刀を抜き二人に近づき、それを宗煉に渡す。

「錬、これをお前に託す」

宗煉は其の刀を錬に渡す。

鍊は其の刀を受け取ると鞘から抜く。

その刀身は淡く桜色に光っている。

「これは……魔力？」

「其の刀は初代当主様が持っておった刀で、刀の刀匠はかの名匠村正、銘を氷狼。」

「村正！？妖刀？」

その言葉に五和が反応した。

「言い伝えでは、魔剣となっておったがな。村正が一番初めに打った刀でその存在が知らなかったことから通称幻狼とも言われている」

二人が話している中、鍊は刀の刀身に魅入られていた

（なんだか、懐かしい……そんな感覚）

その様子に気がついた五和が声をかける。

「鍊？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

鍊が五和の声で現実に戻ると、

『氷狼……御門家に代々伝わっていたのですね』

ブリューナクがそう呟いた。

「相棒、もしかして」

『マスターの想像通りです。御門家初代当主『御門錬』は、白亜の騎士でした』

ブリューナクの答え、それが語るのは御門家の過去

御門家は白騎士と棺の存在を代々の子孫に伝えてきたこと。

そしていずれ誕生するかもしれない新たな白亜の騎士を育てること。

『そして、あの初代当主の横に描かれている姫君。彼の主君の娘『桜守姫桜』姫様。彼の代の光の姫巫女です。そして御門家は代々桜守姫の家を守ることを義務づけられていたのです。』

「明治になるまでは……わしの祖父の代で桜守姫家とは離れ離れになってしまった。時代が変わってしまったからな」

宗煉がブリューナクの言葉を引き継いだ。

「そして、もう一つ。錬、継承の義の前に話した御門の成り立ちを覚えているな？」

錬は黙って頷く。

「かつて、義経公を海外に逃がそうとしたもの、その者は何の偶然かイギリスにたどり着き、そこで古代アイルランド人の女性と子をなし、その者と子を連れ日本に戻ってきたといわれている。そして、その女性の一族から守るべきことと、一つの言い伝えが御門家に伝承された。」

そう言つて、宗煉は一息つくと、静かな声で語る。

『汝、血を絶やすことまかりならん、強き血と結び、血を強くせよ。』

「そしてもう一つ」

『汝が家に銀の輝きと赤き光を持つ子生れしとき、その子は大きな試練と相まみえる。しかし、案ずるなかれ、その子は古き神々の祝福を受けし選ばれた子なり』

「わしはは、鍊よ。その子がお前だと思つておる。」

「俺が？」

宗煉は黙つて頷く。

「初代様と同じ容姿で同じ白亜の騎士の運命を背負う星の下に生まれた。だからお前に塵鳴流の全てを渡す。当主の座はお前の鎖となると思つてお前の父に継がせた。お前は使命を全うすることだけを考える」

その言葉に鍊は黙つて頷く。

「これで塵鳴流の全てをお前たち二人に継承した。錬は父と母から学んだ槍術、格闘術、そしてわしが授けた剣術。五和には父と母から学んだ通称『裏塵鳴流』とよばれる。塵鳴流暗殺術、砲術、魔術。これから塵鳴流は二人で背負え」

「はい」

その言葉に二人は同時に返事をして本家を後にした。

そして次の日、学校に登校した錬と五和はとある出会いを果たす。

学校に登校した錬と五和は、なのは、フェイト、すずかと次の休みに修学旅行の買い物に行こうという話をしていた。

登校した際になのはとぎくしゃくしたものの、なのはは、あの日の言葉通り、アースラのメンバーに錬のことを話すことはしなかったらしい。

フェイトとはやてがいつも通りの態度で接してきたことが何よりの証拠であった。

その為、錬となのはは念話でいつも通り接するように約束し、いつも通り話しているのだった。

「そうそう、アリサちゃんが言っていたんだけど、転校生が3人も来ているらしいよ」

すずかがアリサから聞いた情報を話す。

「私もはやてから聞いたよ。女の子二人、男の子が一人って」

その言葉をフェイトが受け継ぐ

「それにしても、あいつらはどこでそんな情報をひろってくるんだ？」

「にやはは、まあ、アリサちゃんとはやてちゃんだし」

なのはの言葉にそれもそうかと納得すると、ちょうど教師が教室に入ってきた。

その後ろから、一人の男と一人の女が入ってくる。

「はい、今日は、なんと転校生が二人も来たからね。騒いだら駄目よ」

そういつて、教師が二人の名前を黒板に書く。

「じゃあ、自己紹介してね。」

すると、男が一步前出る。

それは以前、鍊と剛が見た空から墜ちてきた男だった。

「空牙遊騎だ。これまでは海外で暮らしてたんだが急遽こっちに帰ることになったんでこんな時期の転校になった。ちなみにこの前髪は地毛だからな。これからよろしくな！」

遊騎はさわやかに挨拶する。

その容姿とさわやかなあいさつからか、女子から黄色い声が上が
る。

例によつてすずかはニコニコしているだけ、五和は読書中、フェ
イトはあんまり興味なさそうで、なのはだけ驚いた顔をしている。

（高町の知り合いか？）

鍊がそう考えていると、隣的女子が前に出る。

その姿を見たたん、鍊は驚き、後ろを見る。

やはり後ろの席に座る五和も読書を辞め同じく驚いた表情になる。

その少女は桃色がかった薄紫の腰まである髪に澄んだ青い瞳をも
つ美少女であつた。

「桜守姫蓮華です。本当は新学期の初めに転入する予定でしたが、
家庭の事情で少し遅れてしまいました。これからよろしく願ひし
ますね。」

「桜守姫……」

その声は意外に教室中に響く

「え？」

「御門君、どうかしたの？」

教師と蓮華が同時に尋ねる。

「あ……………いえ、なんでもありません」

「そう？じゃあ、桜守姫さんはハラウンさんの隣、さっきの男の子の前の席、空牙くんは……………高町さんの隣ね、真ん中の一番後ろの席」

「「わかりました」」

そう言って、二人は席に着く

「よろしくお願いします。ハラウンさん。」

席まで来ると、蓮華はフェイトに挨拶する。

「あ、はい。フェイト・T・ハラウンです。こちらこそよろしくお願いします。」

フェイトとあいさつすると、蓮華は鍊の方を見る。

「よろしくお願いします。御門くん」

鍊は蓮華から少し目をそらし

「あ、こちらこそ、御門鍊だ。鍊でいい」

「うん、よろしく。鍊くん」

そう言っ て蓮華は席に着いた。

（なんだこれは………懐かしい？）

鍊は妙な感覚を覚えていた。

一方の蓮華も

「御門鍊くん。なんだかとても懐かしくて、切ない響き………鍊、あなたは一体？」

誰にも聞こえないような声で蓮華は知らず知らずのうちに呟いていた。

次回予告

転校してきた蓮華と遊騎、二人はすぐに鍊を取り巻くグループと打ち解ける。

そして、はやてとアリサのクラスにも一人の女の子が転校してきた。

昼休み、そこで鍊は懐かしい再会を果たす。

そして、ある日の午後、鍊は学校を早退し自らの協力者の元へと足を運ぶ。

そこで待っていた男とは？

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第9話『少女とマッドと』

『変わって無くないよ！背だって10センチ伸びたもん！』

第9話『幼女とマッドと』（前書き）

とある人の性格がすごいことになってますが、あくまで平行世界です。その、受け入れてあげてください。

雪、剛、遊騎の戦闘はもう少し先になります。

第9話『幼女とマッドと』

（鍊side）

蓮華と遊騎が俺達のクラスに転校してきた日の一限目の休憩時間に転校生の定番（？）ともいうべきである『クラスメイトからの質問攻め』という拷問にも等しい洗礼をうけた。ん？拷問じゃない？普通？私にとっては拷問だ。

話がそれたな。

まあ、一時限目のあとは最初だから仕方ないだろう。

二人も苦笑しながらも丁寧に質問に答えていた。

だが、しかし、二時限目の休憩時、またしてもクラスの間みんなが二人を取り囲む。

みんなと言っても、高町、テストロッサ、すずかに五和はいつものごとく、席に座って暖かく見守っている。

しかし、如何せん蓮華は俺の前の席である。つまり、うるさくて仕方がない。

そこで俺が不機嫌オーラを全開にして蓮華に群がっているクラスメイト（主に男子）達を睨みつけると、蜘蛛の子を散らすように散って行った。

その時、蓮華からお礼を言われ名前で呼んでほしいと言われ、名前で呼ぶことにした。

その時横の席と何故か後方から殺気を感じたのだが、まあ何もな

かつたし良しとしておこう。

ああいうのは下手に関わらないほうがいい。

あれは、数年前にすずかとの婚約が決まった時の兄と義姉、そして妹と同じ気配だ。

あの時はかなりヤバかったのを覚えている。

その後、しばらくして、遊騎がこちらに來ると、何故か高町が遊騎の紹介をしてきた。

なんでも昔の知り合いらしい。

それにしても、なんであの爽やかに挨拶してたやつがガチガチに緊張してるんだ？

そこで俺は一つの仮説を立て、それを聞いてみることにした。

「なあ、空牙……お前、もしかしてたk「うわあああああ」」

いきなり遊騎に腕を掴まれると、俺は廊下までの間、風になった。

「お、おま、オメエ、いきなしなにをいうだ！」

「あゝびっくりしたゝなんだ？おまえ方言めちやくちゃだぞ？」

「お前がいきなり変なこと言うから言葉が変になったんだよ！」

「変？ただ、お前がたかま「うわあああああああ」」

また同じことを言おうとしたら叫びだし、俺の口元を押さえてくる。

こいつ………おもしれえ

「わるかった。うん、お前面白いな。俺は御門鍊、鍊でいいぞ」

「お、おう。俺は遊騎でいい。」

「そうか、よろしくな。高町が好きな遊騎くん！」

俺はそう言いながら教室に戻った。

「おまえ、悪いって全然思っていないだろおおおお！」

教室に入った直後、後ろからそんな叫び声が聞こえてきた。うん、やっぱり面白いな、あいつ。

その後、昼休みになってさすがが話しかけてきた。

「鍊くん、お昼一緒に食べない？」

「うん？いいよ。後ろの二人も？」

さすがの後ろには高町とハラオウンの二人が立っている。

「うん。アリサちゃんとはやてちゃんも一緒だよ。」

ふむ、幼馴染勢ぞろいってやつか

「五和も来るだろ？」

「ええ」

後ろを振り返りながら言うと、一言だけ帰ってきた。

相変わらず、学校ではそっけない奴だ。

「蓮華はお昼どう？」

転校したての蓮華にも声をかけた。

「はい、一緒に一緒にします」

と、丁寧な返事と笑顔が返ってくる。

うん、やっぱり不思議だ。

彼女の笑顔と声が頭のどこかで引っかかっている。

その時、教室を出て行こうとする剛を見つける。

「剛、飯は？」

「売店」

俺の問いかけに剛は一言だけ答える。

「今日はお前の分もあるぞ」

もとより今日は剛と食べるつもりだったからいつも売店のあいつの分も作ってきていた。

「上か？」

上とは剛にとって屋上のことだ。

俺がずかの方を見ると、笑顔でうなづく。

「ああ。俺はいつもの奴」

「……先に行つてろ」

そう言つて教室を出て行つた。

「ついでに、遊騎もくるか？」

「俺はついでかよ！」

「さて、屋上行くか」

「無視するなあああ！」

みんなで教室を出た後、叫びながら遊騎がついてくる。

なんだろう。

こいつ、かなり面白い。

屋上に着くと、すでに奥にあるベンチをバニングスと八神が陣取っているのはいいんだが、なんかバニングスの膝の上に何かが座っている。

なんだろう、どこかで見たことあるな。

まあ、なんだ、膝に乗ってるのがなんだか暴れてるような気がするんだが

「ああ、もう、可愛すぎる〜〜」

「は〜な〜し〜て〜」

うん、助けてやるか。

「大尉、男が近寄らないからって、同姓でしかも幼女を誘拐してくるのは良くないな、元いた場所に返してきなさい」

俺がそうバニングスに声をかけると、当の本人は俺を睨みつける

「私はどこぞの大尉じゃない！それに幼女誘拐もしてないっての！」

「いや、その状況で言うのもどうかって思っぞ」

俺横に着た遊騎がそう言う

「あん？誰よ、アンタ」

次は遊騎を睨みつける。

「あ、ああ。俺は今日転校してきた、空牙遊騎。よろしくな、お嬢さん方」

「あっそ、私はアリサ、アリサ・バニングスよ」

「うちは八神はやて、よろしゅうな」

「おう、俺のことは遊騎でいいからな」

遊騎の挨拶がすんだところで、剛が屋上に着た。

「鍊、ほらよ」

剛が紙パックの緑茶を投げ渡してくる。

「サンキュウ、剛。はい、弁当な」

剛に弁当を渡したところで、剛はアリサが抱えている人物に目がいく。

「……………誘拐か？」

「ち、違っわよー！」

剛がボソッと呟くと、アリサが顔を真っ赤にして慌てて答える。

その時、アリサの拘束が緩んだのか、抱えられていた幼女がアリサから離れる

「う~~~~~苦しかったよ~~~~」

「あ、ごめんね。あまりに可愛かったから」

その幼女は……今、立ってるんだよね？

どっからどう見ても140センチあるかくらいだぞ？

「ねえ、その子、本当に誰なの？」

そこでようやくなのは達が声をかけた。

「この子はな、今日私たちのクラスに転校してきた子なんよ」

「じゃあ、その人が三人目何だね？」

「じゃあ、転校生三人集合だね」

と、上からはやて、フェイト、すずかが発言する。

「三人？もう一人いるん？」

「うん、蓮華ちゃん」

「はじめまして、桜守姫蓮華と申します。蓮華と呼んでください。これからよろしくお願いします。」

なのはに促されて蓮華が二人に挨拶する。

「なんや、偉いお嬢様っばいひとやな」

「おんなじ丁寧口調でも、五和とは大違いね」

「……………何か言いましたか、アリサさん？」

バニングスの一言に五和が眼鏡の奥から睨むようにして言葉を放つ

「何にも。それと、この子は」

バニングスがようやく幼女を促す。

「今日転校してきました〜海原雪で〜す」

雪がそう挨拶した後、何故か俺と目が合って動きが止まる。

「雪ちゃん、どないしたん？」

なぜか雪は俺を見た後プルプル震えている。

「れ……………ん……………く……………ん！」

はやてが声をかけた瞬間、俺の名前を叫びながらこっちに向かって突撃してくる。

直後、俺の背後から何かが前に躍り出る。

俺は五和か？と思ったが、彼女はすでにベンチに座っている。

じゃあ、一体誰が？

そう思った瞬間

「へぶう」

そんな変な声が聞こえたかと思うと、俺の目にはウェーブのかかった紫色の髪が映った。

「す、すずか……………さん？」

すずかが俺の前に出て片手で雪の頭を掴んでいる。

「……………ボソッ（これ以上変な虫はつかないようにしないと）」

すずかが何かを呟いたようだが、何を言っただかなんて聞こえなかった。

ただ、さっきと同じような殺気みたいなものをすずかが纏っているのはわかる。

「なにするんだよう」

「あら、ごめんね。それよりも、鍊くくくん」

雪を離すと、ゆっくりと俺の方を振り返るすずか

「説明してくれるよね？ううん、するよね？しなさい」

「イエス、ママ」

なぜだろう、俺、すずかに全然頭が上がらねえ

まあ、説明するか。顔と名前、そしてさっきの行動で思い出したし。

「こいつ、俺が海外にいたところに知り合ったんだよ」

「お、なんだ？ 錬も転校生だったのか？ 俺と同じじゃねえか」

話の途中で遊騎が割り込んできた。

うん、スルーしよう

「あれは、初めて会ったのは六歳ぐらいだったけ？」

「うん、そうだよ」

「あれ？ あの〳無視ですか」

「それにしても変わってないな、雪。身長も伸びてねえし、髪伸ばしたくらいか？」

「変って無くないよ！ 身長だって10センチ伸びたもん！」

「無視するな〜！」

ついに遊騎が叫んだ。

思ったより早かったな。

「」「うるさい」「」

「ひでえ」

雪と同時に言うと、遊騎はがっくりと肩を落とし、みんなは笑っている。

うん、学校の時くらいこういう雰囲気もいいかもしれないな

そうして、全員の自己紹介を改めて行い、ようやく昼食を取るこ
とになった。

ただ、自己紹介の時にさすがが

「月村わずかです。鍊くんの婚約者です。」

と、普段は言わないようなことを言っていた。

ありゃあ、蓮華と雪への牽制としか思えない。

でも、なんで高町もハラオウンも驚いてたんだ？

あれ？言ってなかったけ？前に八神とバニングスには言った気がするんだが？

それにしても、アリサがぎこちなく剛の横に座ってたけど……

「アリサちゃん、真崎くんのこと好きみたいなの」

と、さすがが耳打ちしてくれた。

なるほど、これはまた面白いネタですな〜

ふと、そんな時八神と視線が合う。

八神も気が付いていたらしく、二人してニヤリつとわらってしまった。

その後、今度の修学旅行の班の話になり、自分達の班に3人を入れることになり、来週末にみんなで買い物に行くことになった。

side out

次の日、鍊は家庭の事情と言うことで学校を昼前に早退した。

理由は一つ、氷狼を受け継いだはいいが、年がら年中刀を持ち歩くわけにもいかないので、現在、鍊の行動に協力してくれている魔法サイドの科学者の元へ行き、デバイス同様の瞬間取り出しを行えるようにするためである。

ただ問題は、その科学者が少々変り者であるということである。

五和もその人物を知っているが、あまりその人物と科学者を合わせようとはしない。

五和いわく、科学者よりもその下にいるとある人物と鍊を合わせたくないだけなのだが、鍊はそれを知るわけがなかった。

その科学者との出会いはずいぶん前にさかのぼる。

当時、鍊は転移呪文を覚えただけだったため、無人世界でブリ

ユーナクと共に訓練していたのだが、ちょうどその時にいきなり現れた巨大魔法生物と戦闘になり、当時まだ魔法に慣れていなかった錬は周囲を取り囲まれるという失態を犯してしまう。

その時とつさに長距離ランダム転移魔法を使っしまい、知らない森の中で倒れてしまう。

それを助けてくれたのがその科学者だったのだが……

話を戻そう。

それ以来、協力関係にある科学者の元へ錬は来ていた。

転移する場所は森の奥深く、錬はいつもと同じ場所に転移すると、迷うことなく、森を進んでいく。

そうすると、森の奥に崖のようなものが現れ、その崖に洞窟のような入り口が現れる。

その前にたどり着くと、中から一人の女性が出てきた。

濃い紫のストレートの髪を持つすらっとしたモデルのような女性であった。

「お久しぶりです。ウーノさん」

「ええ、お久しぶりです。こちらへ、ドクターが今か今かと待ってらっしゃいます。」

彼女はウーノ、錬の協力者が作成した戦闘機人である。

ウーノに連れられて洞窟に入ってしばらく進むと、洞窟からいきなり機械のような壁と床が広がる。

そのまま進むと、とある部屋の前にたどり着く。

そこが彼の研究室だったはずだ。

「ドクター、鍊さんを御連れしました。」

中からの返事はない。

しかし、耳を澄ますとかすかにだが、何かの音が聞こえる。

その時だった。

ウーノが笑顔を浮かべたまま、扉を蹴り破ったのだ。

「ウ、ウーノ、君は一体何回扉を蹴り破るつもりなんだい？」

中にいた白衣の男が驚きながら声を上げる。

「また、アニメ鑑賞ですか？いい御身分ですね。ドクター。ただでさえお金がないというのに、全く働きもせず、流されてくる費用は全て研究費かアニメのディスクかゲームに消えて、あまつさえ、妹達におかしなコスプレをさせるなど……そして生活費はドウエが稼いでくるお金だけ……いい加減に仕事しろ！このボンクラ亭主！」

ウーノがいきなりまくしたてる。

「いや、ウーノ、これも全ては新しい研究のためであってだね。ただ、楽しんでいるわけではないのだよ？それにそもそも私は君の亭主ではなくて父親だろう？」

「テーブルにあるお菓子の山を隠してから言ってください。それで、妹達のコスプレは何ですか？」

「可愛い娘に可愛い服を着せようと思うのは父として当たり前だろう？」

「いや、それはどうかと思うぞ、ジェイル」

胸を張って言うジェイルをさすがにこれ以上見て入れられないと思い、鍊が割って入る。

「ああ、鍊じゃないか。よく来たね」

「確かに可愛い服を女性が着るのはいいことだ、だがコスプレはないだろう？」

そう言っ て壁を指さす。

そこには現在稼働しているナンバーズたちがさまざまなコスプレをしている写真が張られている。

「娘達の素晴らしい姿を記録に納めて何が悪い」

（（やばい、はやくこいつなんとかしないと））

ウーノと鍊は同時にそう思った。

そもそもこの男、ジェイル・スカリエッティは時空管理局最高評議会がアルハザードの技術で生み出した存在だと言われている。

鍊は彼に保護された際に自らの素性を明かし、代わりに対価として彼の素性を打ち明けられ、その目的も知ることになる。

そして、鍊は管理局の闇の部分をしった。

その後、彼の目的を邪魔しないことを条件にこちらと協力体制をしてくれるという。

理由は鍊に興味を持った。

ただそれだけであつた。

鍊も彼を疑うことはせず、無条件で彼を信じた。

その後、鍊の魔力反応を追ってきた五和とひと騒動あつたが、鍊が五和に

“警戒して安全を得るより、信じて裏切られた方が全然ましだ”

その一言にスカリエッティは惚れてしまった。

男が男に惚れる。

それは信頼を得たも同然であつた。

それ以降、スカリエッティはよく鍊と連絡するようになったし、

錬がアジトにやってくるのを心待ちにしている節がある。

ただ、その頃の彼はまだナンバーズのことを自らの研究対象としてしか見ておらず、そのことを知った錬が彼を何も言わずに殴りつけた。

それだけで彼は命と言うものを少しだけだがましな見方をするようになったのである。

その時に持参していた地球の漫画、それを見た時から彼は漫画やアニメ、ゲームにはまるようになっていった。

何せ、アンリミテッド・デザイア（無限の欲望）と呼ばれた通り、興味が出たことにはとことん欲望がでてしまう。

錬はそんな彼が好ましかった。

「なあ、ジェイル？いまのままじゃ、科学者と言っか………うん、ただの変態ニートだぞ？」

「そうです。ドクターたまには仕事もしてください。」

錬とウーノが呆れて言うと、

「だから、これも仕事だよ。実際にこういうロボット系のアニメはいい研究素材だね。この技術を少し管理外世界の技術が少しだけ発展している処に売ったんだが、なかなかいい値がついたぞ」

そう言って、画面に現在の予算が映し出される。

（あれ、これって日本の国家予算以上あるんじゃない？）

錬がそう思うほどの額が表示されていた。

ウーノが頭を押さえてる。

「そう言えば、今日はどんな要件だい？」

スカリエツティがそう尋ねてくる。

「ああ、こいつをデバイスみたいに収納取り出しできるようにしたいんだが」

そう言つて、刀を渡す

「ふむ、そんなことなら朝飯前だ、ブリューナク君もあずかるう」

『マスターの頼みだから仕方なくです。また変な機能付けたらただじゃおきませんから』

ブリューナクが言う変な機能とは、アラームやテレビの遠隔録画機能、カメラ機能など数知れない。

一番変だったのは『なまり機能』であろうか、ブリューナクがしゃべる言葉がなまったり、武士口調や女王様口調になるなど、訛りどころか性格まで変わってしまうという機能であった。

その後、ジェイルが錬とブリューナクに殴り飛ばされたのはいまでもなく、今はその機能は無い。

「うむ、任せたまえ」

そう言って、ブリューナクと刀を預かったジェイルは作業に取り掛かった。

「他のメンツはどうしたんですか？」

鍊はほかのメンバーがいないことに気がついた。

「トーレとクアットロ達には別世界の違法研究所の掃除に行っています。ドクターの技術を使ってすこし危なげな研究をしていましたので」

「そうですか、ドゥーエは？」

「管理局に潜入しています。今日は仕事だそうですので、また今度連絡してあげてください。あの子も喜びます。」

ナンバーズの次女、ドゥーエ、彼女と鍊はちょっとした関係である。

ちょうど一年前ぐらいだろうか、ジェイルの研究所に来ていた鍊が開いてる一室で休んでいると、彼女が入ってきて、鍊の初めてのことごとく奪ってしまったのだ。

もとより、父親譲りの女好きを受け継いでいる鍊もこれには驚いた。

始めては好きな人と考えていた鍊だっただけに、なんでこんなことをしたのかを問い詰めたところ、ドゥーエは鍊に惚れていると告

げたのだった。

きっかけは鍊がスカリエッティを殴り飛ばしたことであった。

自らを兵器と想っていたドウーエにとってそれは衝撃だったらしく、それから鍊に興味を持ち、いつの間にか惚れていたそうだ。

その言葉を聞き、鍊は咎めることを辞めた。

ドウーエに何か言葉を返そうとしていた時、彼女は鍊に

『私は貴方と一緒になら何でもいいの。私は戦闘機人だもの、どんな関係でもいいから一緒に居させて』

この言葉に鍊は負けてしまった。

思春期に突入した女好きの男子にとってその言葉は願ってもないことで、しかも年上のスタイルのいい金髪美人と来ている。

鍊はそれからというものの、スカリエッティのところではドウーエと一緒にいるようになった。

それに気づいたのが五和だった。

それに気がついてからというものの彼女はここへは行かせないようにと画策している。

今回は彼女が仕事だと事前連絡で知っていたから鍊一人で行かせたというのもあるのだが……

「そういえば、面白い物が手に入ったんだ」

不意に、作業中のジェイルが声をかけてきた。

「これは、何かの設計図？」

「管理局のデータに埋まっていたんだが、『アーマーデバイス』というそうだ。」

アーマーデバイス、全身を覆うフルスキンのアーマーで飛行適性のない魔導師でも設計次第では飛行ができるようになり、魔法が使えないものでも多少の戦闘行動をできるようにされている。さらに、防御力も高く、高性能である。

しかし、コストが高すぎ、更には使用者にもかなりの熟練度が必要であるというデメリットから採用されなかった。

「誰が作った？」

「私が稀に仕事を頼む傭兵でね、かつては管理局に所属していた。名前は知らないが、裏での名前は『レーヴェ』と名乗っているそう
だ」

「ふん……これ作れるのか？」

「不可能ではないけど、今はほかの研究もあるから時間がかかるよ」

「じゃあ、今度アイデアでも送るよ」

「気に行ったかい？」

「正体隠すのにはもってこいだしな」

「そうだね。はい、これ」

そういつて、作業を終わらせたブリューナクを鍊に渡す。

『変な機能つけてないでしょうね?』

「まあ、試せばわかるだろ?」

そう言つて、鍊は氷狼を呼び出す。

『氷・狼・剣! !』

いきなりブリューナクが声を発する。

「よし、うまくいったね」

『何をつけたーーーーー!』

「いやなに、やはり呼び出すには名前を呼ぶものだろう?」

その言葉に鍊は放り投げてあるディスクのパッケージを見る。

それはロボットものではあるが、リアル系ではなく、スーパー系の熱血ものであった。

「勇者は必ず必殺技は叫ぶものだよ」

「『元に戻しやがれエエエエエエ!』」

「ぎゃあああああああ」

その様子を見ながら、ウーノはまた頭を押さえた。

「はあ、やれやれ」

次回予告

休日、鍊達は次週に迫った修学旅行の買い物に繰り出した。さすがは久しぶりに過ごす鍊との時間を満喫していた。

そして、買い物の後、喫茶店で休んでいたところでそれは現れた。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第10話「御門の兄妹、来襲」

『鍊ちゃああああん、久しぶり〜〜さあ、お義姉さんのものに
『黙れ、鍊はおれのものだ！』ってあんたいつ来たのよ、仕事』違
います、鍊お兄様は私のものです』妹もか！？』

第10話「御門の兄妹、来襲」(前書き)

ながらくお待たせいたしました。

感想お待ちしています。

第10話「御門の兄妹、来襲」

修学旅行を来週末に控えた休日、その日、鍊はすずか達と修学旅行の準備を行うため買い物に出かけることになっている。

なっているのだが、その日、鍊は誰が見ても不機嫌だとわかった。なぜなら、そもそも、今日は11時に駅前に集合するはずであった。

しかし、現在午前8時半である。その時間に鍊の自宅に今日集まるメンバーが集合していたからである。

ちなみに、本日は蓮華と雪は用事があるということで不参加となっている。

「なぜこんなことに……」

鍊は心の中で今日の自分の運勢の悪さを呪っていた。

「鍊、朝飯まだか？」

「私がわざわざ来てやったんだからお茶くらい出さないよー!」

「私もおなかが減りました」

「鍊はここに一人で住んでるの?」

「鍊くん、私が手伝うから」

「凄い量の楽譜なの」

「なあなあ、このレシピって錬君が自分で書いたんか？」

「…………俺はコーヒーをくれ」

上から、遊騎、アリサ、五和、フェイト、すずか、なのは、はやて、剛の順である。

「まさかの剛まで……………」

「ごめんね、私のはやてちゃんに錬くんの家に行くって話したらみんな付いてきちゃって」

隣に立って手伝ってくれているすずかが気を使って自分のせいだと誤ってきた。

「すずかのせいじゃないさ。あいつらが厚かましすぎるだけだ」

錬は朝食を準備しながらいまだに部屋を物色したりソファでくつろいでいるメンツを見ながら悪態をつく。

「なんや、二人ともなんか新婚さん見たいやな」

いつの間にかカウンターに近づいてきていたはやてが声をかけた。

「は、はやてちゃん!？」

「バカなこと言ってる、飯なしだぞ？」

「ああ、うちはもう家で食ってきたからかまへんよ」

「あつそ、それにしても新婚ね。まあいずれはそうなるんだろうな、許嫁だし」

鍊はそう言いながら作った料理を人数分の皿に分けていく。

「鍊くん／＼」

「はいはい、ごちそうさまや」

はやてはやれやれと肩をすくめると、トーストとオムレツが載せられたプレートを持ち運んでいく。

「さあ、飯食い終わったらさっさと出かけるか」

「うん、そうだね」

鍊がそう言っていると、すずかは笑顔で返事をした。

「ほら、お前ら朝飯できたぞ、運ぶの手伝え！」

「はい」

その後、朝食を取った鍊達は買い物に出かけた。

買い物と言っても、男性陣にとって買うものはそこまで多くはない。

基本的に制服での行動であるし、必要なものと言ったらせいぜい旅館で着るＴシャツとズボン、それに下着、洗面道具一式ぐらいだ。あるとすれば、暇つぶし用のトランプなどのカードゲーム、漫画か小説くらいであろう。

そう、男性にとってはそんなものぐらいしか用意する必要はない、男性にとつてはである。

しかし、女性陣はそうもいかないらしい。

荷物を入れるバックから洗面道具に至るまですべてにこだわっている。

アリサとはやていわく、自らのセンスを問われるため妥協はできない、らしい。

予定より早く買い物に出たため、男性陣の買い物は終了、その後女性陣の買い物付き合っていたが下着を選ぶとのことで、彼女達の荷物を預かり、買い物後に行く予定であつた翠屋へ先に退避していた。

「それにしても、女って大変だよな」

自分達の席に置いてある荷物の山を見て遊騎が呟いた。

「まあ、いろいろあるんだろ、女子にはな」

鍊の横では剛がテーブルに突っ伏している。

女性陣の荷物はそれぞれ、鍊が五和とすずか、遊騎がなのはとフ
イト、剛がアリサとはやての荷物を持ったのだが、アリサとはや
てがものすごい量の服やバックを買ったため、剛が一番荷物を持っ
ていたことになる。

「まあ、あれだな。真崎、おつかれさん」

遊騎は苦笑しながら剛に声をかけるが、剛は顔を上げずに手だけ
で返事をする

「鍊くん、いらっしやい」

そこへ、なのはの母親である高町桃子がやってきた。

「お久しぶりです。桃子さん、相変わらずお綺麗ですね。」

鍊は昔から翠屋の常連であるため、桃子や士郎とは顔見知りであ
る。

「ふふ、ありがとう。これがなのは達の荷物ね？奥に運んでおくわ」

そう言つと、桃子は（おそらく）バイトの男性に声をかけて荷物
を奥へと運んで行った。

「お、おい、鍊。アレ誰だ？た、高町に似てたけど、お姉さんか？」

「ん？知らないのか？高町桃子さん、高町の母親だ」

「なにー！？」

遊騎が桃子について尋ねてきたので錬が彼女について説明すると、遊騎は口をパクパクさせていた。

その後、ブツブツと「若すぎるだろ」とか、「いくつなんだ」とか、「なのはもあんな感じに」とか呟いていたが、錬は気にしないことにした。

その直後、女性陣が合流し、テラスで自由行動出回るところを決めることになった。

テラスのテーブルにはケーキや紅茶、コーヒーが置かれ、それぞれの手には旅行雑誌が握られている。

「やっぱり、甘い物店巡りは外せないと思うのよ」

「俺は甘い物は苦手だ」

「えっ！そうなの？」

「それよりも、いろんな名所を巡るんもおつやと思うで」

「その意見には俺も賛成だ」

「私は昔の街並みが見てみたいな」

「京都ってお寺がいっぱいあるんだね、なのは」

「そうだね、私も行ったことないから楽しみだよ」

「お、俺も楽しみだ」

みんなから様々な意見が出る、ちなみに席順は一番端に鍊、その横にすずか、鍊の向かい側に剛、その横にアリサ、アリサの横に遊騎、その横がはやて、はやての向かい側にフェイト、その横になるはとなっている。

五和は話し席に着いて間もなくして携帯が鳴り、急用ができたと先に帰った。

「とりあえず、自由行動は2日間あるんだから、半分に分けて考えようよ」

すずかのその意見がきっかけになり、一日目は市内中心部から西側、二日目は中心部から東側を回ることになり、その中からどこに行くかを決めることになった。

話し合いを続けていると、鍊の携帯が鳴る。

「ちょっと、ごめん。」

一言、みんなに声をかけ、携帯を取り出しディスプレイを見ると発信者は紅五和と表示されている。

鍊は訝しがりながら通話ボタンを押すと、携帯を耳にあてた。

『鍊！すぐにそこから逃げて！』

「ああ？いきなりなんだよ？」

いきなりの発言に鍊はどうしたのか問いたです。

『いいから逃げ「鍊ちゃああああん！」間に合わなかった……』

五和との通話中、いきなり反対側の耳から聞こえてきた大きな声が五和にも聞こえたようで、彼女は疲れたような声を発した。

その声はなのは達にも聞こえたようで、声が聞こえた方向を向いている。

直後、鍊の右側から衝撃と共に人が突っ込んできた。

正確には抱きついてきた。

「鍊ちゃああん、久しぶり……さあ、お義姉さんのものに「黙れ、鍊はおれのものだ！」ってあんたいつ来たのよ、仕事「違います、鍊お兄様は私のものです」妹もか!？」

いきなりの叫び声と危険な発言共に、更に二つの危険な発言が発せられた。

「俺は誰のものでもないって言ってるだろー！ー！」

鍊はそう言って抱きついていたら20代の女性を引き剥がす。

「あんた達は何しに来たんだ!？」

鍊のその言葉にスーツを着た20代の少し赤みがかった茶髪の男性が答える。

「そりゃあ、鍊に会いに来たに決まっているだろう？」

「そうよ、鍊ちゃんずっと帰ってこないから」

先ほど鍊が引き剥がした女性が続く。

髪は肩までのショートボブで軽くウェーブが掛かっており、色は明るい赤で、むしろピンクに近い。すらっとした体形が出るところは出ていて、ウエストもくびれており、まさにモデル体形だろう。彼女もスーツを着ておりそれがよく似合っている。

「わ、私もお兄様にお会いしたかったので……」

最後に発言したの十台になったばかりであろう少女であり、成長期に突入したのか、徐々に女性らしい体系になっており、胸もはやてくらいに成長している。

白いワンピースに淡いピンクのシャツをはおっており、それが彼女の幼さを払拭している。

髪はストレートに伸ばした髪を両側でひと房だけ束ねているツースイドアップにしており、色は黒色

「いや、会いたいからって、三人とも仕事と学校は？」

「「鍊（ちゃん）（お兄様）のためならそんなもの後回しだよ」（ですわ）」「」

「いや、後回しにするなよ」

鍊が肩を落としたと同時に後ろから声が掛けられた。

「あの、御門くん、その人たちは？」

なのはが恐る恐る声を掛けてきた。

さすがが諦めたような顔をしているので、おそらくそれ以外のメンツで代表してなのはが聞くことになったのだろう。

「ああ、そうだな、うん。俺の兄と義姉と妹だ」

「「「ええーーーーー!?」」」

翠屋のテラスに5人の叫び声が響いた。

ちなみに剛とすずかは叫んでいない。

とりあえず、3人を座らせ紹介することになった。

「えっと、右から兄の御門^{みかど}翔、その隣が義姉の御門^{みかど}四夜^{よつや}さん、最後に妹の御門ルリだ」

「初めまして、鍊の兄の翔です。いつも私の弟がお世話になっていきます。」

「私は四夜、私の鍊ちゃんがお世話になってます。あ、ちなみに旧姓は紅で、翔の妻です」

「え？紅って、もしかして五和ちゃんのお姉さんなん？」

「ええ、五和は私の妹よ」

「お兄様の妹のルリですよろしくお願いします」

「ルリちゃんって確かイギリスに住んでるんだよね？」

ルリの発言の後なのはがルリに質問する。

「はい、そのとおりですわ」

「もしかして一人でこっちに来たの？」

「いえ、一人家の者が付いてきていますが、本家の方に挨拶に行っております」

「ふええ、そうなんだ」

「すずかは三人のこと知ってたの？」

アリサがすずかに声をかけると、

「うん、2年前くらいに一度会ってるから」

すずかが疲れ切った顔で乾いた笑いをもらす

それもそのはず、鍊とすずかが許嫁とされたときに、この三人は一度すずかの家を急襲している。

その際、お話という形で翔と四夜はすずかと仲良くなったのだが、如何せん、ルリがいまだにすずかに懐いていなかった。

いまだに鍊の腕を握ったまますずかの方をずっと睨んでいる。

「それで、本当は何しに来たんだ？」

鍊が三人に問いかけるとようやく本題に移れると翔が切りだした。

「そうだった。はい、鍊。お兄ちゃんからの誕生日プレゼントだ。これを直接渡したくてね」

そう言って封筒を鍊に渡す。

中にはクラシックコンサートのプラチナチケットが二枚はいつていた。

「お姉ちゃんからはこれね。前にメールで失くしたって言ってたし」

四夜はきれいにラッピングされた小箱を渡す。

中には首からかけられるロザリオが入っていた。

「私からはこちらです。」

ルリが渡してきたのはシルバーリングだった。

装飾は無いが外側にケルト十字の模様が刻んである。

「あ、ありがとう／＼／」

鍊は照れながらお礼を言い、ロザリオにシルバーリングを通し、首につけ、チケットをポケットにしまう。

「うん、その言葉が聞ければお兄ちゃんは満足だ」

「私も、これで後三年は闘えるわ」

「はい、私もがんばれます」

そう言いながら翔たちは席を立つ

「どうしたの？」

「いや、用事はこれだけだし、早く向こうに戻らないと仕事があるからな」

「そういうこと、また電話してね」

「お兄様、偶には家にも帰ってきてくださいね。お待ちしていますから」

そう言うつと、三人はタクシーに乗り去って行った。

「なんだか、嵐のような人たちだったな」

三人が去ってしばらくしてから遊騎がポツリとつぶやいた。

「うん、なんだかお兄ちゃんと同じタイプの人のような気がする」

しみじみと、店の中で働いている兄、高町恭也を見て呟く。

「うん、わかる気がするよ、なのは」

フェイトは少し遠い眼をしている。

「それよりも、御門くんって今日誕生日なん？」

「いや、違うぞ」

はやての質問に錬は違うと否定する

「じゃあ、なんで誕生日プレゼントなのよ」

「多分だけど、錬くんの誕生日って修学旅行の2日目だから今日渡しに来たんだと思うよ。三人とも錬くんのこと大好きだし」

アリサの質問にさすがが答えた。

「あれは好きってレベルを超えてるわよ」

「あはは、そうだね」

「錬、おまえなんで黙ってた」

いきなり、剛が錬に声を掛けた。

「いや、別に言うこともないと思ってさ」

「まあ、いい。来週だな」

剛はそういうと、携帯を取り出していじり始めた。

「そうとわかれば、何もしいひんわけにもいかんからな、二日目の夜は御門くんの部屋に集合や！」

「了解」

鍊はそんなみんなを見ながら、1年ぶりに会えた三人に感謝していた。

そして思った。

闘いがあっても、このみんなという日常は少しでも楽しんで過ごしていこうと。

次回予告

修学旅行、それは学生生活最大の楽しみと同時に、最大のイベント、鍊やなのは達は修学旅行を満喫していた。

しかし、そこにも現れる幻影魔物、数の多さと幻影の能力に苦戦するなのは達管理局チーム、そこに現れる新たな魔導士

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第11話「古の都の地にて」

『これが幻影魔物か、確かに厄介そうだが雑魚には違いない、これがな』

第11話『古の都の地にて』前編（前書き）

思った以上に長くなりそうなので分けて投稿します。

第11話『古の都の地にて』前編

【時空管理局本局・レオンの執務室】

時空管理局本局にあるレオン・アーヴィング執務官の執務室には、レオンとその義妹であるマドカの姿があった。

「それじゃあ、アースラへの応援は頼んだよ、マドカ」

「それはいいんですけど、あそこには高町なのは二等空尉がいるんでしょう？大丈夫なんですか？」

マドカが言っているのは先日 of 襲撃事件のことだろう。

「彼からの指示だったのだから仕方ない。それに、白騎士には一応公務執行妨害罪を適應することができしね。気にすることは無い。」

「それはそうだけど。私、彼女とは上手くいきかないと思います。」

「そこは仕方ないよ、上手く話さないとな。」

「他人ごとだと思って……」

「そうすねるな。これはお前を守るためでもあるんだから」

レオンは優しくマドカの頭を撫でると、マドカは気持ちよさそうに目を細める。

「向こうでは、クロノ提督の指揮下に入るから命令はきちんと聞く」

「ようね」

「はい」

「御門くんについては、もし話を聞いてくれるようならこちらに引き込んでくれ、そうでなくても消す必要はないよ」

「そんなことをしたら義兄さんの立場が!!」

マドカの発言にレオンは首を横に振る

「いいんだ。これから先何が起こるか分からないし、味方は多い方がいい。それに、僕たちはいいい加減にこの運命から解き放たれなきゃいけないんだよ」

「……うん、わかったわ、義兄さん。」

「ありがとう。じゃあ、頼んだよ、マドカ」

レオンがそういうと、マドカは小さくうなずき部屋を出て行った。

「そう、もう運命に翻弄されてはいけないんだ。私たちは……」

次の瞬間、レオンの胸に痛みがはし入り、レオンは胸を押さえたまま膝をつく

「ぐ……まだ……まだ……耐えられる……私はお前になんか負けない……絶対に……」

レオンは机に置いてあるカプセルを口に含むと、それを飲み込む。
しばらくすると痛みが引き、レオンは立ち上がる。

「時間がない……急がないと……」

レオンはコンソール上に展開されている画面に目を向け一言呟いた。

【戦艦アースラ】

修学旅行を明日に控え、なのは達3人はアースラに集合していた。

「クロノ、本当に明日から行ってきたもいいの？」

「ああ、せっかくの楽しみを無駄にすることはない。行ってくるといい」

「でも、本当にいいの、クロノくん？もし、私たちがいないときに棺や幻影が現れたりしたら」

実際に、買い物の日から今日まで、棺自体は現れてはいないが、幻影魔物の出現は数回あり、なのはたちもその迎撃に出ている。

幻影たちは生物に寄生しようとするときがあることが最近になってわかった。

幻影は長い時間存在することはできないらしく、出現してから一定の時間がたてば消滅するのだが、生物に寄生し、消滅を免れようとするものが最近になって現れたのだ。

なのはとフェイトは、もし数か所で同時に出現したときのことを考えると、自分たちが数日とはいえ抜けていいのかと考えてしまっ

たのである。

クロノはその考えを見こしていたのか、二人を安心させるように発言する。

「本局からの応援が来るようになっていいるから人手は大丈夫だ。もし人数が足りなければ僕が出るようにすれば事足りる。」

「クロノ君もこう言ってることやし、お言葉に甘えようや」

「そうだね。ありがとう、クロノ、お土産買ってくるね」

「ねえ、クロノくん。本局からの応援って、どういうこと？」

はやてとフェイトは安心したように話していたが、なのはだけは、不安に感じていた。確かに本局からの応援はありがたい。

しかし、3人が数日抜けるだけなのに、本局からわざわざ応援が来る必要があるのだろうか、いや、そもそも応援を派遣するはずがない。

なのはの脳裏には先日のマドカとの戦いが映っていた。

もし、マドカが本局の命令で動いていたとしたらと考えると、本局を完全に信用することはできない。

「ああ、ここ最近、地球に幻影達が現れる頻度が高いらしい。それで、アースラの戦力だけでは足りない可能性が出ることからの派遣だそうだ」

なのはの問いにクロノは派遣理由を答えるが、なのはの不安は消えなかった。

「あんまり気にせんほうがええよ、なのはちゃん。それに応援が来

れば少しは楽できるさかいな」

はやてがなのはの不安を打ち消すように発言する。

「旅行から帰ってきたときには紹介できるだろうから、楽しみにしておいてくれ」

「なのは、何がそんなに気になるの？」

「ごめん、何でもないんだけど、なんだか不安になるんだよ」

しかし、誰が発言してもなのはの不安を書き消すことができなかった。

【鍊の家】

鍊の家にはさすがが訪ねてきていた。

「すずか、俺の荷物の準備はいいから、自分の準備をしたらどう？」

「私の準備はもう終わってるよ」

すでにすずかは明日の準備を終わらせ、旅行前日のため休みになった今日は朝から鍊の家に入り浸ろうと考えていたのだ。

ちなみに、五和は自分の準備があるらしく朝一で声を掛けると部屋に戻って行った。

「あとは何か入れるものある？」

「うーん、着替えは入れたし、ガイドブックも入れた、宿泊セットもオツケー……これ以上あるかな？」

「携帯の充電器は？」

「それは朝に入れるよ、それにしても、3泊4日か意外と長いな」

「しかも団体行動は1日目と最終日だけだから、2日目と3日目は自由行動。いろんなところを回れるね」

荷物の準備が終わり、鍊はキッチンで紅茶を淹れながらすすかと旅行の日程を話し始める。

「すすか、紅茶はどうする？」

「じゃあ、ミルクティでお願いしていい？」

「もちろん」

鍊はすすかの要望どおり、ミルクティを淹れ、昨日作ったロールケーキをお茶うけに出した。

「鍊くんってお菓子も作れるんだね」

「そう言えば初めてだったけ、すすかに出すのは。まあ、あんまりこったやつはできないけどね。」

「でも、男の子で作れる人って少ないよ？」

「そうだね。それにしても、喫茶店に寄りすぎじゃないか、この計

画

「あはは、まあ女の子が多いしね」

確かに、鍊、剛、遊騎以外は全員女子であるから仕方ないのではあるが、ほとんどが喫茶店めぐりになっているような気がする。

「どこか行きたい場所でもあった？」

「特にはないけど、静かな所に行きたかったかな」

「ごめんね、私たちばかり意見を通しちゃって」

すすかは暗い顔をしてトーンを落とす。

「あ……でも、俺も甘い物は嫌いじゃないし、向こうにしかないものもありそうだしね」

「うん、ありがとう」

お茶を飲んだ後もすすかは元気がなかった。

そこで鍊は思い切った行動に出た。

「すすか、出かけようか？」

「え？」

鍊の急な発言にすすかは驚いた。

鍊はすずかの手をとり、声をかける。

「向こうではずっとみんなが一緒だろ。だから、今からデートにいく」

「うん！」

こうして、二人は街へ出た。街へでた二人の様子は本当に恋人同士のようにだったと目撃したはやてが語ったことにより、他のメンツがすずかと鍊に嫉妬したのはまた別の話である。

【京都】

修学旅行初日、鍊たちは旅行地である京都に来ていた。

昼少し前に京都駅に到着し、今は観光バスに揺られている。

「あの……鍊？」

フェイトはためらいがちに鍊に声をかける。

くじ引きで、行きの新幹線、観光バスと鍊の隣の席を手に入れたフェイトであったが、先ほどから鍊が不機嫌なまま小説を読んでいるため遠慮がちになってしまう。

というより、雰囲気が悪すぎるのだ

（マスター、フェイトさんが呼んでますよ）

ブリューナクの念話でようやく気がつくくらい鍊は不機嫌であった。

「ん、どうしたの？」

なるべく、普通を装い返事をするが不機嫌な雰囲気は消せていなかった。

「あの、どうかしたの？」

「は？」

（おそらく、不機嫌の理由が知りたいんじゃないですか？）

（……なるほど）

「さっき、清水寺で少しだけ自由時間あっただろ？」

「うん、あったね」

「その時にお土産物屋で逆刃刀を見つけたから買ったんだけど、教師に没収された」

「そ、そうなんだ（逆刃刀？）」

先ほど立ち寄った清水寺では自由時間があった。

フェイト達大抵の生徒は隣にある縁結びの地主神社に行くのだが、そのほかの生徒は清水坂にあるお土産屋に足を向ける者もいるのだった。

鍊も清水坂に足を向けた一人であり、お土産物屋で発見した逆刃

刀に一目惚れしたのである。

「それ、いくらくらいしたの？」

「え〜と、4万くらい？」

「4万!？」

フェイトは金額に驚いた。

だが、鍊の不満はまだまだ続く

「しかも、団体行動のコースが小学校で行くようなコースじゃないか、ふざけてんのか？」

「あはは……」

フェイトは笑うしかなかった。

しかし、鍊の新たな一面を見た気がして少しうれしくなるフェイト。

フェイトは知らないうちに鍊に魅かれていた。

きっかけは単純なもので、最初は執務官試験に失敗して落ち込んでいる時、その次はなのはが撃墜されて落ち込んでいた時、そして、義兄で初めて好きになった男性クロノがエイミィと結ばれたと知り、失恋で落ち込んでいた時、鍊は自然にフェイトを気遣い、慰めていた。

そんなことがあり、少しずつ、フェイトは鍊のことが気になりだしていたのだ。

【旅館】

夜、夕食を終えたフェイトは部屋に戻ってきていた。
旅館の部屋は少し大きな部屋でアリサ、なのは、五和が同部屋になった。

「アリサ、私もう一回、露天風呂行ってくるね」

「わかったわ。男どもの覗きに気をつけなさいよ」

「うん、ありがとう」

そういつて、フェイトは露天風呂に向かう。

露天風呂が大層気に入ったらしく、本日2回目の入浴である。

ちなみに、なのはと五和は売店に飲み物を買いに行っており、アリサは旅行雑誌を読んでいる。

明日の夜、鍊の誕生会を鍊の部屋で行う予定にしているので今日は大人しくしておこうとはやてが提案したのである。

露天風呂には誰も人がいなかった、時刻は9時少し前くらいだろう。聖祥の生徒しか宿泊していないらしいが、他の生徒は部屋のシャワーや屋上の展望大浴場にも行ったのだろう。

「やっぱり、気持ちいい。星も見えるし」

フェイトが温泉に浸りながら星を眺めていると、策を隔てた向こうの男性湯の扉があく音が聞こえた。

（え！？男湯に誰か来た？まさか…覗きになんかこないよね…）

フェイトは先ほどアリサに言われたことを思い出す。

すると、声が聞こえてきた。

「うーん……いい湯だ。やっぱり露天風呂は最高だな」

「錬！？」

聞き覚えのある声にフェイトは声を出してしまった。

錬は大部屋なのに、剛と遊騎の三人部屋であった。

夕食後、剛はぶらついてくると言って、出かけてしまい。

遊騎はシャワーを浴びて、疲れたと言ってすでに布団に入っている。

行きの新幹線の中からはしゃいでいたので仕方ないと思うが。

その為やることなくった錬は風呂に行くことにした。

そして、屋上の大浴場に行ったのだが、人が多く、引き返して露天風呂へ来ていた。

「お、誰もいない」

『よかったですね、マスター』

「おう、満喫しようじゃないか」

そういつて、露天風呂に入って行った。

「うゝん……いい湯だ。やっぱり露天風呂は最高だな」

と独り言をつぶやくと、柵の向こうから、

「錬？」

と名前を呼ばれた。

「その声は…テストロッサさん？」

「うん、そうだよ。錬も露天風呂にきたんだね」

「上の大浴場がいっぱいだったからね」

「上よりこっちのほうが気持ちいいよきつと」

「そうだね、星も見えるし」

そう言つて、空を見上げる。

互いに見上げているのか、二人はしばらく無言であった。

「そうだ、鍊、上がったらずい少だけ時間くれない？」

「ん？いいけど」

（やった！）

フェイトは勇気を出して、鍊を誘うことに成功した。

「じゃあ、先に上がるね」

そう言って、フェイトは先に露天風呂を出て行った。

フェイトが上がった少しあとになり、鍊も上がることにした。

「あんまり待たせるのもわるいな」

露天風呂をですすぐのところにあるレストルームの椅子にフェイトは座っていた。

それに気がついた鍊は後ろから声をかけ、二人分買ったコーヒー牛乳をフェイトの頬にくっつけた。

「おまたせ」

「ひゃ！鍊！」

いきなりのことにフェイトは変な声を出し、頬を膨らませる。

鍊はフェイトの対面に腰かけ、コーヒー牛乳を渡す。

「俺のおじり」

「あ、ありがとう」

鍊はようやく、フェイトのほうを見ると、彼女はホテルに置いてある浴衣を着ていた。

正直に言おう、危険であると。

フェイトは中学生であるが大人顔負けのスタイルをしている。

すずかにも勝るとも劣らないフェイトが浴衣を着ている。しかもサイズが少し小さいのか、妙に胸が主張していた。

（これは……誘ってるのか？ いや……そんなことは……ない……よな？）

「あ、あのね。鍊」

「は、はい！」

よこしまな考えが浮かんでいた鍊は、とっさに話しかけられビックリと反応し、返事をする。

「あの、正直に言っね」

「あ……ああ」

鍊はなんとなくだが、フェイトが言わんとしていることが分かった。

鍊は鈍感ではない、自分に向けられる好意は素直に感じ取ることができる。

周りを見ていても、小学時代から同じクラスの男子はいるが、フェイトから話しかけているのは鍊くらいであることは鍊自身も感じていたのだ。

「私、鍊のことが……っ！」

フェイトがその続きを口にしようとした瞬間、魔力反応を感じ取った。

（マスター！）

（魔物！？）

フェイトも感じ取ったのか、いつの間にか執務官の顔になっている。

（バルディッシュ、場所は？）

（ホテル裏の山のようです）

（なのはたちに連絡して、すぐに結界をはるよ）

（yes・sir）

フェイトは念話を終わると、鍊のほうを向いた。

「ごめん、また今度、時間ももらえるかな？」

「ああ、構わないよ」

「ありがとう」

鍊は笑顔で答えてフェイトを見送った。

「行くぞ、相棒！」

『Yes・My Master・』

自分の愛機に声をかけると、魔力反応がした方向へ鍊も飛び出していった。

第11話『古の都の地にて』中編（前書き）

第11話中編です。

戦闘の場面切り返って結構無難しいです。

第11話『古都の地にて』中編

ホテルを飛び出したフェイトはなのはとはやてに合流し、少し離れた森の奥へと入り市内全域に結界を展開させた。

「まさか、こっちにも出るとは思わなかったわ」

「さつき、クロノにも連絡したんだけど、向こうにも出現したみたいで、こっちに応援は送れないみたい」

「仕方ないね、だけど、まさか市内の各所に現れるなんて」

フェイトが空中にディスプレイを展開させて反応を検索する。

反応は4か所、いずれも中心部から綺麗に東西南北に分かれている。

「4か所か、とりあえず、反応の多い南、西、北を先に対応しよか」

「そうだね、一気に殲滅して最後に東側を抑えよう。」

「了解、じゃあ、いこうか」

なのはの言葉に二人が頷く。

「レイジングハート！」

「バルディツシュ！」

「シュベルトクロイツ！」

『standby ready』

「セーリット・アップ!」

3人が光に包まれ、各々のバリアジャケット、騎士甲冑に身を包む。

「じゃあ、二人とも気つけてな」

「はやてちゃんも気をつけてね」

「なのは無茶したらだめだよ」

それぞれが市内中心部に到着したところで、なののは北、フェイトは南、はやては西へと別れていく。

その頃、なののは達に少し遅れて鍊と五和が森に入っていた。

「四か所に同時に出現?」

「高町さん達は、反応の多い、北、南、西へと向かったようですね」

五和が魔力反応を見ながら冷静に答える。

その時、鍊の前に空中ディスプレイが開かれる。

『やあ、鍊』

「何の用だ、ジェイル？」

映し出されたのはジェイル・スカリエッティ、鍊の協力者で友人でもある。

『少しまずいことが起きてね。ドゥーエからの情報なんだけど、ロストロギアの移送中、事故でそちらの世界に移送中の物が墜ちてしまったようなんだ。』

「管理局も厄介なことをしてくれますね」

ジェイルの言葉に五和が反応する。

「それで、それだけならまずいことにはならないだろ？まさか、アレか？」

『話が早くて助かるよ。機動試験中だったんだがその魔力に反応したのか転送ポットが使用された形跡があった。』

ジェイルいわく開発中の新型の試験中、アレが魔力反応に敏感に感知して暴走したのだとか。

「だから、余り高性能にはするなと言っただろう？」

『まったくもってその通りさ。すまないがアレを完全に破壊し尽くしてほしい。まだばれる訳にはいかないからね。』

「ロストロギアはどうするんです？」

『可能なら回収してくれたまえ。レリックほどではないが、かなり

の魔力を保有しているようだ。形状は手のひらぐらいの大きさの緑色の宝石だそうだ』

ディスプレイに画像が映し出される。

「わかった。後はこつちでやる」

『頼んだよ』

そう言つてジェイルは通信を終わらせた。

「さて、どうしたものかな」

鍊が悩んでいると

「鍊、俺にもやらせろ」

森の入り口から剛が歩いてくる。

「私もいるよ」

その後ろには雪が付いてきていた。

「なんで二人が結界内に？」

二人の姿を見て、五和が驚き尋ねる。

「ふふふ、これでも私は白騎士なんだよ、アンフィ」

『set up』

直後、雪が光に包まれ次の瞬間、海色のミニスカート、白いインナーに上から碧いジャケットを纏い、さらにその上から水色のローブをまとった姿になった。

そして、その右手には先端に青の宝石が輝く杖が左手には女神が描かれた円形の盾が握られていた。

『紺碧の海姫』

『それに水精の防人、アンフィバナジスか』

その姿を見たブリューナクとシリウスが声をあげた。

「雪、お前魔導士なのか？」

「うん、そうだよ。このために転校してきたんだから」

雪は笑いながらいつもの口調で言う。

「それで、真崎くんはどういうことですか？」

雪は良しと判断したのか、五和は剛に話しかける。

「……………起きろ、ファフ」

『お、なんだ、坊主？』

剛が声を掛けると、いつも付けている金色の腕輪が声を発した。

「めんどくせえが、出番だ」

『あいよ!』

次の瞬間、剛は光に包まれ、制服の上から漆黒のマントで身体が包まれた姿になった。

そして、右手には一般的な剣より一回り大きい岩でできた斧剣（ファフニールの1stフォーム：ファング）を持っている。

その状態に本来なら左手に剣型のアームドデバイスを持つのが剛の戦闘スタイルなのだが、今は修復中で右手の斧剣のみである。

「俺も、魔導士だ。管理局じゃねえから安心しろ」

姿が変わった剛を見て錬は目を丸くした。

「そっか、ありがとな、剛」

「…………ふん」

錬がお礼を言うも、剛はそっぽを向いて鼻を鳴らした。

「それじゃあ、剛は東側を頼む。俺は北、五和は南、雪は西だ。それと、雪に剛、バイザーで顔は隠して、認識障害をしておけよ、管理局に見つかる厄介だ」

「…………めんどくせえ」

「うん」

二人はそう答えると、愛機に声を掛け、バイザーで顔を隠した。

「それじゃあ、作戦、スタートだ。」

「了解！」

五和と雪がそう言って空へと上がっていく。

「剛」

それを見届けた鍊は剛に声を掛ける。

「あん？」

「無茶はするなよ？」

鍊のその言葉に、剛は手を上げるだけで答えた。

『任せとけ、小僧、坊主の面倒はしっかり見とくからよ』

その代わりに剛のデバイスが鍊に答えた。

「ああ、よろしく頼む」

そう言って、鍊も空へ上がり北へ向かった。

【市内南部】

フェイトは市内南部に到着すると、幻影がいつもと違うことに気が付いた。

数もいつもより多いこともあるが、いつもと動きが違っただ。

「もしかして、野生生物を取り込んでる？」

『おそらくその通りと思われます。』

フェイトの問い掛けに愛機であるバルディッシュが答える。

「油断はできないね。いこう、バルディッシュ」

「yes sir. Plasma Lancer get set
t」

フェイトの周囲に8個の魔力スフィアが現れる。

「ファイア」

フェイトの掛け声とともに、スフィアから電気を纏った魔力弾が次々を発射されていき、鳥型や獣型の幻影を討ち抜いていく。

「やっぱり、動物を取り込んでる。」

討ち抜いた幻影から吸収された動物達が落ちていくのが見える。

非殺傷とはいえ、野生の動物に攻撃を加えているのは事実であり、そのことにフェイトは心を痛めたのだ。

すでに20体は討ち抜いたであろうか、その時、明らかに歪な影が現れる。楕円の形をした黒い影が数体動いているのである。

「あそこにも！」

それを見つけたフェイトはすぐさまプラスマランサーを発射するが、その影に当たる直前で魔法が消えてしまう。

「何！？」

直後、その影はフェイトの方向を向き、レーザーのようなものを放つ。

『D e f e n s e r P l u s 』

とつさにバルディッシュが防御呪文を発動させ、その攻撃を防ぐ。

「くっ」

フェイトも攻撃を回避しながら攻撃するも其のことごとくが無効化されていく。

その後も、攻勢に出れないまま、回避と攻撃を繰り返していた。

直後、フェイトの視界に人影が映る。

（人！？なんで結界内に？）

そう思いながらも、その人影の前に躍り出て、防御呪文を展開する。

「ここは危険です、早く逃げ……」

そう言いながら後ろを振り向くとフェイトは目を見開いた、そこには幻影魔物が人の姿をしており、そのままフェイトをはがいじめにする。

「マ……マリヨク……モッテル……ニンゲン……」

「くっ、放せ」

自らの失態を頭の中で後悔しつつ、幻影（人）を引き剥がそうとするも、常人ならざる力で拘束され、引き剥がすことができない。そこへ、先ほどの幻影の集団がこちらへ向かってくる。

（やられる！？）

その瞬間、フェイトは目を閉じた。

一方その頃、東側の剛は圧倒的であった。

「おおおおおおお」

剛は雄たけびを上げながらファフニールを天に掲げると、逆手に持ちかえ、一気に地面に突き刺した。

「火柱！」

『zero flame』

直後、幻影たちの周りにいくつもの火柱が現れ、幻影たちを焼き尽くしていく。

直後、炎の向こうから飛び出してくる幻影を斧剣で薙ぎ払って行く。

『こつちには大した奴はいねえ見てえだな。アレを使うまでもねえか、坊主』

「黙ってる、ファフ」

戦闘を初めて10分くらいであろうか、東側が一番少ないとはいえ、剛は対して魔法を使わず、幻影を駆逐してしまった。

「俺をつぶしたいならもっと強い奴を連れてこい」

『ははは、そいつらに言っても無駄だぞ、坊主』

直後、剛の上空を黒い影が北の方を向かって飛んでいく。

『坊主、あの影、小僧の方に向かったぞ。追わなくていいのか？』

「ああ、あいつなら大丈夫だろ」

そう言って、デバイスを待機状態に戻す。

「さて、風呂にでも行くか」

そう言って、剛は旅館の方へ歩き出した。

西側ではフェイトと同じく、はやてが苦戦していた。

「あかん、こいつらとうちじゃ相性が悪すぎる。リインがおれば殲滅呪文で一気に殲滅できるのに」

悪態をつきながらも、謎の幻影の攻撃を回避しながらも他の鳥型や獣型の幻影をブラッティダガーやクラウ・ソラスで落としていく。

戦闘ははやてが攻勢であった、しかし、完全後方型の彼女にとってスタンドアロンはかなりの体力を消費していた。

（あかん、集中力が切れかけてきた）

その一瞬をつかれ、はやては獣型の体当たりを食らい、地面にたたき落とされる。

「あぐっ」

攻撃された直後、ブラッティダガーで落としたはいいものの、地面との衝突で身体のおちこちに痛みが走る。

目をあけると、幻影達が一斉にこちらへと向かってきている。

（こら、あかんかな……）

北側では、なのはがレイジングハートをシューティングモードにして上空に飛翔しながら飛行型に対して砲撃を繰り返し、1撃で3体を消滅させ、高度が同じになると、愛機をアクセルモードに戻し、

アクセルシューターを使い1体ずつ確実に落としていく。

「数がかなり多い、フェイトちゃんとはやてちゃん大丈夫かな？」

『大丈夫、二人も強いですから』

「うん、そうだね。レイジングハート」

そして、なのはの方にも人型の幻影が現れた。

『マスター、一般人が取り込まれています』

「そんな、一体どうしたら」

なのはが迷った瞬間、人型の幻影が揺らぐとともに、黒い魔力弾の様なものが放たれる。

『マスター！』

「わかってる！」

なのはは攻撃を回避しながらアクセルシューターを発動させる。

「シュート！」

アクセルシューターで幻影の攻撃を撃ち落とす、そのまま攻撃に転ずるも、その攻撃はことごとく魔力弾で相殺される。

「強い！？」

『マスターあの真ん中の影から異様な魔力量を感知しました。これはロストログアクラスです』

「どういうこと？」

愛機の言葉に戸惑うも、敵の攻撃で思考を中断させられる。

『マスター避けて！』

「え！？」

直後、なのはを黒い魔力砲撃が飲み込んでいった。

第11話『古の都の地にて』後編（前書き）

後編です。

感想、アドバイス等お待ちしております。

第11話『古の都の地にて』後編

【南側】

フェイトが目をつぶった瞬間

『storm b a s t a r』

その声と共に、風を纏った魔力砲撃が幻影を薙ぎ払う。

「塵鳴流暗殺剣一ノ剣、陽炎」

直後、フェイトを拘束していた人型幻影が刀で切られ、フェイトの拘束を解いた。

「あ、あなたは、白騎士のジャンヌ!？」

「管理局の魔導士、手を貸してあげるから幻影を駆逐するわよ。」

そう言って、ジャンヌは魔法を無効化する幻影に突撃する。

「気を付けて、そいつには魔法が」

フェイトがその声を掛けるも

「もとより承知しています。あなたは人型を！」

ジャンヌはシリウスをライフルからガトリング形態に変更し、魔力弾で牽制しながら突っ込んでいく。

「でも、一般人が取り込まれていて」

人型を任されたフェイトは取り込まれた人に意識があるとまずいことになることを頭の中で考えていた。

「ちっ、人間も動物も取り込まれた意識はありません。魔力ノックアウトで幻影だけを攻撃しなさい」

その言葉にフェイトは大きく頷き、人型へ向かう。

「バルディツシュ、一撃で決めるよ。」

『yes sir』

フェイトは一気に空に上昇し、幻影を見下ろす。

直後、フェイトの足もとに魔法陣が広がり、幻影に右手を翳す。

「トライデント………スマッシャー！」

手の前に現れた大きな魔力スフィアから3つの魔力砲撃が放たれ、幻影を包み込んだ。

砲撃が晴れた後、そこには一般人の男性が倒れていた。

「よかった、怪我は無いみたいだ」

『mission complete』

「うん。ジャンヌの方は？」

フェイトが攻撃を行った同じころ、ジャンヌも幻影達を攻撃していた。

サイクロンシューターフランク스로幻影を牽制しつつ接近し、懐から呪符を取りだす。

「魔法がダメなら、魔術はどうかしら？符に込められし力よ、弾けよ！」

五和が呪符を投げると同時に呪符から雷が発せられ幻影達を包み込む。

直後、幻影は消滅し、楯円の機械が姿を現す。

『主よ、今です。』

「塵鳴流暗殺術三ノ剣、散華^{さんか}」

五和が逆手に持った刀で機械を一瞬で細切れにする。

塵鳴流暗殺術三ノ剣^{さんか}散華、高速の連続斬撃で対象を粉々に切り刻む暗殺術でもっとも威力がある攻撃である。

直後、五機ほどいた機械は全てが爆発、残骸も回収できないほど粉々となった。

それを確認したジャンヌはフェイトが声を掛けてくる前にその場から姿を消した。

【西側】

幻影が一斉にはやてに襲いかかろうとした直後

『アイシクルレイン！』

直後、はやてに襲いかかろうとした幻影達に氷柱が無数に降り注ぐ。

「な、なんや？」

ゆっくり立ち上がるはやての前に、バリアジャケットを着た少女が舞い降りる。

「私は白騎士が一騎、紺碧の歌姫。セイレーンよろしくね」

「なっ白騎士やて！？」

はやてはその言葉を聞きとっさに身構える。

「今は協力してあげるから、さっさと幻影をかたずけよう。ライトオブデザイア、使えるんでしょ？」

セイレーンのはやてに対し、光の広域殲滅呪文を使えと言ってきた。

「今日はユニゾンしてへんから上手く制御できんし、魔力チャージ

に時間がかかるんや」

「そうなんだ、じゃあ、私が時間を稼ぐからチャージお願いね。」

そう言つて、セイレーンは幻影に突っ込んでいく。

「アンフィ、今回はファーストのまま行くよ」

『ええ、まかせて。例の機械には気をつけてね』

「うん」

セイレーンがそう答えると、彼女の周りに氷と水の魔カスファイアが浮き上がる。

「さ〜て、いくよ〜」

『blizzard storm』

直後、嵐のように氷と水の魔力弾が幻影達に降り注いでいく。

攻撃を避けてくる幻影には杖と盾で打撃を与えていく。

「アンフィ！」

『shield banker』

セイレーンが盾を構えると盾に魔力が集まり、直後魔力の渦が幻影を飲み込んでいく。

（私いないんちゃう？）

魔力をチャージしながらはやてはそんなことを思った。

「よし、完了や、セイレーン、いくで！」

「いつでもどうぞ」

「天の光よ、闇を包みこめ！ライトオブデザイア！」

次の瞬間周囲が光に包まれ全ての幻影が一瞬で消滅した。

（さすがライトオブデザイア、機械ごと蒸発させたわね）

（うん、光が収まらないうちに撤退するよ、アンフィ）

（ええ）

光が収まった時、そこにははやての姿しかなかった。

「白騎士はもういいひんか………一体何が目的なんや」

【北側】

なのはは黒い魔力の奔流に巻き込まれたと思ったが、まったくもって無傷であった。

「え！？何が」

なのはの目に映ったのは自身の方に背を向けている純白のローブだった。

そして、自らの身体が横になっていることに気が付く。

そこでなのはようやく自らが抱きかかえられていることに気が付く

そこには青い機械のようなフルスキンのアーマーに身を包んだ人物がいた。

其の外見で特徴的なのは顔にある二本の髭である。

更には肩、肘、手甲、腹部にと緑色の宝石のようなものが目立つ。

見る人が見ればこの姿はまさしくロボットに見えた。

「ふ、ふえええええ、誰ですか!？」

なのははその人物に声を掛ける。

「気にするな、通りすがりの傭兵だ、これがな」

その言葉に反応したのはアーベントだった。

「ふん、フルスキンの傭兵、お前が噂の『レーヴェ』か？」

「俺を知っているか。ここはひとつ手を貸そう、こいつがな」

そう言うと、レーヴェはアーベントの横に並ぶ。

「ふん、好きにしろ、高町なのは、俺とこいつが前に出る。お前は砲撃で援護しろ」

「う、うん！」

直後、鍊はロストログアを吸収した人型幻影へ、レーヴェはそのほかの幻影に向かって行く。

「これが幻影魔物が、確かに厄介そうだが雑魚には違いない、これがな」

レーヴェは一気に幻影に突っ込んでいき、打撃で消滅させていく。

「玄武剛弾！吹き飛ばえ！」

レーヴェの両肘に付いている刃が回転を始めそこに魔力が帯びる。そしてそのまま、その魔力を拳を打ち出して解き放つと、魔力は渦を巻きながら拳の形をした魔力と共に幻影達を消滅させていく。

「ディバイイーン、バスター！」

レーヴェが撃ち漏らした幻影はなのはが砲撃で消滅させていく

（なんだろう、彼の次の動きが分かる。合わせやすい）

なのはは妙な既視感にとらわれていた。

レーヴェとの連携が初めてとは思えないくらいにやりやすい。

一方、アーベントはまだ攻撃を行わず、幻影の攻撃を回避するだけだった。

（人を取り込んでいるってことは、間違いなくレジェンドデバイス狙いか？）

（いえ、今回はあのロストログアでしょう。アレの魔力の方があいつらには魅力でしょうから）

アーベントはブリューナクと念話で会話しながら幻影の目的を探っていた。

（こっちにアレはいないみたいだが、これほどの魔法攻撃が幻影ができるものなのか？）

（もともと魔法が使える人間を取り込んでいるなら可能です。威力はあのロストログアで底上げしているんでしょう）

アーベントはなるほどと頷く。

「砲撃型に近接戦闘は禁物だな。それなら、アレを使うか相棒」

『アレですね、了解。魔力値規定値をクリア、3rd form's t a n d b y』

「ブリューナクランチャー……セツト！」

鍊のコールにより、ブリューナクはその形を長身の銃に姿を変え、鍊のバリアジャケットは黒いズボンに白のインナー、その上に上半身を覆うジャケットを纏う。さらに、ランチャーを持つ右腕には肩

までの白い装甲で覆われ、左腕には肩と肘から手首までの白い装甲に覆われその装甲にはオレンジ色のラインが入っている、両の掌は指先が出るフィンガーグラブを付けている。

特徴的なのは背中であろう、背中に着いている装甲からはテールバインダーのようなものが設置されており、展開することにより機動力を上げることができるようになっている。

これが第3段階のガンナーフォームである。

「……相棒」

『なんですか？』

「いいなこれ、俺好きだぞこっいの！」

『はいはい、よかったですね。それよりも、そろそろ始めませんか？』

「そうだな」

そう言つて、アーベントは今までの黒とは違う白色のバイザーをかける、このバイザーには標的のロックオン機能、サーチ機能が付き、情報処理までしてくれるため、この状態のときにはかなり重宝する。

「さあてと、行きますか！」

『マスター、敵から攻撃来ます』

「相棒、手札はそう見せられない、一撃で封印と撃破、行けるな？」

『私を誰だと思ってるんです！？あなたのパートナーですよ』

アーベントの問いかけにブリューナクは生き生きと答える。

「よし、行こうぜ！」

『target lock-on』

バイザー内に映るターゲットセンサーが幻影をロックする

「光よ、撃ち抜け！」

『shining bastard』

次の瞬間、ブリューナクランチャーの砲身の先に魔力が集まりなのはのデイベインバスターに勝るとも劣らない白い光が発射された。

砲撃が直撃すると思われた瞬間、人型は、別の幻影を盾にして攻撃を回避する。

「避けられた！？」

『来ます！！』

直後、無数の魔力弾がアーベントに殺到する。

アーベントは回避しながら自らの魔力弾で追いかけてくる魔力弾を迎撃する。

「面倒だ、相棒！」

『詠唱はこちらで請け負います。確実に当ててください!』

「わかってるよ!」

アーベントは一瞬でファイターフォームに切り替える

「おおおお! 封覇水瀑衝!」

この技は、腕に水流を纏わせ腕を高速で前に出すことにより、衝撃波と水流で敵の動きを封じることが主な目的である。

アーベントが技をはなつと、水流は幻影に纏わりつき動きを封じていく。

「ア……アアアア」

『マスター!』

「ああ! ガンナーフォーム!」

ブリューナクの呼びかけで再びガンナーフォームになり、次の行動に映る

『魔力消費が高すぎるので一回の戦闘でコレを使えるのは五回までですいいですね?』

「わかってる。」

『大いなる光の柱よ、不浄の闇を浄化せよ! ノーティスライト』

ブリューナクが叫ぶと同時に空に大きな光るを放つ魔法陣が描き出される。

『大いなる光の柱よ、集束せよ！』

その瞬間、ブリューナクが声をあげると、発動した光が集束されランチャーモードのブリューナクに集まる。

すると、アーベントの足もとに、六芒星を象る魔法陣が現れる。

『砲身固定！』

ブリューナクの砲身の下から固定台が展開され、砲身が固定される。

「バレル展開！」

その後、砲身が一段階伸びて、砲身の先が上下に分かれて展開し、魔力が銃口に収束する

「浄化の光、一撃で貫く！」

『ノーティスライトバレット』

「フルシユート！」

鍊が引き金を引くと、ランチャーの先から極大の光の柱が発射され、幻影と纏わりついていた水流ごと飲み込んでいく。

光が収まると、幻影が取り込んでいた肉体を棄てたところが見えた。

すかさず、なのはが落ちていく人間をキャッチする。

幻影は逃げようと、アーベントとは逆方向へ飛んでいく。

「逃がさん！」

『マスター、行けます！』

「無慈悲なる白銀の抱擁！アブソリユート」

『白銀の刃よ、我に宿れ』

「アブソリユートバレット、フルシュート！」

アーベントは立て続けに砲撃を放つ。放たれた光は幻影に直撃した瞬間、幻影ごと凍りつき、こなごなに砕け散った。

ブリューナクはランチャーの上の部分から空の弾丸を2発排出し、各部分から蒸気を放ち放熱処理を行う

「お疲れ、相棒」

『マスターこそお疲れ様です。』

アーベントはロストログアを封印すると、そのまま空域を離脱した。

そしていつの間にかレーヴェの姿もいなくなっていた。

そして、なのはは抱きかかえた人物を見て驚愕する。

其の地球では見られない服装、そして見慣れた上半身を覆うアー
マー

「うそ……本局の……」

その人物は間違いなく時空管理局の魔導士であった。

次回予告

修学旅行2日目、鍊やなのは達は自由行動に盛り上がる。

そんな折、奇しくもはぐれてしまった鍊とフェイトはある迷子を通してその距離を近づける。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐ者 第12話『迷子と二人の距離』

『花の折鶴、うんとっても綺麗だね』

第12話『迷子と二人の距離』（前書き）

今回から少しだけキャラ同士の交流になります。

基本1×1です。

さて、第1回は錬×フェイトです。

感想お待ちしております。

第12話『迷子と二人の距離』

全てのポイントで幻影を駆逐された後、なのは達は最初にいた森の中に戻り、事の次第をクロノに報告していた。

『管理局員が幻影に取り込まれていた！？』

「うん、アーベントとレーヴェって人が手伝ってくれて無事に助け出すことはできたんだけど。」

なのはの言葉を聞いて、画面の向こうのクロノは顎に手を当ててしばし、思案する。

『わかった。そちらに医療班を向かわせる。その局員からの事情聴取はこちらに任せて、引き継ぎ次第、旅館に戻るといい。報告もこっちに帰ってからでいいから』

「でも、クロノ」

義兄の言葉にフェイトが異議を申し立てようとする。

『仕事熱心なのはいいが、三人ともほとんど休まないからな、これは君たちの休暇、休息も兼ねているんだ。だから、こっちに任せればいい。まあ、そっちで戦闘してもらって言うことではないというのは僕だってわかってる』

そのクロノの言葉にはやてが折れた。

「わかった。こっちは修学旅行に戻らせてもらっわ。」

「はやて（ちゃん）！？」

「フェイトちゃんもなのはちゃんも、クロノ君の気遣い受け取るとき、これが私たちの最初で最後の修学旅行になるかもしれへんことをわかって言ってくれてるんやから。」

その言葉でなのはとフェイトはクロノの気持ちをようやく理解した。

はやては中学を卒業後、ミッドチルダに引っ越すつもりでいるし、自分たちも高校にはいかず、向こうで生活することを決めていることを思い出した。

「わかった。ありがとう、クロノ君」

「うん、ありがとう」

『わかってくれればいい、もうすぐそちらにスタッフが着く、確実に引き継いでくれよ』

そのクロノの言葉と同時に数名の医療班とシャルマルが転送されてきた。

「はやてちゃん、二人とも、大丈夫？」

局員の対応をほかのスタッフに任せ、シャルマルは三人の方へ近寄る。

「大丈夫や、大した怪我もしてへんよ」

はやてのその言葉を聞いてシャマルは安心したように頷くと、次はなのはの方を向く。

「なのはちゃんは体調に異変は無い？」

「わ、私は大丈夫ですから」

その言葉にいち早く反応したのはフェイトだった。

「ダメだよ、なのは。ちゃんとメディカルチェック受けてね。なのははすぐに無理するから」

「フェイトちゃんの言うとおり、一応チェックしておきましょう？」

なのははしぶしぶと頷き、シャマルのメディカルチェックを受けた。

それが終わるころには局員の移送準備が整い、シャマルとスタッフたちは再びアースラへと戻り、なのは達も急いで旅館へと戻るのであった。

夜が明け、修学旅行2日目、グループごとの自由行動日である。

鍊達は兼ねてからの計画通りに2日目は市内中心部から西側を散策し、昼前に一度、中心部へと戻り、食事をした後、北西部に向かう予定になっていた。

そう、なっていたのだが……

「うう、どこだ？」

鍊は何故かみんなとはぐれていた。

（なんで北西部に向かうのに、東に来てるんですか、マスターは？）

愛機の突っ込みもまともに返せず、鍊は愕然とし、バス路線のマップを見直す。

「俺確かに。。。系統のバスに乗ったよな？」

簡単に話そう、鍊達は昼食後バス停で自分たちが乗車するバスを待っていた。

バスの時刻を確認すると、発車したばかりで少し時間があつたため、鍊はトイレに行くと言って少しバス停を離れる。

それが悪かった。

最悪なことに近くのコンビニには一般用トイレがなく、少し離れたところに公園を見つけて公衆トイレまで行つたのはいいのだが、その帰り道、入り組んだ道で迷つてしまい、ようやく戻ってきたときには他のメンツを乗せたバスは発車しており、携帯には【はやてちゃん達が止まらないから、先に駅まで行ってるね】と言うずずかからのメールが届いていた。

そこまではいい、次のバスは比較的早い時間にあるためそれに乗ればすぐに追いつけるからだ。

その直後、やってきたバスを見ると、乗るはずだった系統の番号が書かれたバスであったため、予定より早く来たと思い、飛び乗ったのだ。

それが悪かった。

まさか途中までは同じ方向に向かい、その後まさか、逆の方向に行くとは思っていなかったのだ。

「ぐぬぬ、まさか複数路線があるとは……………」

（マスターらしからぬミスですね）

「……………黙ってろ」

鍊は愛機に突っ込まれて顔を若干赤くする。

（あ、恥ずかしいんですよ、恥ずかしいんですね？）

「やかましい！つぶすぞコラァ！」

鍊は愛機の突っ込みに堪えられなくなり、つい大声をあげてしまう。

ヒソヒソ……………

クスクス……………

ママ、あのひ…しっ、目を合わせちゃいけません

と、声が周囲から聞こえてきたのでいたたまれなくなり、足早にその場を後にした。

しばらく進み、何度か路地を曲がるとようやく一度足を止める。

（ふう……………）

（それで、これからどうするんです？）

（そうだな、せっかくだし、俺が行きたかったところにも行くかな）

さすがに鍊はこれ以上の失態はできないと念話で会話を始める。

（明日の予定でもそこは入ってないし、ちょうどいい）

（では、すずかさんにメールしないとですね）

愛機がそう言うと同時に、鍊は携帯を取り出しながら周囲を見回す。

（以外とうちの制服以外の集団もいるんだな）

（地元の学生だったり、他の学校の修学旅行も来ているのでは？）

更に周囲を観察していると、さすがは京都の繁華街といったところか、学生から外国人までいろんな人が歩いている。

携帯を握り、人間ウォッチングをしながら鍊が歩いていると、金髪の女性が数人の男に囲まれていた。

（さすが京都、外人さんもナンパされるんだね〜）

（何、バカなことを言ってるんですか、あれ、テストロッサさんですよ）

鍊がそのまま横を通過しようとする、プリユーナクが呼びかけた。

「あ、本当だ。（それよりも、なんでテストロッサまでこっちにいるんだ？）」

鍊が振りかえると、数人の軽そうな男（おそらく、大学生くらい）にフェイトが囲まれていた。

（うーん、まあ、彼女は中学生でも大人っぽい方だしな）

その光景を見た鍊は、妙に納得しながら携帯を一度ポケットにしまつ。

「な、俺たちと遊びに行こうぜ」

「絶対楽しいからさ」

「その制服京都のじゃないよね、俺たちが案内するからさ」

「あの……友達が待ってますんで……」

「じゃあ、その娘たちもいっしょにさ」

そういつて、男達は優しそうな笑みを見せながらフェイトに近づ

いていく。

しかし、その目はフェイトの胸やすらりと伸びる脚に向けられている。

更に、フェイトはこういったことに慣れていないのか、だんだん追い込まれていく。

「まあ、仕方ないか。女性は愛でるものだけど、あの目は気に食わない」

（はいはい、さっさと助けてあげたらどうですか？）

男たちの一人がしびれを切らせたのか、フェイトの腕を掴んだ瞬間、その男の肩を鍊が掴んだ。

「なんだ…ぶっほ」

その男が振り向いた瞬間、鍊は持っていた鞆で男を殴打した。

ちなみに、鞆の中には紅茶を入れた魔法瓶が入っている

「あ、ごめ〜ん。ぶつかっちゃった〜テヘリ」

鍊は笑いながらぺコちゃんのように舌を出す。

「てめえ！ぶつかったじゃねえだろ！」

殴られた男を庇いながらフェイトの右側に立っていた金髪の男が前に出る。

そうして、殴られた男もゆっくりだが起き上がる。ただ、ダメー
ジは結構あるようだ。

「あらら、以外としぶとい」

「やっぱりわざとじゃねえか！」

鍊は男を無視して、笑顔でフェイトに話しかけた。

「やあ、テストロッサさん、お待ちせ」

「鍊！」

フェイトはほっとした表情を浮かべると、男たちの隙を見て鍊の
後ろに回る。

「くそっ一発は一発だ！」

殴打された男がそう言いながら右手で殴りかかってくる

鍊はその腕を掴むと同時に一度自らの方へ急激に引っ張り、相手
の体勢を崩すと、背中へと掴んだ腕をまわし、更に左手で男の襟首
を掴んで前かがみになった男の上半身を引っ張り上げること肩の
関節を決める。

「いでででで」

「まったく、なっちゃいないね」

「ふざけんな！」

また、先ほど鍊の前に出てきたリーダーっぽい金髪が殴りかかってくるが、関節を決めていた男を反対側へ押し出して転ばせ、一瞬で男の後ろに回り込むと、金髪の襟首を引っ張り尻もちをつかせる。

「いてっ」

鍊は尻もちをついた男の横で中腰になり、男に聞こえるように囁く

「相手の力量ぐらいわかれよ、中学生相手にばこられたくはないだろ？」

鍊は酷く低い声で呟く。

金髪は耳元でささやかれゾツとしたのか、カクカクと頷いている。

それを見た鍊はにこりと笑い、立ち上がるとあえて周囲に聞こえるように言い放つ。

「これって正当防衛だから、へいきだよな」

「くそ、行くぞ」

残りの男が二人を連れて逃げて行った。

鍊は男たちが遠くへ行くのを確認した後、ようやくフェイトの方を向くと、いきなり手を取った。

「へ？れ、鍊！？」

いきなり手を握られたフェイトは急な出来事に困惑する。

「ずらかるよ。暴れすぎた」

周囲の人の目がこちらを向いていた。

「あ…」

「走るぞ」

「え？」

錬はフェイトの疑問に答えずに手を引いて走り出した。

【鴨川 河川敷】

「ここまでくれば、大丈夫だろ」

「はあ、はあ、はあ、錬…いきなり…走るからびっくりしちゃった」

フェイトは息を整えながら錬に声をかけた。

「ごめんな、急に走り出して」

「ううん、気にしないで、錬のおかげで助かったよ」

息が落ちつけた二人はとりあえず、河川敷に座ろうとする。すると、いまだ手を繋いでいることに気がついた。

「あ、ごめん」

「あ……」

鍊が手を離すと、フェイトは一瞬だけ残念そうな顔をした。

「それにしても、なんでテストロッサさんはこっちにいるの？」

「それを言うなら鍊だって」

「それもそうだね」

「うん、そうだよ。」

二人ともみんなとはぐれたのだと分かり、一緒に笑い出してしま
う。

「ハハハ、俺は、ちょっと、乗るバスを間違えちゃってね。そっちは？」

「私は、バス停の近くにジュエリーショップがあって、可愛いな
って思ってたそのお店に行ってたら……」

「置いていかれて、慌てて乗ったバスが全く違うバスだったと」

「う、うん」

鍊の言葉に恥ずかしそうにフェイトはうなずいた。

すると、鍊は携帯を取り出し電話を始める。

「あ、すすか？うん、今どこ？嵐山についたの？いやさ、乗るバス間違ってるね。真逆の方に着ちゃってさ、うん、うん、ごめんって、それでさ、そっちテストロッサさんいないでしょ？え？なんで知ってるかって？彼女もバス間違ったみたいでさ、さっき合流したんだ。それで、今からそっち行くのも時間かかるし、こっちで明日行かないところ回るよ。うん、うん、じゃあ旅館だね。うん、わかってるよ。それじゃあね。」

そう言っ、錬は電話を切ってフェイトの方を向く。

「すすか、何だっ？」

「テストロッサさんは向こうではくれたことになってたみたいで、みんなで探してたっ。」

「後でみんなに謝らないと」

「お詫びに二人でなんか買って行こうか」

「うん、そうだね。」

「じゃあ、行こうか？」

そう言っ、錬はフェイトに手を差し出した。

「え？行くっ？」

「せっかくだから二人で回ろう」

フェイトはその言葉を聞いて戸惑いながらも鍊の手を取り、立ち上がる。

鍊と言えば、フェイトが立ち上がるための補助に手を差し出したつもりだったのだが、フェイトは鍊の手をそのまま握っていた。

「あゝその……手……」

「え？…あ、ご、ごめんね？」

「あ、うん、気にしないで」

鍊とフェイトはお互いに顔を赤くいていたが、二人で並んで歩き始めた。

「……どこに行こうか？」

フェイトが恥ずかしそうに鍊に尋ねた。

「すこし、行きたいところがあるんだ」

そういつて、鍊は歩き始めた。

【平安神宮】

鍊が来たのは平安神宮にある神苑だった。

「着いたよ」

「平安神宮、昨日来たよね？」

「ああ、昨日は表だけだったでしょ？ここには神苑っていうのがあ

って奥に作られてる庭を見ることができなんだ」

鍊は受付で二人分の拝観料神苑の中を進んでいく。

「私、自分の分は払うから」

「気にしない、気にしない、俺に行きたかったところについてきてくれてるんだから、ね」

そう笑顔で言っただけで鍊はそのまま奥へと進んでいく。

中には様々な木々や花などが綺麗に栽培されている。

「鍊はどうしてここに来たかったの？」

フェイトのその問いに鍊は笑いながら答える。

「ここには俺の好きな花があるんだよ。そろそろ咲く時期だと思うんだけど」

そのまま進んでいくと、少し大きな池のふちに沿うように、白地に紫色の模様が入ったが入った花がいくつか咲いていた。

「うわぁ…綺麗な花」

「これを見たかったんだよ」

鍊はそう言っただけで携帯を取りだし、一番近くにあった花に向けてピントを合わせ、数枚写真を取りながらフェイトに花の解説を始める。

「この花の名前はね杜若っていうんだ」

「カキツバタ？」

「うん。アヤメ科の花なんだよ。白地に紫の模様が入ってるでしょ。花の咲いた感じが千代紙っていう京都にある色紙で折った折鶴をそのままそつと置いた見た目だろ？光格天皇と言う人がこの花を好きでそう命名したんだって。だから、別名【花の折鶴】ってても呼ばれるんだ。」

「花の折鶴、うんとっても綺麗だね」

鍊が花の解説をすると、フェイトはしゃがんだまま、一番近くに咲いている花に手を伸ばす。

鍊は自然とその姿に携帯のカメラを向けシャッターを切った。その行為に特に意味は無かった、ただ自然とそのフェイトの姿と杜若が一枚の絵画のように美しく思え、無意識のうちにその行動に出ていた。

そのことに気がついた瞬間、鍊は慌ててその想いを消し、解説を続ける。

「さ、さっきも言ったけど、杜若はアヤメ科の花なんだ。アヤメの花言葉は吉報、うれしい便り、愛とかいろいろあるんだけど、杜若の花言葉は、幸運、雄弁になるんだよ。（やばいやばい、綺麗だつて言うところだった）」

「幸運……うん、確かにそうかもしれない」

「ん？何か言った？」

そのフェイトの眩きはとても小さく鍊に聞こえることは無かった。

「さて、お目当ても拝見できたし、先に進もうか？」

「うん」

しばらく進むと、大きな池の上にかかる橋、たいへいかく泰平閣・通称「橋殿」で結婚式の写真撮影が行われていた。

「おお、和風の結婚式だ。」

「女のひと綺麗だね」

しばらく待っていると、撮影が終わり、通れるようになった。
フェイトと鍊はそのまま平安神宮を出て行った。

【京都 住宅街】

二人は平安神宮から離れた住宅街を歩いていた。

「さっきの人綺麗だったね」

「そうだね。テストロッサさんはあと2年ちよつとくらいで結婚できる年齢になるけど、白無垢とドレスだったらどっちを着たい？」

「え！？」

鍊の質問にフェイトは大きな声を上げるので鍊は苦笑した。

「はは、俺が聞くことじゃあないか」

「うっん、そういう意味じゃなくて……」

フェイトは鍊の言葉に慌てて答えるが、何かに気がついたように急に顔を周囲に向ける。

「どうしたの？ テスタロッサさん」

鍊も急なフェイトの反応に戸惑いながらも何事が尋ねる。

「子供の泣き声がするんだ」

その言葉に鍊も耳を澄ませるが、鍊には聞こえなかった。

「……聞こえないよ？」

「うっん、聞こえる……こっちから」

言うが早いか、フェイトは走り出す。

「テストロッサさん！？ ったく！」

鍊は悪態をつきながらもフェイトを追いかけた。

【公園】

住宅街にある公園、そこに設置してあるブランコに8歳位の男の子が泣きながら座っていて、先に着いたフェイトが座り込んで子供をあやしている。

「はぁ、はぁ、追いついた。意外と脚速いな……その子どうしたの？」

「母親とはぐれたみたいなんだ」

「そっか、君、名前は？」

鍊はフェイトと同じように座り込み、子どもと目線を合わせて名前を尋ねる。

「……瞬」

「そっか、俺は鍊。よろしくな、瞬」

「私はフェイトだよ。」

「……うん」

「瞬はお母さんとはぐれたんだってな？どこではぐれたんだ？」

「…おもちゃ売り場」

「デパートか」

「このあたりにデパートってあったっけ？」

「南の方になると思うけど…」

「お母さん、見つからないの？」

二人が思案していると、瞬はまた泣きそうになる

「瞬の家はこの辺りなのか？」

「ううん」

「鍊、私たちが探してあげよう」

「……それよりも警察に届けた方が得策だと思うが」

「でも、ほっとけないよ」

フェイトの真剣な表情とまっすぐな瞳に鍊は折れた。

「まあ、時間はまだあるしね。わかった。瞬、お母さんを探しに行くぞ！」

鍊の言葉に瞬は顔を上げ笑顔で答える。

「うん！」

瞬は鍊とフェイトに近寄り二人の手を取った。

「それじゃあ、行こうか？」

「うん！」

それから小一時間、瞬の母親を探し続けたがみつからなかった。

「……お母さん、見つからない……」

「もしかして、もっと違うところなのかな？」

だいぶん歩き回ったせいで瞬は疲れているようだった。

「瞬、ほら」

錬は瞬の手を離し、かがんで瞬に背を向ける

「え？」

「疲れただろ、ほら」

瞬は少し溜め合いながらも錬の背中に乗る。

「よし、行くぞ！」

瞬が乗った重みを感じたところで、錬が勢いよく立ちあがる。

「うわわ、高い」

「それじゃあ、もうひと頑張りするか、瞬」

「うん！」

そのやり取りをフェイトはただ見つめていた。

「ほら、テストロッサさん、行こう」

「え！？う、うん」

そう言って歩き出す錬をフェイトは慌てて追って行く。

鍊は歩きながら瞬に話しかけた。

「なあ、瞬、お母さんは好きか？」

「うん、お父さんも好きだよ！」

「それなら、いっぱい親孝行するんだぞ」

「うん」

瞬は元気に鍊の言葉にこたえる

「それと、強い男になれ。だれにも負けないくらい、大切な人を守れるくらいにな」

「強く？」

「そう、強く。だから、簡単に泣いちゃだめだ。男が泣くのはうれしい時と、大切な人を失った時だけだ」

「うん！わかったよ。鍊お兄ちゃん！」

「よし、じゃあ約束だ」

「うん！」

そんな二人の姿をフェイトはほえましく見守っていた。

それからしばらくして、近くの交番に寄っていた瞬の母親と会う

「ことができた。」

「本当にありがとうございました」

「いえ、気にしないでください」

「ばいばい、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「うん。バイバイ」

「瞬、約束忘れるなよ」

「うん」

そう言って親子は帰って行った。

交番からの帰り道、唐突にフェイトは切り出した

「鍊って子供の面倒見がいいんだね」

「そんなことないよ」

「ううん、探してる間、ずっと瞬君に声を掛けてた」

鍊は照れているのか、頬を人差し指で掻いている。

「でも、瞬を先に見つけたのはテストロッサさんだろ？」

「そうなんだけどね。」

フェイトはしばらく思索すると、意を決して話し始める。

「あのね、鍊に聞いてほしいことがあるんだ。」

その真剣なまなざしを見て、鍊は近くの公園を指さす。

「とりあえず、あそこに行こう」

そう言っで、鍊は公園に入っでいき、フェイトもそれを追った。

鍊はフェイトをベンチに座らせると、コップを取り出し、魔法瓶から紅茶を入れてフェイトに渡した。

フェイトはその紅茶を飲むと、おいしいと一言言っで、話を始めた。

「……私ね、ハラウン家の養子なんだ」

そこからフェイトは自分の生い立ちを話した。魔法とプロジェクトFのことは抜いていたものの、その内容は脚色されておらず、真実を語る。

死んだ姉に見たてられ、ひどい虐待を受けていたこと、だけど、その母親のことを愛していたこと、テストロツサはその母との思ひ出の名前だということ。母親が死んで親切にしてくれたハラウン家に引き取られたこと。

「そうだったんだ」

「うん、だから、親と離れ離れになっでる子供をほおっておけないんだ」

「そっか、でもなんで俺に生い立ちの話を？」

「錬は私のこと、テストロッサって呼んでくれるでしょ？私の友人にも一人いるんだけどね。テストロッサって名前はやっぱり、私の中で特別な意味をもってるから、その名前で呼んでくれる錬に知っておいてほしかったんだ。」

そういつてフェイトは錬にほほ笑んだ。

「そっか…」

そう言つて、錬はまた頬を掻いた。
その行動にフェイトが気づく

「それ、癖だよね」

「え？」

「照れたときに頬を掻くこと」

そう指摘され、錬は初めてその癖に気がついた。

「あ…気がつかなかった」

「気づいてなかったんだ」

「うん」

そういつて、また頬を掻く

「ほら、また」

「あ……」

そうして、二人は笑いあった。

「そろそろ帰ろうか、テストロッサさん」

「フエイト」

「え？」

「…二人っきりの時は名前で…呼んでほしいな」

顔を真っ赤にしてフエイトは言った。

「私は名前で呼んでるから…鍊にも名前で呼んでほしい……みんなの前ではいつもどおりでいいから……ね」？」

正直、鍊は女性のお願いに弱い。

しかも、知り合いの女性に上目づかいで「ね？」などと言われると受ける以外の返答を持っていない。

「あ……うん、じゃあ、行こうか、フエイト」

「うん！」

そうして、二人は歩きだした。

そんな二人の距離はさっきまで歩いていた間隔より近くなってい

た。

次回予告

2日目の夜、鍊の部屋では、鍊の誕生パーティーがいつものメンツで開かれる。

そんな中、誰かが投げた枕をきっかけに始まるまくら投げ、男子の部屋にいる女子、盛り上がるまくら投げ、そして見回りに来る教師……はたして彼らは最後までまくら投げをやりきることができるのか。

そして、みんなが騒ぎ疲れた後、一人出ていく五和とそれを追う鍊

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第13話『誕生日と枕投げと二人の誓い』

『私があなたに誓いを立てたのも今日みたいに月と星が綺麗な夜だったわね』

第13話『誕生日と枕投げと二人の誓い』（前書き）

今回は錬×五和です。

ちよつとグダグダかもしれませんがよろしく願います。

第13話『誕生日と枕投げと二人の誓い』

修学旅行、二日目の夜、夕食の時間が終わった後の自由時間。

鍊と剛、遊騎の部屋にはなのは達が全員集合していた。

予定通り、鍊の誕生日を祝うためである。

「それじゃあ、飲み物は行きわたったな？」

はやてのその言葉に皆が頷く。

「それじゃあ、いくで！」

そして、部屋の電気が消され、蝋燭が灯されたケーキが運ばれる。

そして、全員が一斉に

「「「鍊^{くん}（御門くん）誕生日おめでとう！！」「」」

「みんな、ありがとう」

鍊は少し照れながらも、一気に蝋燭の灯を消すと一斉に拍手が巻き起こる。

「それじゃあ、御門くんの14歳の誕生日を祝って、乾杯や！！」

「「「乾杯！！」「」」

乾杯をした後、なのはがケーキをカットして配っていく。

その手際は良く、さすがは実家の喫茶店を手伝っていただけはある。

「それにしても、良くホールケーキなんて買ったね。」

鍊が手渡されたケーキを見てしみじみと言う。

それもそのはず、ケーキには蠟燭のほかに、鍊の名前入りのプレートまで用意されていたのだから。

「それ、蓮華が話を聞いてこっちのお店調べて予約しておいてくれたのよ。感謝しなさい！」

「ア、アリサさん、そのことは秘密につて」

アリサが鍊の疑問に答えると、蓮華が秘密にしていたことをアツサリとばらしてしまう。

「なんで、バニングスが偉そうにしてるんだよ。それよりも、ありがとう。蓮華、嬉しいよ」

鍊はアリサのことを無視して、蓮華にお礼を言う。

「ううん、誕生日の話を聞いたのが出発の前日だったからプレゼント用意できなかったの。それでせめてケーキでもと思って。」

その言葉をきいたさすがいきなり切り出してくる。

「鍊くん、プレゼント、私から渡すね。」

そう言って箱を渡してくる。

「ああ、ありがとう。すずか」

鍊はそう言って箱の包装を綺麗に外し中身を見る。

中にはおしゃれな腕時計が入っていた。

「鍊くん、前に腕時計壊れたって言ってたから、作ってみたんだけど」

「ああ、気にいったよ。さすがはすずかだな」

そういつて鍊は早速腕にその時計を付ける。

「なあ、その時計、月村さんがしてるのに似てないか？」

遊騎が気がついたことを呟く。

「ほんとだ。すずかちゃん、もしかして自分の分も作ったの？」

遊騎の言葉になのはが続く。

「うん、ついだったし、私も腕時計欲しかったから。」

「そう言えば、初めてだな、すずかとおんなじ物するのって」

鍊がサラッと言う。

「なに？あんだ達一緒に買い物とか言っておそろいのもの買ったりしなかったの？」

「うん、私も鍊くんもあんまり買ったりしないし。出かけてもウィンドウショッピングか」

「喫茶店でお茶するかって感じだな」

その言葉を聞いてみんなが息を漏らす。

「なんだか、この二人って大人びすぎてない？」

雪がみんなの思ったことを代表して言う。

「じゃあ、遊園地とかそういったところには行かないの？」

フエイトも興味があるのか聞いてくるが。

「そう言えば言ったことないよね？」

「そういえば、そうだよな」

「なあ、もっと恋愛ってドキドキわくわくするもんちゃうん？」

鍊とすすかの反応にはやてが問いかける。

「恋愛って言ってもな……………」

「私たち付き合ってるわけじゃないし、ね？」

鍊とすずかはお互い顔を見合わせる。

お互い婚約者であると理解しているからこそ、別に恋人である必要性は無いと思っているのだ。

実際に婚約者であればいずれは必ず結ばれる。

しかも、お互いに好意を持っていればなおさらだ。

実際、両者に温度差はあれど鍊もすずかも互いに好意を持っているのだから。

「それに、鍊くんを独占するのは無理だと思うし、ね、五和ちゃん？」

すずかが急に五和に話を振る。

「なんで私に振るんですか？まあ、その通りだと思います。」

そう言つて五和はジロツと鍊を見る。

「な、なんだよ？」

「別に、なんでもありません」

そういつて、五和は再びケーキを食べ始める。

「まったく、なんなんだよ」

「まあ、あれだな。リア充爆発しろ！」

鍊に向かって遊騎が叫ぶ。

「なんだよ、お前だつてた「いわせねえええ！」」

いきなり遊騎が叫んで枕を投げてきた。

「あぶなっ！」

とつさに避けた枕はアリサに話しかけられていた剛に直撃する。

「……………いい度胸だな」

直後、剛が枕で遊騎に反撃する。

「うおっ！」

「ごふっ」

遊騎が避けた枕ははやての後頭部に直撃する。

「ふ…………ふふふ…………ええ度胸しとるやないか！」

はやてが参戦し、三方向から枕が飛ぶ

「はやて、落ち着こうよ」

フェイトがはやてを諷めるもその言葉は届かない。

「そうよ、ちょっとは…ぶほっ…………よくもやったわね！空牙！」

「俺！？俺じゃねえって」

アリサが投げた枕を遊騎が回避すると、それはケーキを食べようとしていたなのはに直撃し、ケーキがテーブルに墜ちる。

「ふふ、ふふふふふ、二人ともちよつと、O H A N A S I
しようか？」

なのはもそこに参戦する。

「なのは！？きゃ」

「さてと、今日何してたかフェイトちゃんにちゃーんと聞かないとね？」

ずずかがいつの間にか枕を持ちフェイトに向かって投擲する。

「まって、ずずか、何もない、何もないから」

剛腕のずずかに狙われたフェイトはとにかくその攻撃を回避し続ける。

「枕投げ楽しそうですね。私も」

「私も仲間に入れて」

蓮華と雪もそこに参戦する。

その様子を見ながら五和はそつと、部屋を出て行った。

鍊はすぐにその後を追う。

鍊が部屋を出た後、部屋の方から教師の怒鳴り声がしたのはまた別の話である。

【中庭】

五和は中庭にいた。

旅館の中庭は以外と広く作られており、少し歩けるようになっていて、少し大きな池等がある。

そのほとりに五和は立っていた。

足音で気がついたのか、五和の方から声を掛けてきた。

「もう7年になるのね」

7年、それは鍊と五和が出会い、共に過ごした時間である。

「速いよな。あの時はまだまだガキだったけど。まあ今も子供なんだが」

鍊も7年前のことを思い出したのか、しみじみと呟く。

「最初は酷く嫌われてたな」

鍊は昔を思い出して苦笑する。

「あの頃の私は誰に対しても無愛想だったもの。」

五和も昔を思い出したのか苦笑する。

「でも、学校の時はいまでもあの頃の性格を演じてるだろ？」

「その方がいいでしょう？いきなり性格が変わればみんな驚くもの、当時のあなたみたいにね」

「違うない」

二人同時に苦笑する。

錬が日本へ引つ越したのは8歳のころであるが、五和に出会ったのは7歳のころである。

日本へ行くのなら護衛が家の仕来たりにのっとり紅家の護衛を付けることとなり、1年前に少しの間だけ日本の本家に行き、そこで錬は五和と出会った。

そのころの五和は周囲から孤立した存在だった。

紅家に伝わる力の一つに霊力がある。

五和はその力で幼いころから普通の人間が見えないものが見えていた。

幼い五和はそれが見えることが普通だと思い学校の友達に話してしまい、怖がられ、いつの間にか孤立し、男子からはからかわれる様になった。

そして、彼女は親から遺伝した猫かぶりを見事に使い、クールな自分を作り出し周囲に壁を作るようになったのだ。

小さなころから錬も女性に対してだけは勘が鋭く働く性格だった。これも親からの遺伝ではあるが、父親から事あるごとに、女性は愛

でるものだと父親流の女性に対する紳士の在り方を叩きこまれたせいでもあるのだが、この性格は兄の翔には遺伝していない。

そのとき鍊は親に教えられた方法でも五和と打ち解けることができず混乱していた。

ちょうどそんな時だった、鍊がたまたま遊びに出た公園で平日だったこともあり、五和がクラスの男子や女子に罵られているのを見て彼は自然と動いた。

『お前ら、何してるんだ!?』

『誰だよ、お前?』

『そいつの友達か?』

『じゃあ、この人も変人?』

『変人の仲間なら変人だろ?』

『お前ら、変人で誰のことだよ』

鍊のその言葉に子供たちは一斉に五和を指さす。
彼女は冷めた目でその様子を見ている。

『そいつ、お化けが見えるって嘘言っただぜ』

『私は妖精って聞いたことある』

そこで鍊は出かける前に宗煉から聞かされた紅家の話を思い出した。

彼女には人ならざるものが見えるのだということを

『だから？それで人をいじめる理由にはならないよ。』

『なんだよ、お前、そいつのこと好きなのか？』

誰が言ったのか、小さい子供のころだ、男が女を好きと聞けばはやし立てるのが子供である。

『じゃあ、夫婦じゃね』

『やゝい、変人夫婦』

『おまえら、いい加減にしろよ、人が人を好きになるのは当たり前だ、それに男が女をいじめるなんて、男のくずがすることだ！』

鍊は遂に怒りが頂点に達し、大きな声で叫ぶ。

『それにお前らも、将来いい女にはならないな、人をいじめる奴は顔に出る、不細工になるぞ』

そう言つて、女子を指さす。

そして、一人の男子が罵倒されて頭にきたのか殴りかかってくるが、このころから格闘技を学んでいた鍊はいとも簡単にカウンターを入れその男子を弾き返す。

おそらく、リーダーだったのだらう、その男子が倒れると他の子供は蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

その様子を見届けた五和は鍊が振り向いた瞬間、走り去ってしま

った。

『ん？どうしたんだ、あいつ？』

鍊はその時の五和の行動が分からなかった。

「そう言えばあの時なんで走って行っただんだ？」

「あんた、わかって言ってるでしょ？」

鍊が過去を振り返り思い出したようにニヤニヤしながら五和に尋ねるが、彼女はフンッとそっぽを向くがその頬は少しだけ赤い。

「あの後だよな、お前の本性知ってびっくりしたの」

家に戻った後、しばらくしてから五和にお礼を言われた鍊だったのだが、そのときまで堅苦しい敬語だったのがいきなり砕けたため口になったのだから鍊でなくても驚くだろう。

「うるさい。でも正直本当に助かったわ。あの後、あなたが一度イギリスにもどってからだけど、みんな謝ってきたのよ？」

それは鍊にとって初耳だった。

「そっか、それは良かったよ。」

その言葉の後、二人は黙り空を見上げる。

鍊はこの沈黙が嫌いではない。

五和が傍にいるのは7年前からずっと変わらない、むしろ彼女が近くにいたほうが安心感がある。

むしろ会話などいらない、ただ黙って傍にいただけでよかった。それは五和にとっても同じで、錬が視界にいるだけで安心感があった。

「ねえ、覚えてる？」

その静寂を五和が破る。

「私があなたに誓いを立てたのも今日みたいに月と星が綺麗な夜だったわね」

錬は再び空を見上げる。

空には満月と星々が輝いていた。

「ああ、俺が8歳の時の誕生日だろ。確かにあの日も綺麗な星と月だった。まあ、あの時は三日月だったけど」

錬は思い出して少し微笑む。

「今ここで、また貴方に誓いを立てるわ」

「え？」

錬が驚いて五和を見る。

「わが身、わが命は常に貴方と共に、私は貴方の剣、貴方の盾、私のすべてで貴方を守り、貴方の望むことを叶える。私の命が尽きる

まで、貴方と共にあることをここに誓います。」

その言葉と同時に、二人の影が重なる。

錬は自らの唇に柔らかいものが押しあてられ、一瞬驚くがそれが五和の唇だと分かり、軽く彼女を抱きしめた。

ほんの一秒かそれとも数分もそうしていたのか、二人が離れる。

「私のファーストキス、だからね。」

その言葉に錬は頷くことしかできなかった。

「五和、俺は」

「いいの、私は貴方の剣としてずっと貴方の傍にいる。それだけいい」

錬は自らの言葉を遮られ、彼女はこの運命から解き放たれるまで自らの剣になることを今改めて誓ったのだ。

8歳の誕生日に錬の護衛になることを誓ったあの日と同じように

「俺も誓うよ。俺は君がいる限り絶対に死なない。例えどんなことが起ころうと、この運命から解き放たれるまでは死にはしない。」

その言葉に五和はゆつくりと頷いた。

「私が今日から貴方の護衛よ、私は貴方の剣で貴方の盾、だから私

とあなたはずっと一緒にいるの、いいわね?」

『うん、わかったよ、五和』

二人の脳裏にはかつての誓いの言葉が蘇っていた。

鍊と五和が部屋に戻った時、そこは悲惨な状況になっていた。

いまだに立ったままで枕を構えている遊騎とはやて、そして周りには疲れたのか倒れ伏しているすずかに剛、奥の隅で寝ている蓮華と雪、そして廊下で正座させられているのはとフェイトにアリサがいた。

「何があつたんだ、これ?」

「……さあ?」

次回予告

時間は少し戻り、一日目の自由行動日、鍊とフェイトがはぐれみんなが手分けして二人を探している時、八神はやては真崎剛の意外な一面を発見する。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第14話「恋は突然に」

『あかん、これは完全に惚れてもったかも』

第14話「恋は突然に」(前書き)

ようやく書き終わった。

剛の一面をどうするかで悩みに悩んで一カ月、それでもこのデキって、文才なくてすいません。

第14話「恋は突然に」

時間は自由行動で錬とフェイトがはぐれてしまった時まで遡る。

はやて達は連絡があつた錬ではなく、いつの間にか居なくなつたフェイトを探すため分散して周囲を回っていた。

「まったく、フェイトちゃんはたまに抜けたところがあるな」

一人愚痴りながら、はやては並んでいるお土産物屋や喫茶店を覗いていくがまったくフェイトの姿を発見できずにいた。

その時、彼女の携帯が鳴った。

「ん？ずずかちゃんから？はい、もしもし？」

『はやてちゃん？そっちにフェイトちゃんいた？』

「まだや、フェイトちゃんくらいの美人ならすぐわかると思ったんやけどな」

『そうだね。こっちはアリサちゃんと合流したから二人で探すね。なのはちゃんは遊騎くん、蓮華ちゃんは雪ちゃんと合流したみたいだから、はやてちゃんの方には真崎くんが行つてるところだし、一人だと危ないし合流して探してね。』

「わかった。ずずかちゃん達も気を付けてな」

そういつて、通話の終了ボタンを押す。

「さて、じゃあ真崎さんと連絡を……って、真崎さんの番号知らんがな!!」

そう言うと同時にやはり携帯を地面に叩きつける。

「しゃーない、ほんならまずは真崎くんを探すとするかいな……にしても勢いで携帯地面に叩きつけてしもた、耐衝撃性の携帯で良かったで、ヴィータが進めてくれといて助かったわ」

そう言いながら、やはりは剛がいそうな場所を目指すことにした。

余談であるが、はやての携帯は2週間ほど前に機種変更をしたのであるが、その時について行ったヴィータが、はやてが乗り突っ込みをする際手に持っているものを地面にたたきつける癖を覚えていたので耐水耐震機能のある携帯を勧めたのである。

話は戻り、はやては周辺で剛を探すことにした。

しばらく近くにある店の中を覗いたり喫茶店を覗くことを繰り返して、15分ほどたった時、はやてはあることに気がついた。

「さっきとやってること同じじゃんけー!!」

またも携帯を地面にたたきつける。

「フェイトちゃんの次は真崎くん探して同じことって、まったく観光する暇あらへんがな!!」

大きな声で不満をぶちまけた後、少し冷静になったはやてはゆっ

くりと、携帯を拾いあげると、ふと、ある店の窓の向こうに見慣れた無造作の金髪が目に入った。

「あ、おった。」

はやては剛を見つけたのはいいが、その状況と剛のイメージがミスマッチすぎてしばらくその様子を店の外で見つめるしっかできなかった。

一方、剛はと言うと、気に入ったものがあつたらしく、店員に声を掛けると、そのまま会計を済ませ、店に出た直後、立ち尽くしていたはやてと目が合ってしまった、直後、走り出した。

「あ、ちょいまちい！」

はやてもその剛の行動で正気を取り戻し、彼を追って走り出した。

おそらくこの姿を錬が見ていたら大爆笑していただろう。

その後二人は10分ほど追いかけてこをし、荷物を持った剛に手ぶらのはやてが追い付く形で追いかけてこは終了した。

軽く疲れた二人ははやての提案で近くの公園で休憩をすることにした。

「あゝ疲れた、真崎くんが荷物持っとなってくれたおかげでなんとか追いつけたで」

「はあ……はあ……はあ……ふう、八神、お前なかなか体力あるんだ

な」

「脚のリハビリとかで結構鍛えてたさかいに、今でも鍛えてるんやで」

剛の質問にはやては息を切らさずに笑顔で答える。

その顔を見て、剛はフツと吊られて笑みを漏らしてしまう。

「あ……」

「ん、どうした？」

「真崎くんが笑つとるとこ初めて見た」

そう言って、はやてはまた笑顔を見せる。

しかし、先ほどとは違って少しいたずらっ子のような笑みである。

「……………めんどくせえ」

その顔をみた剛はボソツといつも口癖を漏らすのだった。

「それにしても、今日は真崎くんの新たな一面を発見する日やね、まさかアンティーク雑貨が趣味とは思わへんかったわ」

「……………あれは俺の趣味じゃねえ、お袋だ。」

「じゃあ、ほんまか？それにしても笑顔で買い物しとったで？」

「ぐ……まあ、俺も、嫌いではない」

しぶしぶと呟く剛を見てはやはりまたも笑顔をこぼした。

普段、学校では不良と他の生徒や教師から言われ、街でもよく札付きの不良と言う話を聞いたことがあり、最近、鍊との付き合いで自分たちと関わるようになったとはいえ、普段の剛しか見ていないはやてにとって、剛は一匹狼の不良で誰かといってしまうのもその誰かは必ず鍊でありそれ以外の人間は見たことがない、つまり皆が言う不良にしか見えないのである。

まあ、彼女にとって、一度友達になっただけでしまえば、どんなに不良と噂されていても共に騒ぐことができればそれでいいのである。

しかし、はやてには今日の剛は年相応の少年にしか見えなかった。

外見は言わずもがなぼさぼさの金髪と吊りあがった目、指定の制服を着崩して殆どボタンもせず、ネクタイも緩めているいつもの格好。

だが、いつもの人を寄せ付けない雰囲気はない。

ちなみに聖祥男子の制服はブレザーである。

「そつえば、鍊くんがフェイトちゃんは見つけたようやで、それで私は真崎くん迎えに来たんよ」

「……わりいな」

「ええよ、慌てて逃げる真崎くん見れたことやしね」

はやてがニヤリと笑うと、剛はまたため息を吐く。

「……………めんどくせえ。で、何が望みだ？」

「へ？」

その剛の言葉にはやてが素っ頓狂な声を上げる。

「口止め料が欲しいんじゃないのか？」

「私、そんなせこそうに見えるんか？」

「ああ、鍊があいつはタヌキだから気をつけろって言っていたしな」

「……………御門くん、後で覚えときや……………」

はやてが不敵な笑みを浮かべながら握りこぶしを握っている様子を見て剛はやれやれと肩をすくめる。

「それで、どうなんだ？」

「うーん、べつにそんなんええんやけど、そうや、真崎くんのこと聞かせてくれへんか？」

「……………面白い話なんかないぞ？」

「別にええやん、ちよつと興味あるんよ」

「……………めんどくせえ」

剛は頭をかきながら立ち上がると、そのまま公園を出て行くとする。

はやてもその様子を見て駄目だったか、という顔をすると、すぐに剛の後を追う。

ちょうどその時だった、二人の目に、公園で遊んでいた男の子がボールを追って道に飛び出し、そこへものすごいスピードの車が走ってくる。

余り交通量がないためか、その車は完全に法定速度をオーバーしていた、30キロの道を確実に60キロ以上出ている。

「危ない！」

はやてが叫ぶも、その子供は車を凝視して動けないでいる。

突然の混乱と恐怖に足がすくんでしまったのだろう。

「ちっ、ファフ！」

（しゃあねえな、竜王転送、いけ！坊主！）

「おおおおおお！」

剛は愛機に命じて自らの力を両足に一瞬で集束させる。

そして、その力を全力で開放する。

ドンッ

次の瞬間、剛は先ほどの子供を抱え、反対側の歩道に転がっていた。

（今は、まさか、魔法！？）

「く……坊主、大丈夫か？」

「うん、ありがとう、お兄ちゃん」

男の子は恐る恐る剛にお礼を言うと、剛は少し笑いながら、その子の頭に手を乗せる。

「ボール取りに行く時は気を付けろよ？」

「う、うん」

そう言って男の子は友達のところへ戻っていく。

次はきちんと車が来ていないかを確認していた。

そこへようやくはやてがやってくる。

「真崎くん、大丈夫か？」

「ああ、大したことない」

「なあ、ちょっと聞いてもええか？」

剛の無事を確認するとはやては先ほどのことを問いただそうとする。

「さっきのは忘れる」

「あれは、魔法やね？」

はやては剛の言葉を無視して言葉を繋ぐ。

「高速移動魔法、真崎くんは魔導師なんやろ？」

「……………さあな」

剛は話は終わりだとそのまま立ち去ろうとする。

「待ってえな！！」

はやてはとつさに剛の腕を掴む。

「お願いや私たちに力を貸してほしいんよ！」

そして、はやては自分が魔導師だということ、いま海鳴市で起きている事件のことを話す。

剛は、その話を黙って聞いていた。

「お願いや、力を貸してほしい」

はやての言葉に剛は目をそむける。

「…………無理だ。」

「な、なんでや!？」

「…………八神、お前は魔法は人を守る力だと言った、でもな、俺はこんな力のせいで人を傷つけて、両親に棄てられた。」

「え？」

まさかの一言に、はやては驚く。

「でもさっきお母さんにお土産って？」

はやては剛が持つ紙袋を見ながら言葉を発する。

そう、先ほど剛は確かにお袋への土産だと言っていた。

それなのに、今は魔法の力のせいで両親に棄てられたという。

「…………俺が5歳のころだ、俺は幼稚園で友達を遊んでた。きつかけはもう覚えちゃいないが、一番仲良かった奴と口論になってな、そいつが頭にきたのか俺を殴りやがったんだ、それをきっかけに俺の魔力が覚醒して、そのまま暴走状態になった。」

はやてはその言葉を静かに聞き入った。

「その後は魔導師ならわかるだろ？幼稚園の近くにいた子供は瀕死の重傷、俺もおんなじ状況で病院に運ばれた。去年調べたら、どうやらガス管の爆発ってことになっちまってるがな。その後も俺はふとしたきっかけに魔力が暴走して周囲に被害を出した。交通事故にあいそうになれば魔力が対象の車両を吹き飛ばし、親に怒られて打たれそうになれば親だろうが吹き飛ばした。それで最後は化けもの

扱いで棄てられた。今のお袋は死にかけて倒れてた俺を偶然見つけて保護してくれた、血もつながっていない他人だ」

「そんな……………」

はやては愕然とした。

はやて自身魔法と出会ったのは9歳のころだ。

魔法は両親を失くし天涯孤独だったはやてに家族や友達を与えてくれた。

もちろん、嬉しいことばかりでなく、悲しい別れもあった、けどそのおかげで今の自分があるし、彼女がリインフォースが残してくれたこの手の力は力のない人々、そして自分の家族を守るためにあるのだと、ずっとそう思ってきた。

だが、彼は違った。

剛は魔法の力のせいで両親に棄てられ全てを失ったのだ。

「俺は別にこの力を恨んでるわけじゃない。今では制御もできれば自在に使うことだってできるし、お袋と出会わせてくれたのも実際この力だ。」

「それなら」

「だが、俺は、俺を受け入れなかった奴らのために力を使うつもりは一切ない。」

剛は自らを受け入れた者にしか自分の内側を見せることはしない。教師も他の生徒も外見と見てくれで不良と判断し、剛を自信を見ようとしなない。

そういう扱いをされてきたせいで、剛は次第に周囲を拒絶し本当に不良のように振舞うようになってしまった。

「でも、さっきは男の子を助けたやんか!？」

「……………身体が勝手に動いたんだよ」

「そうなんか……………さっきの話は忘れといてな」

はやては少し考えた末、剛が考えを変えることは無いと思い自ら引くことにした。

これがなのはならもつと強引に行くのだろうが、はやてには無理だった。

理由は一つ、彼のさっきの言葉、

『俺を受け入れなかった奴らのために力を使うつもりは一切ない。』

つまり、彼は自らが認めた人間のためにはちからを使うと言っているのだ。

それは自分が自身の家族を守るといふ信念と同じだと考えてしまったためだ。

それから二人は無言のまま、すずか達との合流のため駅の方へ歩いていた。

「なあ、真崎くん？」

はやては先を歩く剛に声を掛ける。

「……………どうした？」

剛は振り返らないままそれに答える。

「もし、もしやで、私がさっきの子みたいに命の危険にさらされた時、真崎くんは私を守ってくれるか？」

その言葉に剛は驚いて後ろを振り返る。

はやても言った後に自分が言った言葉を思い出したのか、顔を真っ赤にしている。

（あ、あかん、私、なんてこと言うてるんや！？まるで告白やないか！？）

「あ、ご、ごめんな！？さっきの忘れて「いいぞ」…………え？」

剛ははやてに近づくとポンッと開いた左手をはやての頭に載せる。

「……………その時、近くに俺がいたらな」

それだけ言うと、剛は再び前を歩いていく。

「や、約束やで！破ったらなのはちゃん式のOHANASIやから

な」

剛はその言葉を聞いて振りかえることもせず、開いた左手で返事するように手を上げると一言

「……………めんどくせえ」

いつもの口癖を言つとそのまま歩いていく。

はやてはその姿を見て自らの鼓動が速くなるのを感じる。

「あかん、これは完全に惚れてもうたかも」

特に何があつたというわけではない。

彼の一面、過去、その心を見てはやては自然と剛に魅かれてしまった。

「……………どうした、置いていくぞ？」

ふと、はやてがついてきていないことに気がついた剛が足を止めはやてに呼びかける。

「ちょっとまちいな！私を置いていくとはええ度胸や！！」

これも彼の一面、心を開いた相手に優しさを見せる。

だから、はやては自らのこの気持ちを悟られないようにいつものように振舞う。

恥ずかしさを隠すために。

（アリサちゃん、うち、負けへんからな）

はやては剛の隣まで小走りで掛けていく。

【次回予告】

修学旅行が終わり、はやて達が戻ったアースラで、なのはは一人の女性と再会する。

一方、鍊達はいつも通りの学生生活を過ごしていく。

棺が現れることはなく、時間は流れいつの間にか梅雨がもう開けようとしていた。

そんな折、管理局のとある部隊が地球近くの無人世界で消息を絶ったという報告がアースラに舞い込む。

そして、搜索隊として出撃するアースラメンバー、しかし、そこにいたのは視界いっぱいに埋め尽くされた影魔物とそれと闘うクラスメイトの姿であった。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第15話「魔剣グラム」

『我が名はグラム、紅蓮の竜王の剣なり』

第15話「魔剣グラム」前編（前書き）

何とか書けた。

誤字脱字、あれば後日修正します。

今回は前後篇です

第15話「魔剣グラム」前編

【アースラ】

修学旅行が終わった次の日、なのは達は学校が振り替え休日のこともあり、アースラへ来ていた。

そこで、なのはは彼女と再会する。

そう……彼女の名はマドカ・F・アーヴィング

「ああ、三人ともお帰り」

「お帰りなさい、はやてちゃん」

アースラで三人を出迎えたのはクロノとシャルだった。

「ただいま、あれ、シグナム達はどないしたん？」

「ああ、近くの世界で影魔物がでてね、他の部隊が対応していたんだが応援のために出てもらっている」

「さきほど掃討完了の連絡が来ましたから、もう少しで帰ってくると思いますよ。」

「それに、来てくれたのはちょうどいい、応援で来てくれていた彼女の紹介をしておきたかったからな」

そんな話をしていると、シグナム達がアースラに戻ってきた。

「ただいま戻りました、艦長。主はやてもおかえりなさい」

「はやて、おかえり！お土産は？」

シグナムとヴィータがはやてに近寄る。

「まったく、ヴィータは食べ物のことしか頭にないんか？家にあるさかい、帰ったらリンやザフィーラと一緒に食べような」

「うん」

シグナムとヴィータに続いて、黒い腰まで届きそうなストレートの髪に黒い制服を着た女性が部屋に入ってきたところで、なのはは驚いた。

黒い執務官の制服を着た女性がマドカだったからだ。

（どうして、あの人が！？）

なのはの驚いた顔を一瞥したマドカは、そのままクロノに戦闘報告をした。

「艦長、部隊は被害なし、棺は発見できませんでした」

「ああ、ありがとう。アーヴィング執務官。そうだ、ちょうどいい、紹介しよう」

クロノはそういうとなのは達に彼女を紹介する。

「今回、彼女がアースラの応援に来てくれた。」

「初めまして、マドカ・F・アーヴィング執務官です。有名なアースラに配属されてうれしく思います。御三方のお話もかねてより伺

っています。これからよろしくお願いいたしますね」

マドカは笑顔で挨拶をした。

「彼女はこれからもアースラにいてくれるらしい三人とも仲良くな」

「フェイト・T・ハラOWNです。よろしくお願いします。」

「うちは八神はやて、よろしゅうな」

「高町…なのはです」

「よろしくお願いいたしますね、えっと…」「こちらは名前でええよ、年も近いみたいやし」はい、はやてさん、フェイトさん、なのはさん」

お互いの紹介がすむと、ヴィータがマドカのことを話し始めた。

「こいつ、まじで強いんだ。」

「ええ、遠距離タイプなのですが、近距離戦闘もこなします。これで白騎士にも後れは取らないでしょう」

ヴィータに賛同するようにシグナムが語る。

「彼女はまさしくストライカークラスと言ってもいいだろう」

クロノにそこまで言わせることに、フェイトは驚いていた。皆がいろいろな話をする中、なのはは、意を決してマドカに話しかけた。

「あの、アーヴィング執務官」

「マドカで構いませんよ、なのはさん」

「じゃあ、マドカさん、少しいいですか？」

「ええ」

マドカも何のことかわかったのかなのはの言葉に従い、皆の輪から離れた。

すでに話はマドカのことから修学旅行の思い出話になっている。

「単刀直入に聞きます。何が目的なんですか？」

「…目的は同じはずでしょ？」

「じゃあ、まだ御門くんのことを狙ってるんですか？」

「いえ、彼を排除しろと言うのは私の元上司からの指示でした」

「元上司？」

マドカの言葉になのはは不審に思った。

「元上司は上層部の人間なのですが、其の人の独断だったそうです。」

「どういうことですか？」

「白騎士は棺を破壊しようとしている。それを管理局の上層部に良しとしない人がいたんです。それで、白騎士を消せとの密命が下りたのですが、それは彼の独断でした。その後、私も逮捕でなく排除しようとしたとして取り調べを受けましたが、今の上司がかばってくれたのです。そして其の人の命令で今はアースラに応援に来ています。だから今はクロノ艦長の命令に従いますので彼を排除しようとは思いません」

マドカの本当にすまなそうな表情になのはは少しだけ警戒心を解いた。

「そうですか」

「ええ、今は彼を説得して協力してもらえたらと思います」

「そうですね。がんばりましょう」

「あの、私はこういうしゃべり方ですけど、同じ年齢ですので敬語は…」

「あ…うん。よろしく、マドカちゃん」

二人で話していたところへはやてがやってきた。

「二人とも、うちにいくで！マドカちゃんの歓迎会や！」

「いいね、歓迎会」

「ほらほら、マドカも」

こうして、なのはとマドカは再会した。

皆が部屋から出て行く時、クロノはシグナムを呼びとめる。

「シグナム、少しいいか？」

「どうしました、艦長」

「マドカ・F・アーヴィングについてだ」

「彼女が何か」

クロノは少し考えて、意を決してシグナムに向き直る

「彼女のことを調べたのだが、彼女には二つ名があるらしい」

「本人から聞きましたが蒼き月光ではないのですか？」

「いや、もう一つあるんだ。彼女とかつて一緒だった部隊の人間の話だが、彼女は【非情なる月光】と呼ばれていたらしい」

「どういうことです」

「わからないが、何度か、彼女は管理局のある部隊を離れようとした一団を完膚なきまでに叩きのめしたことがあるらしい」

「逮捕、拘束ではなく、ですか？……そのような人物とは思えませんが……」

「僕もそう思うんだが……一応気にしておいてくれ」

「了解しました。」

そう言って、シグナムも部屋を出ていく。

「気のせいであればいいんだが……」

クロノの中では悪い予感が少しずつ大きくなっていった。

【管理局 レオンの執務室】

それから少し時間が流れた。

特にどこかの世界に棺が現れたとの報告もなく時折現れる影魔物の対処に追われる日々が管理局には続いていた。

そんな折、レオンは局員からとある報告を受けていた。

『以上が今回上層部が決定した事項です。』

レオンは報告を受け苦い表情をする。

「上層部……いや、最高評議会はレジェンドデバイスの有用性に気が付いてしまったか」

『そのようです。すでに、上層部によりレジェンドデバイスの捜索隊が結成されているそうです』

「早い段階でロストログアに指定する提案をしたことが裏目に出ってしまったな。」

『いえ、いずれは気がつかれたと思います』

局員はレオンの判断は間違っていないということを口にする。
その言葉にレオンは少しだけ表情を緩める。

「レジェンドデバイスは誰も彼もが使えるわけではないということが唯一の救いか」

そう、レジェンドデバイスとは、かつて、初めて黒き王が反乱を起こしたときに幾人かの選ばれた戦士、魔導士たちが所有していたデバイスで、そのデバイスに認められたもの、戦士や魔導士の生まれ変わりや力を受け継いだものだけが使える専用のデバイスなのである。

さらに、その名の通り、大半のものには伝説上に登場する武具や神などの名を冠しており、そのもの自体の知名度や信仰、逸話によって力が左右される。

これが、レオンがマドカのデバイスであるセレネから教えられた情報である。

そのセレネも月の女神『セレネ』の名を冠している。

つまり、誰もが知っている伝説上の武具や神の名を冠していればそれだけ強力な武器となる。しかし、デバイスそのものに属性が付加されており、相手の属性によっては威力が半減したり増加したりと、今ある現在のデバイスと比較すれば、武器としての有用性には若干だが劣ってしまう。利点を言えば、基本的にアームドデバイスとストレージの両タイプの形に変形できるところ言った点であろう。しかし、弱点を突き、其の力を引き出せさえすれば、現存する度の武器よりも強力な武器であることに変わりはない

『それについて一つ報告が』

「ん？」

若干、局員は戸惑ったが、レオンに報告する。

『それが、上層部が組織した搜索隊がある無人世界でレジェンドデバイスと酷似した反応を発見し向かったとのことなのですが、隊のものが一向に戻ってこないとのことですよ』

その報告を聞き、レオンはしばらく考え込んだ。

（なぜ上層部はそんなにレジェンドデバイスを欲しがる？確かにアレは強力だ。しかし使い手が限られる。よくよく考えれば、現在のストレージやアームドのほうが武器としての有用性は高いはずだが……それよりもまずは搜索だな）

レオンは一度思考を止めて、局員に支持を出す。

「搜索隊と救助隊を組織しよう。それで、その無人世界に一番近い部隊はどこだ？」

『は、管理外世界に駐留している戦艦アースラです』

その言葉にレオンは驚いた。

それもそのはず、そこには義妹のレジェンドデバイスが存在する。いや、報告を受けている御門錬達、確認されている【白騎士】のデバイスを含めると3つもある。

そこで、レオンは一つの仮説を立てた。ここ最近黒き棺がよく観測されていたのが地球である。だからこそ、アースラには異常ともいえるだけの戦力が集まっている。

その結果としてレジェンドデバイスが地球にそろい始めた。そこ

に現れる棺。

（つまり、レジェンドデバイスは互いに引き合っている？そして棺は白騎士達の近くに現れる可能性が高い？）

レオンがそう考えるのも無理はない。

マドカが本局やミッドチルダにいた時には本局周辺の世界にも棺は現れていたが、彼女たちが出港してからというもの、幻影は現れども棺は一度も確認されていないのだ。

（ともかく、アースラに連絡をしないといけないか）

「君は行方不明の局員たちの搜索隊と救助隊の編成をたのむ。アースラには私から連絡をいれる」

『了解しました』

局員が敬礼した後、展開されていた画面が消える。それと同時にレオンは新しい画面を展開させた。

【聖祥中学校】

修学旅行が終わり、鍊達は普通の学生生活を送っていた。

棺も現れず、魔物はなのは達が駆逐している。

鍊や五和は雪を交えて本家の道場などで訓練にいそしむことができた。

そうして時間は流れもう7月に入り、間もなく梅雨が明けるとい

うある日の放課後、鍊と蓮華は日直の仕事を終えて、二人で校舎内を歩いていた。

「時間がかかってしまつてごめんなさい、鍊」

「蓮華、これは日直の仕事だから気にしたらだめだよ」

二人はそう言つて笑いあつた。

「なんでかな、鍊と話してるとひどく懐かしい気持ちになるの」

蓮華のその言葉に鍊は驚くと同時に、考えていたことの答えが導き出される。

彼女、桜守姫蓮華は、桜守姫桜の生まれ変わりであるということが

「……俺も蓮華と話していると懐かしい感じがするよ。」

鍊のその言葉に蓮華はうれしそうに答えた。

「ふふふ、ありがとう。」

「あ、そうだ。これを」

鍊は懐から一枚のチケットを取りだす。

以前兄からもらったコンサートのチケットだ。

「これは?。」

「コンサートのチケット、クラシックだけどね。よかつたら一緒に

行かないかな？」

蓮華はきょとした顔を見ると少し困ったような顔をして

「月村さんに渡さなくていいのかしら？」

「俺は君と行きたいんだ。それにすくはこの日は空いてないらしいし」

それは、嘘であつた。

鍊はすくはこのチケットのことは言っていないし、確認も取っていない。

鍊は蓮華と出かけて自らの気持ちを確かめてみたかつたのだ。

この想いが、御門鍊の思いなのか、それとも【ミカドレン】としての思いなのかを

「……………それじゃあ、受け取っておこうかな。それじゃあ、またね」

それだけ言うと、蓮華はチケットを受け取って校舎を出て行つた。

「蓮華……………彼女は桜姫の……………」

『ええ、そのようですね。ただ、彼女、まだ覚醒していないようですね』

ブリューナクのその答えの意味、それはまだ巫女姫として覚醒しておらず、その使命も記憶も引き継いでいないということだ。

巫女姫の特殊な能力はその絶大な力による封印である。しかし、それは、自らが保有する魔力すべてを開放することで使える。まさしく、命そのものを使う封印術なのである。つまり、蓮華が巫女姫に覚醒し、封印を使うということはその命を使うということである。

「相棒、俺は見つけたぞ、俺の御門鍊の闘う意味を」

『言わなくてもわかっていますよ。マスター』

その言葉に、鍊はほほ笑む。

そして、その決意を胸に秘め、今日の訓練へ向かおうとした時

『マスター、魔力反応が……これは、レジェンドデバイス！？それに、他にも多数の魔力反応が』

「なっ！」

『地球から近い別世界です』

「行くぞ、相棒！」

そう言つて、鍊は校舎を飛び出し、いつも訓練をしている森に着くと、転移魔法を使い別世界へ移動した。

【屋上 給水塔】

同じころ、真崎剛（まざきこう）は給水塔の上で寝転がっていた。

「めんどくせえ」

それが彼の口癖であった。

さて、なぜ彼がここでそんなことを呟いているのかというと、授業が終わり帰ろうとした矢先に着たメールが原因であった。

それは、今の彼の保護者である、真崎凜しんざきりんからであった。

真崎凜、彼女は幼いころに一人で生きていた剛と出会い、彼を引き取り育てている心優しい女性であるが、彼女は実を言うと魔導士であった。

そもそも、管理局の魔導士であったが、管理局に疑心を持った彼女は管理局を抜け出し、管理外世界であるこの世界にきて剛と出会った。

そんな彼女から着たメールは今日の訓練メニューではなく、しばらく出かけるのでその間に預けられているデバイスを使いこなせるようになること、自分の力の意味を見つけることを課題として出されたためだ。

「めんどくせえ」

本日何回目になるかわからない口癖を言葉にすると、腕にはめていた黄金の腕輪が光る

『坊主、姐さんもいろいろ考えてるんだ、仕方ないだろうが』

それは、凜が発見した文献をもとに開発し使っていた模造レジエンドデバイスで、名をスピリットデバイス【ファフニール】

剛は凜に師事しており、ある程度の魔法を使えるようになった時点でファフニールを譲り受けた。

もともと、凜は二つのデバイスを使用する魔導士のため、一つなくとも大丈夫だといって剛に譲ったものだ。

剛も凜と同じタイプで二つのデバイスを使うことを主点において訓練してきたのだが、ファフニールはともかく、もう一つは凜が予備で持っていた支給型のアームデバイスだったが、剛の力と相性が悪く、破損してしまい、今は自動修復を待っている状況だった。

「……俺の力に着いてこれるのは今のところお前だけだからな」

『坊主は馬鹿力だからな』

「……さて、どうするか……と魔力反応？」

魔力の反応を感じた剛は上半身を一気に起こす

『どうするんだ、坊主？』

「めんどくせえ」

『やれやれだぜ』

ファフニールの質問に剛はめんどくさそうに答え、再び横になろうとするとき、鍊が走っていく姿を確認すると、またも体を勢いよく起こす。

「いくぞ、ファフ」

『やれやれ、面倒だと言っていなかったか？』

「気が変わった」

『じゃあねえなあ…じゃあ行くか、坊主』

そうして剛は給水塔から飛び降りて屋上に着地すると、鍊が向かって行った先へ走っていくのだった。

剛は屋上で鍊の姿を見つけた後、急いでその後を追いかけていた。

しかし、人気のない森に入ったとたん、鍊の姿を見失っていた。

「はあ、はあ、くそ、どこに行った？」

『坊主、そう焦るな。3時の方向に魔力反応があった。そっちだな』

ファフニールの言葉に従い、その方向に走っていくと、不自然に木が少なくなっている場所へと出た。

そこには彼が探し求めた鍊ではなく、青い髪をした少女、海原雪と紅い髪をポニーテールにした眼鏡を掛けた女性、紅五和であった。

「お前……」

「っ誰!？」

「え!？」

3人は同時に声を出した。

『雪、この間の彼よ』

「真崎さん、どうしてここに？」

その言葉を聞いて剛は素直に答える。

「俺は鍊を追ってきた」

『久しぶりだな、嬢ちゃん達、坊主が屋上で寝てたら魔力を感知してな、そしたら小僧が走っていくから気になっておってきたんだよ、この坊主は』

次は雪が驚く番だった。

「鍊くん！？じゃあ、やっぱりこの魔力反応は鍊くんだったんだ」

「あの人、また勝手に……………」

五和は五和で頭を手で押さえている。

『それよりも、雪、彼にも説明を』

『主よ、主上が無断で飛び出すのはいつものことです。』

シリウスとアンフィがそれぞれのマスターに声を掛ける。

雪と五和は帰る途中で魔力反応を感知し、ここまで来たことを話した。

『それで、坊主に嬢ちゃん達、どうすんだ？』

そこにファフニールが口をはさんだ。

「私たちは鍊くんのところに行くけど、剛くんはどうする？」

「俺も行こう」

「では、行きますよ。」

その言葉を聞いた雪はアンフィに転移呪文を頼み、3人は光に包まれた。

【無人世界】

数刻前、鍊は無人世界にたどり着いた。

「この世界に人はいないみたいだな」

画面を展開させこの世界のことを調べていた鍊が呟く。

『ですが、魔法生物や大型生物はいるようですね』

ブリューナクがその言葉に付け足す。

鍊は画面を閉じ、デバイスの反応があったほうへ歩いていく。

しばらく歩いていると、鍊の足に何か固い物が当たった。

鍊がそれを見ると、それは管理局で武装局員が使用しているストレージデバイスであった。

デバイスはいたるところが破損しており、コアも傷ついている。修復は不可能だろう。

「管理局の魔導士が来ているのか？人間の反応はないけどな……」

『そうですね……マスター、前！』

その言葉に錬は視線を向けると、大地を埋め尽くす黒い影が見えた。

さらにその先には洞窟のようなものが確認できた。

『デバイス反応はあの洞窟からですね』

「しかし、その前には視界を埋め尽くすほどの幻影がいるって」

そう、その黒い影はすべて影魔物だった。

そこには今まで見た影魔物全てのタイプがそろっており、中には見たことがない姿をした影まで混ざっている。

おそらくは、この世界の生物を取り込んだのだろう。

小型、中型、飛行型に大型タイプが簡単にだが確認できる。

『今のところ、人型の上位種は確認できません。』

「了解。じゃあ行くか、相棒」

『yes , master』

錬はブリューナクを起動させ、ファイターモードのバリアジャケットを身にまとい、幻影の群れへと突撃した。

【戦艦アースラ】

同時刻、なのは達はアースラに召集され、理由をクロノに聞いていた。

「みんなが学校へ行っている時、本局のレオン・アーヴィング執務

官から連絡があつた。なんでも、この近くの無人世界に派遣された
本局の部隊が行方不明になっているらしい」

その言葉に一同は驚きを隠せなかった。

理由は簡単だ。管理局のしかも本局の一部隊の行方が分からなくなつたというのに搜索命令が下りるところか、その情報までなにも入っていないからだ。

「クロノくん、その部隊ってどこ部隊なの？」

なのはがどこの部隊か気になりクロノに部隊命を聞く。

「すまないが、その情報もないんだよ」

まったくもって情報がないというのもおかしい。
はやては疑問に思いマド力へ質問する。

「マド力ちゃんは何かしらへんの？今日はアースラにおつたんやろ
？」

「すみません、私の方にもまったく情報は」

「さよか」

「クロノ、それで私たちはその世界で搜索をすればいいの？」

フェイトがクロノにどうすればいいのか尋ねる。

その言葉にクロノはうなづくものの、どうすればいいか迷つてい
た。

まったくもって情報がなく、行方不明になった人員、部隊命全てが不明のままなのだ。

「迷っていても仕方ないか。それじゃあ、マドカ、シグナム、フェイト、はやてで出てもらう」

「私は？」

その言葉になのはがクロノに聞き返す。

「なのはとヴィータは残ってくれ、いつ影魔物が出てくるかわからないからな」

「わーったよ、シグナム、はやてのこと頼んだぞ」

「わかってる」

そう言つてマドカ達は転送ポートへ向かう。

『無理しないでね、みんな。何かあったらすぐに行くから』

なのはが通信で4人に声を掛ける。

「ありがとう、なのは、行ってくるよ」

「ヴィータ、留守頼むで」

『わかってるよ。はやて』

「では、行きます。」

マドカの言葉で4人は転移した。

第15話「魔剣グラム」後編（前書き）

第15話の後篇です。

あと2話か3話くらいで第1章が終わります。

第15話「魔剣グラム」後編

【無人世界】

無人世界では鍊が苦戦していた。どれだけ力が上がろうとも、知識を得ようと、数の暴力には敵わない。

当初、鍊はある程度数を減らしたら、ウィザードで利用できる魔法で一気に数を減らすつもりだったのだが、如何せん数が多い。

その上、広域攻撃の魔法は詠唱を必要とするため、詠唱中に攻撃をされてしまう。

ガンナーでも同じことだった。巨大な銃は遠距離からの集団への攻撃は可能でも、接近されては余り意味がないからである。

そのため、鍊はファイターモードとランサーモードを駆使し、愛機に記録されているデータをフルロードして戦闘を行っていた。

「獅子閃光！」

鍊は獅子の形をした闘気を放ち、近くにいた影を消し飛ばし、続けざまに、拳と蹴りを交互に繰り出し、少しずつではあるが影の数を減らしていく。

すると、少しだが、影に隙ができる。

「いまだ、相棒！」

『photon smasher』

隙ができた瞬間に直射型の砲撃で数を減らす、チャージ時間が短いためそれほどの威力は無い。

徐々にではあるが、確実に鍊は疲れ始めていた。

「相棒、これやばいかも」

『……まったく、同感ですね』

互いに口では弱音を吐きながらも、鍊の眼は諦めていなかった。

「さてと、初お披露目だ」

鍊はブリューナクを2ndフォームの槍に変え、右手に持ち、左手で氷狼を抜き幻影たちを斬っていく。

『月光！』

槍と太刀を交互に振るい、月を描くように斬撃を放って幻影を消していく。

しかし、魔法生物を取り込んだ大型の幻影が鍊を後ろから攻撃して吹き飛ばした。

その攻撃で鍊の付けていたバイザーが破壊され、額が切れ、血が流れる

「ぐあ……」

鍊は吹き飛ばされつつも体制を直そうとするが、そんな鍊の上空に影が差した。

それは、大型の魔法生物を取り込んだ飛行タイプの幻影がまっすぐに鍊へ向かって突撃してくる。

「相棒！」

『間に合いません！』

防御呪文が間に合わず、錬は腕で防御姿勢を取る。
そして、攻撃が当たったと思った瞬間

「アイシクルレイン！」

『storm b a s t a r』

声とともに、錬の周りに氷柱の雨と翠色の光線が降り注いだ。

「これは」

『アンフィにシリウス！？』

攻撃がやんだ直後、錬の前に雪と五和が舞い降りた。

「危ないところだったね〜錬くん」

「まったく、勝手にウロウロしないでって言ってるでしょ！〜」

そう言っただけ雪は錬にほほ笑みかけ、五和は怒りながら、すぐさま次の魔法の準備を行う

「雪、五和、助かった。」

「お礼はデート一回ってところ？」

「貴方と錬では犯罪に見えるから却下です」

「え〜せっかく助けたのに！ってなんで五和ちゃんが決めちゃうの」

」

3人は幻影たちを倒しながら会話する。

「2人で来たのか？」

鍊のその言葉に、雪はほほ笑み、首を横に振った。

「つよゝい助っ人を連れてきたよ」

雪がそう言った瞬間、もう一つの影が空から舞い降り、鍊はその姿に驚いた。

「剛！？」

「……いくぞ、ファフ」

『やれやれだぜ、行くか、坊主！！』

鍊が名前を呼んだことにこたえず、剛はファフニールに呼びかける。

すると、後は光に包まれ、制服の上から漆黒のマントで身体が包まれた姿になった。

そして、右手には一般的な剣より一回り大きい岩でできた斧剣（ファフニールの1stフォーム：ファング）を持っている。

その状態に本来なら左手に剣型のアームドデバイスを持つのが剛の戦闘スタイルなのだが、今は修復中で右手の斧剣のみである。

「おおおおおおお」

剛は雄たけびを上げながらファフニールを天に掲げると、逆手に持ちかえ、一気に地面に突き刺した。

「火柱！」

『zero flame』

直後、幻影たちの周りにいくつもの火柱が現れ、幻影たちを焼き尽くしていく。

その姿を鍊は啞然として、雪はニコニコとほほ笑みながら見ていた。

「呆けている場合か？」

その二人を見た剛が問いかける。

「剛、お前もきたんだな」

「……………」

剛はその問いには答えず。幻影達を見て鍊に問いかける

「……雑魚相手に以外に苦戦しているな？」

「うるせえ」

剛が斧剣を構えたところを見て、鍊は武器を納め、ウィザードモードに切り替える。

「剛、フォワードは頼んだ、雪と五和は中央で射撃を、俺は広域魔法で殲滅を図る」

鍊がポジションを決め、方針を3人に伝えた。

「了解！私がんばるね」

「わかりました」

「……ふん、好きにしろ」

それぞれが返事を返したところで、4人は行動を開始した。

「ふん！」

剛が斧剣を横薙ぎに払うことで幻影達を消しさつていく。

さらにはその薙ぎ払いにより生じた衝撃破により、倒す数が増えていく。

『雪、彼のサポートを』

「わかってるよ、アイスエッジ！」

雪は射撃魔法で剛のサポートを行い、

「海原さん、後ろ！シリウス」

『storm shooter』

雪に近寄ってくる敵は五和が落としていく。

そして、鍊は

「相棒、上級呪文、行くぞ」

『わかっていますか。本来上級呪文は3rdでしか使えません。ウイザードでも多少使えるようにはりましたが、詠唱には時間がかかりますよ』

「承知の上だ、あの3人がいるからこそ使えるんだしな」

『了解、では、広域攻撃魔法ロード……使用可能です』

ブリューナクのその言葉に鍊は頷く。

すると、鍊の足もとに巨大な魔法陣が現れ、鍊は少しだけ宙に浮き、両手を広げ詠唱を始める。

【母なる水よ、集え】

鍊の周りに魔力があふれ、その魔力が水に変換される。そして、大気中にある水分をも取り込み始める。

【集え、集え、集いて渦をなし、全てを飲み込む暴流とかし】

鍊の周囲に溢れていた魔力が徐々に渦を巻き始め、どんどん広がっていく。

【我が面前の穢れた魂に大いなる裁きを！】

渦が大きく、さらにスピードを上げ始める。

【メールシュトローム！】

大渦は幻影達を飲み込みさらに大きくなり、幻影の半数とはいかないものの、かなりの数を巻き込んだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ、まだ……いるのか」

『いきなりあんな大きな呪文を……アレは上級ではなくさらに上の呪文ですよ！！無理はしないでください、マスター』

息を切らせている鍊にブリユーナクは注意する。

鍊は現在魔力ランクときにはA A Aくらいであろう。

しかし、今使用したメールシュトロームはどう考えてもSクラス並みの威力を持っている。

無理な魔法の使用は極度の疲労と反動を伴うため、ブリユーナクは鍊を注意するのだった。

『あまり最上級クラスの魔法使用は控えてください』

「……わかった。今のだけで止めておく」

鍊は一言だけ答えると、次の魔法の詠唱を始めた。

『あの小僧、やるじゃないか』

先ほどの広域攻撃をみてファフニールは感嘆の声をあげた。

「……ふん」

その言葉に剛は鼻を鳴らして答える。

『なんだ、嫉妬してるのか、坊主。だったらお前さんも見せつけてやればいい』

ファフニールは剛に力を見せてみるという風に挑発した。

剛もちょうどいいと思ったのか、ニヤツと口元をゆがませる

「いいだろう……バハムートギンストール 竜王転送…出力、20%」

剛がそうつぶやいた瞬間、剛の纏っていた漆黒のマントが紅蓮に染まり、剛の魔力が底上げされた。

直後、ファフニールが2ndフォームのナパームに姿を変えた。

今度はファングモードの時よりも一回り小さくなり、威力こそ落ちてるように見えるものの、刀身は紅く発光し、熱を放っている。この時より、ファフニールはカートリッジシステムを使用できるようになるため、実際の攻撃力を考えれば、ナパームのほうが威力は高いのだ。

「……行くぞ、破壊竜」

『load cartridge』

ファフニールがカートリッジを一発使用すると、剛の体が炎に包まれる。

「おおおおおおおお！」

『crisis dragon』

剛は雄たけびと共に幻影達に向かって踏み出すと、飛行呪文を利用して一気に突進する。

幻影達はひしめいていたためにその攻撃をともに受けて、消滅してしまった。

『雪、私たちも負けてられないわよ』

「そうだね、錬くんにいいところ見せないと、アン、セカンドで行くよ」

『all right master』

そう言うと、アンフィは杖と盾から細身の西洋剣と盾に形を変え、纏っていたローブは水色のマントに変わる。そしてジャケットの上から胸部に装甲が加えられ、腕にも肘までの装甲が追加された。

「行くよ、アン！アイスコフィン」

『ice coffin』

直後、雪は剣をX字に振るう。

すると、氷の大きな刃が出現し、高速で前進しながら敵を切り刻んでいく。

これはフェイトのハーケンセイバーと同じタイプの射撃魔法であるが、ハーケンよりも威力、速度ともに上に行く、アンフィのセカンドフォームでも上位に入る攻撃である。

「みんな、よくやるわね」

五和が射撃をしながら感嘆の言葉を漏らす。

『主はあまり無理をなさいませんように』

シリウスが五和の魔力を心配しながら声を掛ける。

「そうね、魔力運用が上手いかない以上、新しい術式を速く組まなくちゃね。」

『ええ、あと一つ、何かあればよいのですが、すみません主』

自らのふがいなさをシリウスは主に謝罪する。

「貴方はよくやっているわ、今はこの状況を切り抜けるわよ。」

『はい、我が主』

そう言うつと、シリウスはスナイパーライフルからガトリング砲に姿を変える

「はあああああ！！」

五和はガトリングで一気に数を減らしていった。

それぞれ4人が幻影を攻撃している時、剛はどこか違和感を覚えていた。

それは、自分と呼んでいるような音がずっと頭の中に響いていた。

（ちっ、一体なんなんだ）

そのことに気を取られ、剛は背後を取られる。

『坊主！』

ファフニールの声でわれに帰るがすでに遅く、攻撃をともに食らい、剛は洞窟の近くまで吹き飛ばされてしまう。

「剛！」

「剛君！」

「真崎さん！？」

それに気がついた二人は剛のもとへ行こうとするが、幻影達に邪魔される。

「ぐっ……」

剛は体を起こそうとするが、防御できずに吹き飛ばされ、背中からまともに衝撃を受けたので、起き上がるのもつらそうである。

幻影達はこれぞ好機と見たのか、一気に剛を取り込もうと襲いかかる。

『坊主！はやく立たないか』

「くそが」

剛が立ち上がろうとした時、

「クラウド・ソラス」

速射の砲撃が剛を襲っていた幻影を消滅させた。

「「「なっ!?!」」」

「まったく、これじゃあ、逆になってしもたやないか」

はやてが騎士甲冑を纏い剛の前にふわりと舞い降りた。

はやては剛に手を差し出して立ち上がらせる。

「や……がみ……」

「うん、大丈夫なら少し下がってな、ここは私がなんとかするわ。いくで、リイン」

はやてはユニゾンしているリインフォース?に声を掛ける。

『了解です。はやてちゃん』

その要望に答え、リインは魔法の準備をする。

「行くで、刃を持って血に染めよ!」

『ブラッティダガー』

はやての周りに何本もの魔力でできた刃が出現すると次々と幻影を討ち抜いていく

その様子を鍊と雪、五和は茫然と見ていた。

「なんで八神が!?!」

「はやてちゃん、なんか雰囲気違っよ?」

「アレが、夜天の王のユニゾン状態ですか」

3人が別々の場所で八神を見てみると、そこにも3つの影が舞い降りた。

錬の前にはマドカ・F・アーヴィング
雪の前にはフェイト・T・ハラオウン
五和の前には、ヴォルケンリッター、烈火の将、シゲナム

「お久しぶりですね、御門錬」

錬を前にしてマドカが言葉を発した

「いい思い出ではないから、あまり、再会したくはなかったんだがね」

錬は肩を竦めて答える。

「今日もやるのかい?」

錬が臨戦態勢を取るが、マドカは首を横に振った。

「まずは幻影を倒すのが先でしょう?それに、この間は上の命令に従っていたまですよ」

マドカは一瞬だけ複雑そうな表情をするが、すぐに元に戻る。
錬はその表情を見逃さなかったが何も言わずにマドカの言葉を待った。

「それと、これが終われば少し話がしたいのだけど、いい？」

「……君が俺に勝てたらって言うのはどうだ？」

マド力の言葉を錬は不敵に笑い挑発する。

「そうね、この間の決着も付けないといけないでしょうし」

マドカも少しだけ笑いながらそれに賛同する

「それじゃあ、まずは」

「この雑魚どもを」

「蹴散らすか（蹴散らしましょう）」

そう言って二人は駆け出した。

雪の前に降り立ったフェイトは驚きを隠せなかった。

なぜなら今日知りあった雪が目の前にしかも、デバイスをもって立っているのだから

フェイトは混乱し、雪にバルディッシュを向けて、いつものように警告をしてしまう

「時空管理局執務官フェイト・T・ハラオウンです。武装を解いて投降してください」

その言葉に雪は困ったように笑った。

「フェイトちゃん、今はそんなこと言ってる状況じゃないよ？」

『そうね、この状況を打開する方が先。そんなこともわからないの、管理局の魔導士は？』

雪の言葉にアンフィも続く。

しかし、その意見は正論のため、フェイトには言い返すことができなかった。

「それじゃあ、戦闘が終わったら話を聞かせてもらいます」

「それは、あなたが決めることではないよね」

そういいながら、雪は幻影に向かっていく。

その姿を目で追いながら、フェイトは戸惑いながらも、雪を加勢することにした。

五和の前のシグナムは構えることもなく五和を見ていた。

「まさか、主はやてのご学友が白騎士だったとはな」

「それで、私を逮捕するんですか？」

「今はこの状況を打破するのが先だろう」

そう言ってシグナムは幻影に向かってレバンティンを構える。

「お前は隙を見て、あの男と主のところへ、あっちの方が大変そう
だ。」

「貴方の指示に従うのは癪に障りますが、そのほうがよさそうです

ね」

五和はちらりと剛達の方を見るとその判断が的確だと認めた。

そして、二人で幻影へ向かって行く。

そのころ、はやてと剛は竜の形をした巨大な新型の幻影に苦戦していた。

「こいつ、魔法生物を取り込んでる!？」

『そうみたいです。ちょっと厄介です。』

はやての疑問にリインが答える。

「ファフ！」

『おうよ、行かせ坊主』

そのはやての後ろから剛が飛び出し、ファフニールがカートリッジを3発吐き出す。

すると、ファフニールの刀身に装甲が加わり、刃に炎がともる。

ナパームでは攻撃力不足と考えた剛はフルドライブモードのクライシスにファフニールを變形させた。

この状態は長く保つことができず、せいぜい1、2回の攻撃でナパームに戻ってしまう。

それでも、今の状態よりかはましと考えたのか、剛はフルドライブを惜しげもなく使ったのだ。

「カートリッジ、ロード」

剛はカートリッジを一発だけ補充し、残りの全弾をロード、合計5発ロードする。

『坊主、耐えろよ!』

「うおおおおおおお! バハムート・フレア!」

剛は叫び声とともにファフニールを振るう。

刀身に宿った全魔力が炎となって幻影竜を斬り裂こうとするが、その刃は幻影竜の爪と拮抗してしまう。

「うおおおおおお」

『このデカブツ、SS以上の攻撃でも敗れねえのか』

事実、この攻撃は剛が現在使える攻撃の中でも最強の攻撃である。威力は最大出力ならばSSSを超える時でさえある攻撃なのだ。しかし、ここにきて、その攻撃は相性が悪かった。

「この竜、まさか、火竜を取り込んだのか?」

そのはやてのつぶやきを聞いたファフニールはバツが悪そうな声を出す

『火竜だと!?! そいつは相性が悪すぎる、坊主、離れろ!』

剛はその声に従い、攻撃を中断し距離を取る。

「どういうことだ、ファフ」

『どうもこうもねえ、奴は火の竜を取り込んで居やがる。つまり俺とお前さんでは今のところ勝ち目がないんだよ』

剛は魔力変換資質の炎熱をもっており、意識せずとも全ての攻撃が炎属性になってしまう。

さらにはファフニールの名前からわかるように、インテリジェンスであるがその名前はかの邪竜『ファフニール』から取られている。蛇の形をした邪竜と大型の火竜……この両者がぶつかれば結果は明らかに火竜に軍配が上がるであろう。

『はやてちゃん、彼の援護を』

「そ、そうやね」

先ほどの剛の攻撃に見とれていたはやてはリインに言われて杖を構える。

「竜に光が効くかわからへんけど」

『やらないよりましです』

「そうやね。いくで！」

『クラウド・ソラス!!』

次の瞬間、光の魔力の奔流が幻影竜を巻き込むも、竜はそれをもとめせず、はやてと剛を尻尾で弾き飛ばす。

はやては洞窟の前へ、剛は洞窟に直撃し、中へ落ちていく。

幻影竜は姿が見えなくなった剛から狙いを外し、はやてへと狙い

をつけた。

【洞窟内部】

剛は洞窟の内部に墜落していた。

『おい、坊主、しっかりしねえか』

ファフニールが声を掛けるが、これまでの戦闘でダメージを受けすぎていた。

ファフニールはそもそも武器のみとしての機能しかなく、防御面ではマント1枚の装甲しか展開されない。

これまでは、アームドデバイスに登録してあったバリアジャケットとマントで防御を上げていたのだが、今回はマントだけのため守りが弱すぎたのである。

「ぐ……」

剛はなんとか立ち上がろうと試みるが、魔力を消費しすぎたせいで腕に力が入らない状態だった。

（くそっ…こんなことじゃあいつに……鍊に勝てねえ……）

剛は悔しさが胸に渦巻いていた。

初めて会った鍊は自分と同じくらいの力しか持ち合わせていなかった。

しかし、ここ最近、急激に力が上がってきているように思っつまう。

きっかけは修学旅行の時、夜、鍊に初めて協力した時だ。

あの時から鍊の強さが急に上がったように思えた。

そして、今日の戦闘である。

鍊ははじめ一人で何千という幻影と闘っていたのだから。
そして、今もまだ闘っている。

（俺がこんなところでやられてたら、誰があいつを守るって言うんだ）

剛は鍊を認めていた。初めて会ったのは自分が喧嘩を吹っ掛けられた時、近くにいたからと、剛の加勢をしたこと、そして、不意をつかれやられそうになったときに鍊は剛をかばって傷を負ったことがあった。

その時から、鍊と剛はお互いを認め合ったのだが、剛は自分を守ってくれた鍊を守りたいと心の底でいつしか思うようになっていた。

（それに、八神、あいつと約束した。あいつを守るって）

そして、気がついた。

自分の力の使い道を

友を守るために力を振るう。

以前から決めていたその想い

それに改めて剛自身が気がついた時洞窟の中に光がとまった。

「な…んだ…？」

『この魔力反応はあのとき感じたのと同じ！？』

光が収まった時、剛の目の前には一本の大剣が刺さっていた。

「これは…」

い

『我が名はグラム、紅蓮の竜王の剣なり』

剛は戦いの中、運命と出会った。

【次回予告】

剛は洞窟のなかで魔剣グラムと出会い、自らに課せられた運命を受け入れ、遂に竜王が覚醒する。

そして、外ではやてと五和が竜に苦戦していた。

友を守りたい、その想いが聖少女の力を爆発させる。

そして集う白騎士達、運命は急速に加速していく。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの 第16話「竜王覚醒、集う白騎士」

『ふふ、なんでかしらね。彼が突っ込んで私が彼を援護する……これが型にはまった様に当たり前に思えてしまう自分がいるの。過去のことなんて関係なしに、ね』

第16話「竜王覚醒、集う白騎士」

【無人世界 洞窟内部】

幻影竜の攻撃を受け、洞窟に叩き込まれた剛は、洞窟の奥に突き刺さる大剣と巡り合った。

『我はグラム、紅蓮の竜王の剣なり』

『なっグラムだと！？』

剣の柄に埋め込まれている赤い宝石が輝いたかと思うと、剣から声が響いた。

その言葉にファフニールは驚いていた。

なぜなら、その名、『グラム』と言えば、北欧神話で自らを殺したシグルドが持っていた魔剣の名であるからだ。

その伝説から、かの剣を『ドラゴンスレイヤー竜殺し』と呼ぶこともある。

「……グラム」

剛はそう呟くと、グラムの柄を右手でつかんだ。

『貴公に我を手にする資格があるか、試させてもらおう』

剛がグラムを掴んだ瞬間、グラムから光が放たれ、剛はその光に包まれた。

剛が目を開けると、そこは先ほどの洞窟ではなく、あたり一面が紅蓮の炎に包まれた空間であった。すると、その空間に声が響いた。

『竜の力を内に秘めし者よ、貴公の力は何のためにある？』

「……俺の力？」

それは、かつて魔法の修行を始める前に義母である凜がした問い掛けと同じものであった。

「……………」

剛は答えなかった。

自分が覚えた魔法の力は鍊や母を守るために鍛えた力だ。

しかし、今、グラムが問いかけた力とは自らを不幸に貶めた竜の力のことである。

（俺の力……なんで俺にはこんな力がある？）

その問いは剛のこれまでの人生にも関係してきたことである。

そして、剛は過去のことを思い出す。

バハムートインストール

『竜王転送』この力により、剛は不遇の人生を歩んできた。

魔法とは別に、生まれた時から備わっていた力である。

以前にはやてに語った様に、内に竜の力を秘めて生まれた剛は、幼き頃、その力を制御することができなかった。

感情の起伏により、内にある竜の力が暴走し、剛自身生死の境を彷徨ったこともあれば、友人と喧嘩して感情を爆発させてしまい、瀕死の重傷を負わせたこともある。

それがきっかけで、実の両親には棄てられ、荒んだ人生を歩んできた。

(……この力のせいで……俺は……)

剛はこれまでの人生を思い出してしまい、自身の力に対する恨みが湧きあがる。

その時、剛の目の前にある炎がうねりを上げ、三人の人の形を作り出す。

それは、今、剛の心の大半をしめる存在

(おふくろ……錬……それに、八神!?)

その三人の姿を見て、剛は先ほどの想いをかなぐり捨てる。思い出すのは二人との出会いとはやてとの約束。

喧嘩をし、竜王を暴走させ瀕死の重傷を負っていた剛を見つけ、更に身の上を聞いたうえで自らを引き取り、これまで育ててくれた義母である【真崎凜】

初めて会ったのは1年前、まだ、剛がよく喧嘩をしていた時、一人で教室の隅で外を見ていたときに話しかけてきた男、そして、その後、街で剛が数人の大人に囲まれていた時、近くを通ったからと言いながら加勢し、剛がナイフで刺されそうになった時、自分をかばって傷を負った【御門錬】

彼女と会ったのは錬に昼飯に誘われた時、いつも一人だった俺の周りに錬が連れてきた連れの人、いつも錬と共に空牙やバニングスをからかっている関西乗りの女子、はじめは唯うるさいとは思わなかった。しかし、修学旅行でひょんなことから自らの一面をのぞき、剛を受け入れ、近づいてきた。

そして、いつしか、いつも隣にいるようになった、いや、隣にいたくなつた【八神はやて】

『あんたの力は神様からの贈り物だよ。だから、私と一緒にいこう』

『なんで庇ったかって？そりゃあ、ダチだからに決まってるからだろ。だから、俺はお前が困ってたり、ピンチになってたらお前が嫌がっても問答無用で助けるんだ。友達ってそういうもんだろ？なあ、ダチ公』

『もし、もしやで、私がさっきの子みたいに命の危険にさらされた時、真崎くんは私を守ってくれるか？』

「ああ……そうだったな……ダチってのはそういうもんだな、鍊。八神、お前との約束も守らないと……この力があればお前たちを守れるんだよな。なあ、お袋、あんたの言った通り、この力は、神様からの贈り物だな」

思い出したのは、凜と鍊の言葉、そしてはやてとの約束。それは剛が変わるきっかけになった大切な言葉であった。

そして、剛は叫ぶ、今の想いを、己の力の使い道を

「俺は、ダチを、家族を、大切な人達を守るために力を使う。」

次の瞬間、剛を包んだ世界は元の洞窟に戻る。

『坊主！大丈夫なのか！？』

ファフニールの問いに、剛は力強く頷く。

「ああ、俺はダチを守るために、俺の恩人に報いるために、あいつとの約束を守るために、そして俺自身のために……魔剣グラム！俺に力をよこせ！！」

剛の叫びとその想いにグラムが反応した。

『貴公の想い、しかと受け取った。貴公を紅蓮の竜王と認め、我が力を託そう』

次の瞬間、またもグラムから光が放たれ、洞窟中を覆い尽くした。

【無人世界 荒野】

剛が洞窟の内部でグラムと出会っていたころ、剛と同時に幻影竜に吹き飛ばされたはやては洞窟の入り口付近に叩きつけられていた。

「いつ…つつ」

『はやてちゃん、大丈夫ですか？』

「うん、リインが上手く防御と受け身取ってくれたおかげや、おおきにな」

なんとか起き上がったところに、ようやく幻影の群れを突破した五和がはやてに近づく

「八神さん、大丈夫？」

「五和ちゃん！？その格好って、もしかして」

かつて、自分とシグナムを襲った白騎士、翠炎の聖少女の格好をした五和をみてはやては驚く。

「もう今更ですね。彼の正体も知られているらしいし。そうよ、私

が白騎士が一騎、翠炎の聖少女、そして」

『私が主の牙、天狼シリウス』

改めて白騎士として名乗る五和とシリウスにはやては驚くことしかできなかった。

「五和ちゃんが白騎士!？」

五和がはやてと会話をしていると、二人に大きな影が差した。先ほどの幻影竜が五和達の方へ向ってきていた。

「シリウス、まだ行けるよね？」

ボロボロの五和が、愛機に声を掛ける。

『愚問、天狼を舐めてもらっては困りますな。しかし、飛行限界時間が来ています。対空はホバーブーツを』

シリウスは心外とばかりに五和に返答した。

その言葉に五和はほほ笑み、ガトリングモードのシリウスを幻影竜に向ける

「八神さんは下がって、聖少女の力見せてあげます。いくわよ、サイクロンシューター!」

幻影竜に向けて魔力弾を乱射しながら、五和はホバーブーツで空中に浮き、幻影竜と距離を取る。

竜の背後を取ると、彼女は腰に挿してある愛刀を抜き放つ。

「塵鳴流暗殺剣一ノ剣、陽炎」

背後からの一閃を放つが竜の硬いうろこの前に刃は通ることは無い

「くっ」

『主、やはりサイクロンシューターではダメージがありません』

幻影竜がダメージを負っていないのがわかり、シリウスは五和に声を掛ける

「わかってる。でもね、退けないのよ。あそこに私の友人がいるんだから、だから負けられないのよ!!」

五和は辛うじて後方に下がったはやてをみて、自分に激を入れる。

『主』

「だから、やるわ、シリウス!! 3rdモード!!!!」

主の声にシリウスは躊躇する。3rdモードは近中距離戦使用のガンソードである。

それで、巨大な幻影竜を相手にするのは暗殺術を使えるとは言っても基本遠距離主体で戦う五和にとっては不利以外の何物でもないからだ。

「大丈夫、少しでも時間が稼げれば、錬達が来てくれる。だから、私を信じてシリウス。彼の悲願を達成させるには私は剣であり続けなければならない」

『主………承知いたしました、翠炎の聖少女と天狼の力を見せましよう。3rdモード』

五和の言葉にシリウスは自らと主を鼓舞するように答えた。

次の瞬間、大きなガトリングは2丁の少し大きなハンドガンに変わり、その銃口には片刃の刀身が備え付けられていた。

『主、くれぐれもご無理は』

「わかつてる。行くわよ！トルネード！」

五和はシリウスの言葉を打ち消すように答えると、2丁になったシリウスを構え、魔力をチャージする。

『tornado baster』

直後、竜巻を纏う砲撃が幻影竜を襲った。

「グウオオオオオオ」

ここにきて、ようやく竜が呻き声をあげた。

「通じた！？」

その様子を見ていたはやてが声を上げた。

『主、今です』

シリウスがチャンスと五和を促す。

「アイアンメイデン
鋼鉄の牢」

次の瞬間、鋼鉄の檻が幻影竜を閉じ込める。

アイアンメイデン、翠炎の聖少女が持つレアスキルで対象を鋼鉄の牢に閉じ込め、対象の魔力運用を極端に低下させ内部からの魔力干渉を無効にするという効力を持っている。

つまり、閉じ込められたものは攻撃も防御もできなくなってしまうという、バインドをはるかに凌駕する効能を持つ。

そして、五和は竜が牢に入るとすぐさま魔力をチャージし始める。

「これが今の私の最大魔法！」

五和がそう呟くと、今まではミッド式の魔法陣だったものが、鍊と同じ魔法陣に変化する。

直後、その魔法陣の周りに風と炎が巻き起こる。

これぞ、天狼シリウスの使い手が翠炎の聖少女と呼ばれる一つの理由である。

風の魔力変換とシリウスの持つ炎の属性を合わせた一撃

『seirios cannon』

「セイリオスカノン！マキシマムシュート！」

五和が叫んだ瞬間、左手に持つシリウスの銃口から赤色の砲撃が、

『hurricane blaster』

「ハリケーンプラスター！マキシマムシュート！」

もう一方の銃口からは翠色の砲撃が発射される。

そして、二つの砲撃はお互いに交差しながら目標へと向かっていく。

「炎よ風を纏い、光り輝け！焼き焦がせ！ウインディ・セイリオス」

翠と赤の砲撃がまじりあい、砲撃は光り輝きながら檻に閉じ込められた幻影竜へと直撃した。

その攻撃はまさに天狼シリウスの名のごとき攻撃であった。

幻影を駆逐しながら攻撃を見ていた鍊、雪、フェイト、マドカ、はやての五人は驚いていた。

檻でとらえた後の極大の砲撃魔法直撃、見ているだけでひどい攻撃だと思う。

（まるでなのはだ）

かつて、バインドで固定されスターライトブレイカーの直撃を受けたフェイトは背に冷や汗をかきながらかつてのことを思い出していた。

「うわぁ……すごい魔法。あんなの食らいたくないよ」

『私も同意見よ、雪』

フェイトの近くで戦闘していた雪もあの攻撃は受けたくないと思っ
て声を出した。

「五和、あいつ、あんな隠し玉持ってやがったか」

鍊もあの砲撃には感嘆のつぶやきを漏らした。

『主、負けていただけませんよ。』

ブリューナクも鍊を鼓舞するように発言する。

「君は驚かないんだな？」

鍊は背中合わせに立っているマドカに声を掛けた。

「十分驚いているわよ。」

『アイアンメイデン、聖少女のレアスキル、対象の魔力干渉を極端に低下させ攻撃も防御もさせない技。喰らいたくはないわね』

その問いに、マドカとセレネは律儀にも答えてきたので、鍊は驚いてしまった。

「何を驚いているの？」

それがわかったのか、マドカが鍊に対し声を掛けた。

「いや、まさか答えてくれるとは」

鍊が素直な感想を言うと、

「私も不思議なの。なんで答えたのかわからないくらい」

マドカも素直な感想を口にした。

「なぜかしら、こうやってあなたに背中を預けていることが普通に思えて仕方ないのよ」

「俺もおなじことを思っていたよ」

白騎士は転生しても記憶がよみがえることは無い。わかるのは自らの使命とやるべきこと、魔法の知識と蓄積した技と技術。過去のこととは愛機が語ることしかわからない。

まれに、過去のことを夢で見るとはあるようだが。

マド力は初めて鍊と闘った後から妙な感覚を抱いたり、不思議な夢を見るようになっていた。

鍊もマド力や蓮華との出会い、そして氷狼を受け継いでからというものの、変な夢をよく見るようになっていた。長い黒髪を持つ弓兵と戦場を駆ける夢を……

その為、二人で肩を並べ戦場を駆けていた時の感覚が二人の中に湧きあがっていたのだ。

「では、君にいいところでも見せるとするか」

「ふふ、期待させてもらおうかしら？」

鍊のおどけた言葉にマド力は乗って答える

「よし、美人に期待してもらえるようだし、もうひと頑張りしませうかね、相棒」

『ええ、行きましょう』

そう言って、鍊は氷狼を抜いて幻影の群れに突っ込んでいく。

「セレネ、彼のサポートを」

『この間は闘っていたのに、一体どうしたのかしら？マドカ』

マドカの言葉にセレネは理由を聞いてみる。

この言葉はこれまで『蒼き月光』と闘ってきたセレネとしては答えが分かっているのだが、直接にマドカに聞いてみたくなって出た言葉であった。

「ふふ、なんでかしらね。彼が突っ込んで私が彼を援護する……これが型にはまった様に当たり前に思えてしまう自分がいるの。過去のことなんて関係なしに、ね」

（もしかして、記憶が？今までそんなことはあり得なかったのに）

マドカは少し笑いながら答え、セレネはそのマドカの答えが予想していたもので安堵しつつも、これまでのマスターに起らなかった現象に内心驚いていた。

そうして、マドカは鍊を援護し、鍊はマドカの援護を受けながら幻影を駆逐していった。

そのころ、五和は肩で息をしていた。

「五和ちゃん、大丈夫か？」

はやてが近づき、五和に肩を貸す。

「はあ、はあ、はあ、ありがとう、これで撃ち漏らしたら最悪よ」

『……主、残念ながらその最悪のパターンのようです』

シリウスのその言葉に五和とはやては檻に目を向けた。
煙が晴れていき、そこには半壊したアイアンメイデンの檻と中で
暴れる幻影竜の姿があった。

檻にはいたるところに罅ができ、今にも壊れそうである。

「くっ……あれじゃあ、もう持たない」

直後、檻が破壊され、竜が首を持ち上げ、五和とはやての方を見た瞬間、口をあけ炎を吐きだしてきた。

『storm protection』

シリウスが防御魔法で炎を防ぐが、風に炎は相性が良すぎる。
風の防御魔法で起きた風により、竜の炎のプレスが風によりまき
あがり勢いを増していく。

「はやて！」

それを目にしたフェイトが援護に向かおうするが、フェイト達は
幻影に阻まれてたどり着くことができない。

（げ…限界かも）

五和はどうすることもできなかった。

「五和ちゃん、リイン」

『はいです。パンツァーシルト』

風の障壁の前にベルカ式魔法陣の障壁が展開されるが余り長持ちはしそうになかった。

二人はそのまま動けず、このまま防御を解いて離脱しようにも攻撃を受けるし、防御しながら離脱しようにも、炎の勢いが強すぎるし、ボロボロの二人では回避は不可能だろう。

そして、炎はますます勢いを上げ防御ごと二人を飲み込もうとする。

直後、パンツァーシルトが砕け、風の防御壁に罅が入った。

「あかん!!」

「くっ」

二人が焦った瞬間

『p r o t e c t i o n』

シリウスとは違う声が響き、その声が聞こえた方に顔を向ける。そこには洞窟に墜ちて行った剛がいた。

ただ、先ほどまでとは違い、燃える炎のデザインがされているズボンに黒のタートルネックのインナーに炎のデザインの紅い羽織を纏い、その上からバハムート・インストールで赤くなったマントを着ている。

「フアフ！」

『バリアバースト!』

その言葉とともに、剛のバリアが破裂し、その衝撃で炎が二つに

割れる。

そのすきをついて、剛ははやてと五和を連れて、射線上から離脱した。

「真崎くん？」

「またせたな、八神」

剛ははやてと五和が落ち着いたところで腕を離した。

「紅も、無事か？」

「え、ええ」

五和はなんとか頷いた。
それを確認した剛は竜を見る。

「あれは俺がなんとかする。」

剛はそう言いながら開いていた右手にロングソードを出現させる。

「うん、いいけど。それ、さっきまで持つとった？」

はやては先ほどまで斧剣しかもっていない剛を見ていたので気になつて剛に尋ねた。

「これが俺の新しい力。お前との約束を守る力だ」

「へ！？」

はやてが素っ頓狂な声を上げると、剛はフツと笑い、改めて剛は幻影竜の方向を向いた。

「いくぞ、ファフ、グラム」

『yes my load』

『ああ、行くぜ坊主』

直後、ファフニールはファンゲモードからナパームモードに変わり、グラムはロングソードから巨大な片刃バスターソードへと姿を変える。

そして、そのバスターソードの上部（峯側の鏑に近い部分）にはくぼみがあり、剛はそこにためらいもなくナパームになったファフニールをセットする。

そして、両腕で大剣を振り上げる。

「白騎士が一騎、紅蓮の竜王、真崎剛……貴様を斬り裂く！」

『ロードカートリッジ！』

大剣になったグラムにはめ込まれたファフニールがカートリッジを2発吐き出す。

『王よ、今です！』

グラムに声を掛けられ、剛は頷いて幻影竜に仕掛ける。

「おおおおおおお！覇龍断罪剣！」

剛は幻影竜に向かつて、刀身が赤く輝く巨大な剣を振り下ろす。
その剣は吸い込まれるように鼻先から幻影竜を一撃のもとに切断した。

「ふう」

『お見事です、王よ』

『ああ、大したもんだぜ坊主』

剛が2機からの賛辞を受けていると、五和とはやてが近寄ってきた。

「真崎くん？」

はやてが恐る恐る声をかける。

「八神、約束は守ったぞ」

そう言って笑いかけた。

「へ？あ、えと、その、うん」

その様子を見て五和はため息をつく。

（そういうことですか、まったく）

3人はゆつくりと地上に降りた。
そこへ、幻影を駆逐し終えた鍊とマド力がやってくる。

「剛、五和、無事かって五和はボロボロだな」

「…ああ、問題ない」

「大丈夫です。問題ありません」

錬の言葉に剛はぶっきらぼうに言葉を返し、五和も問題ないと返事をする。

「八神さん、無事ですか？」

「うん、マド力ちゃん。おおきに」

はやてとマド力も無事を確かめあい、錬達の方を向く。

「さて、御門くんが白騎士のアーベントだったのは驚きやけど、
人ともアースラまで来て話聞かせてくれるな？」

はやては真剣な顔で話しかける。

「さてね、それは彼女次第だ。」

「どういうことや？」

錬の返答にははやては質問する。

その答えは隣に立つマド力が代わりに答えた。

「私と彼、少し因縁があってね。それで決着を付けようってことになったの」

その言葉にははやてはため息をついた。

「それで、その結果次第ということなんか？」

「そうなるわ」

「はあ……」

はやてはため息をつきながら頭を押さえた。

「でも、ここに5人の戦士が集まっちゃったわね」

マド力は話題を変えて切り出した。

そう、ここには5人の戦士と5機のレジェンドデバイスが集まった。

【白亜^{はくあ}の騎士^{アーベント}、蒼き^{こんぺき}（あおき）月光^{ディアナ}、翠炎^{すいえん}の聖少女^{ジャンヌ}、紅蓮^{くれん}の竜王^{バハムート}、紺碧^{こんぺき}の海姫^{セレーン}】

【神の極光ブリューナク、月の女神セレナ、天狼シリウス、魔剣ゲラム、水精の防人アンフィバナジス】

この5機と5名、現れていないあと一人の六人は【光の巫女姫^{ヴァイスリッター}】に使えし騎士で、その名を【白騎士団】と呼ばれた者たちである。

しかし、今は、それぞれの理由で闘っている。

「一対一だ、決着を付けるぞ」

鍊がマド力に向かって言う。

「あなたの力で私に届くかしら？」

マド力も鍊に対して言葉を放つ。

「八神さん、手出しは無用です」

「わかったわ。頼んだで」

「ええ」

はやてとマドカが声を掛け合う。

「五和、剛？」

「……好きにしろ」

「止めても聞かないのでしょうか？」

「サンキュウ」

対して、鍊と剛の会話はそれだけで、五和は呆れている。

そして、鍊はランサーモードに変わり、手に槍を持つ
マドカは大杖を持つ。

そして、次の瞬間、二人は飛翔した。

二人は空で交わりながら、杖と槍を交差させていく。

「シューティングスター！」

「ウォーターバレット！」

魔力弾を魔力弾で撃ち落とす。

「シャイニングシューター！」

鍊はウォーターバレットを撃ち落とされた瞬間、立て続けに別の魔力弾を発射する。

それに気がついたマドカは上昇して距離を取ろうとするが、鍊が放ったそれは追尾性をもつ魔力弾で、マドカの後を追尾していく。

「くっ……セレネ！」

『わかってるわ。月光の衣、アルテミスヴェール！』

セレネはマドカのもつレアスキルの一つ、月光の衣の防御力を底上げし、さらにその上からフィールド系の防御魔法を上乘せする。

それが展開完了した瞬間、鍊の魔力弾が直撃した。

「くっ」

「塵鳴流……空破閃！」

直後、直上から鍊の槍から放たれた横一文字の真空波がマドカを襲う

「この、ルナティックバスター！」

青色の砲撃が衝撃波を飲み込む。

「そこ！」

マドカは直後、シューティングスターを発射する。

「くそっ！」

その先には鍊がいて、攻撃を仕掛けるところであった。

鍊とマドカは一進一退の攻防だった。

それを見ていた三人のところに、フェイトと雪、シグナムがやってきた。

「主、はやて、ご無事ですか？」

「あ、フェイトちゃん、シグナムもお疲れさん。って、雪ちゃん？」

「あゝ、はやてちゃんだ」

はやてが二人と一緒に来た雪に驚き、声をあげた。

対する雪は偶然に友人に会ったような声を出す。

そんな二人に対し、フェイトは戦闘する二人に目が行っていた。

「あれは!？」

「ああ、あれ？御門ちゃんとマドカちゃんが一對一の決闘するって」

はやての答えにフェイトが驚く

「鍊!？はやて、今、鍊っていったの？」

フェイトは、はやての肩を掴んで問い詰める。

「え?う……うん。そうやで」

その答えに、フェイトは再び戦闘に目を向けた。

そのときちょうど、鍊とマドカの動きが止まった。

「そんな……鍊……なの？」

フェイトは目にしてしまう。

かつて自分と闘った魔導士の姿をした鍊の姿を

「鍊が……白騎士……？」

マドカと鍊は二人ともにらみ合ったまま動かなくなった。
そこでマドカは鍊に切り出した。

「鍊、巫女姫が現れない以上、うかつに棺を破壊するのは危険なの。
だから、しかるべき処置をして封印保管しないと。」

その言葉に鍊は首を横に振る。

「だからと言って、管理局を信用しろ？ 自分たちの水準以上のものをロストロギアと指定し、自分たちの管理下に置く。そして、管理外世界や未開世界という自分たちとは関わり合いのない世界でも強行して自分たちの法を使う神を気取る輩が何をほざく！」

鍊の言うことはもつともであつた。

地球は管理外の世界。

ほかならぬ時空管理局の権限の及ばない世界である。それなのに、過去2回にわたり管理局は介入している。

「棺は私の力でさらに封印を掛ける。その封印は私以外にはとけな

い。それでも信用ならないの？」

「蒼き月光の封印と解呪の力は知っている。では君は、君の兄の命令や、兄を人質に取られ、上層部に脅されても解かないというのか？」

鍊はとつさにスカリエティに調べてもらったことを口にしていた。そう、この間マド力が鍊を攻撃した本当の理由は後者であった。

マド力は恩人である義兄を敬愛している。そのため、義兄を人質に取られ、仕方なく鍊を攻撃したのだ。

そうやって、上層部はマド力に罪を着せてきた。それでついた二つ名が【非情なる月光】であった。

「なぜそれを……」

マド力は戸惑った、なぜそのことを鍊が知っているのか、いや、そんなことよりも先日 of 攻撃した理由の一端となることまで知っていることに。

「君は何も自分で決めれていない」

鍊は静かに氷狼を鞘に納める。

そんな鍊の頭に浮かぶのは桜守姫蓮華の姿

「俺は必ず棺を破壊する……その中身まですべてを……そして彼女を守る……今度こそ必ず」

鍊の体が光に包まれ、バリアジャケットがガンナーフォームに切り替わり、手には巨大な銃が現れる。

「この想いは……これは俺が決めた、過去がどうか、使命がどうかじゃない、この俺が決めたんだ。行くぞ相棒!!」

『ええ、あなたとならどこまでも!』

錬は自ら決めた決意をマドカに言い放ち銃口をマドカに向けた

【次回予告】

交差する極光と月光、ぶつかるのは互いの意地、唯一つ同じものは大事な人を守りたいという想い。

ただそれだけを胸に、かつてのパートナーは衝突する。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐ者 第17話『二人の意地、月の女神』

『俺はこの想いを貫く、彼女は俺が守る!』

第17話『二人の意地、極光と月光再び』

【無人世界 上空】

マド力は錬の姿が変わったことに目を奪われていた。

マド力より少し上空に浮遊する錬は、ブリユーナクの第3段階「ランチャーモード」を展開させていた。

其の姿はもはや魔導士とはいえない。

纏っているものは正面こそバリアジャケットであるが、その背中、肩や胸部、関節部に装備されている装甲はもはやバリアジャケットと呼べるものとは思えないほど機械的なもので、特徴的なのは背中に装備されている翼のようなギミック機構であろつ。

（おそらくあれは……）

（ええ……あれは戦闘機とかで言うテールバインダーと同じ役割をするものだと思うわ）

（それじゃあ……）

（マド力、あなたの考え通りよ）

その姿をみた、マド力とセレネも翼の役割を一眼で看破する。

そう、あのテールバインダーは移動しながら、手にするランチャーを撃つためのものである。

つまり、マド力やなのは達のように、魔導師が集束及び砲撃魔法を撃つ際に停止し、魔法陣を展開させることなく、砲撃が撃てるということである。

直後、錬の背中のギミックが展開し、錬の魔力光と同じ白い粒子

が噴出し始める。

「行くぞ、相棒!!」

『ええ、あなたとならどこまでも!』

鍊はマドカの方ではなく、更に高度を上げていく。

「相棒、空中砲撃戦闘だ」

『yes , master . A M B A C d o w n l o a d 』

鍊は更に高度を上げ、マドカの直上に位置を取る。

マドカは鍊が上昇を始めた後、その後ろに着いていく。しかし、鍊のスピードがすさまじく、追いつくことができないでいた。

「くっ、速い」

『あれほどの速さなら、たとえ魔力で身体を包んでいたとしても身体にかかるGはきつい筈よ、マドカ!』

セレネはパートナーに向かって攻撃を促す。

「シューティングスター!」

マドカは、セレネが準備していた魔力弾を発射する。

マドカのシューティングスターは、その名の通り、他の射撃魔法の追隨を許さないほどの速度がある。

そして、5発の魔力弾が鍊に追いつき、直撃しようとした時

『マスター！』

「ちっ！」

戦いを見ていた誰もが直撃だと分かるコースであった。

しかし、次の瞬間誰もが目を疑った。錬は舌打ちを一つ打つと、体を横に360度回転させ、急激にスピードを落とし、魔力弾を回避したのだ。

錬はそのまま飛行コースを直角に切り替え、急上昇し、追ってきたマドカの直上を取り、ランチャーの砲身をマドカへむけた。

【アースラ内部】

ようやく無人世界の軌道上に到着したアースラは、惑星内部の戦闘をモニターしていた。

そこに映し出されたのは、マドカと錬の戦闘であった。

「あれ、白騎士じゃねえか！」

かつて、錬と戦闘したヴィータがその姿を見て声を上げる。なのはがヴィータの声を聞きなのはがモニターに注目する。

「御門くん……なんでまた、マドカちゃんと？」

「あいつ、マドカと互角に戦ってやがる。本当にあれで魔力がAAなのかよ」

モニターを見ていたヴィータが声をあげる。

「これは、前回の時よりも魔力値が上がっている？」

その声を聞き、クロノが手元のパネルを操作し、測定値をたたき出す。

「魔力ランクAAA……明らかに上がっていますね」

シャマルがその事実を口にした瞬間、モニター上の錬の姿が変わった。

【無人世界上空】

マドカの上空を取った錬は砲身を構える。

「あいつに光属性の攻撃は意味がない……それなら！」

『アクアバレット、装填』

ブリューナクのその言葉を合図に、錬はマドカへ急降下しながら魔力弾を連続で放った。

「ブリューナクランチャーBモード、アクアバレット、ファイヤ！」

『マドカ、上よ！』

「このー！」

マドカはとっさに防御魔法を使い攻撃を防いでいく、しかし、

「こつちだ！」

マドカの後方から錬の音が響く。
マドカが後ろを振り返ろうとした瞬間、急降下しながらマドカの
背中を錬が通り過ぎた。

直後、マドカの背中に魔力弾が直撃した。

「きゃあっ」

そのまま、マドカは降下していく。
それを錬は銃口を構えたまま見ていた。

〈マドカside〉

マドカは降下しながら悔しさに歯をかみしめていた。
以前に戦った時は確実に自分が上を行っていた。しかし、この数
週間で錬は自らを追い抜くような勢いで強くなっていた。
彼は、言った。

『彼女を守る、こんどこそ必ず』

おそらくそれは姫巫女のことには違いない。
つまり、姫巫女が現れたということなのだろうか？

だとしたら彼の言葉も頷ける、彼は今度こそ彼女を守ることを誓
ったのだろう。

それなら私だって同じだ。

私は、私を助けてくれた義兄を守る。

それが私の生きる意味だから……

だから……私はこんなところで負けられないんだ。

〈マドカside end〉

「セレネ！モード3、アルテミス！」

その声にセレナは驚いた。

『待つて、マドカ。モード3は一撃必殺の状態、空中戦じゃ不利なのよ』

そう、セレネのモード3は弓矢である。足場がしつかりとしない空中で、しかも荒野が続く無人世界では不利以外の何物でもない。

「御願い、もうあれしかないの。彼が意地を掛けるなら、私も意地を通すわ」

マドカの信念のこもった言葉にセレネが折れた

『……………わかった。いくわよ、マドカ、モード3アルテミス！』

直後、マドカの身体が光に包まれ、その姿が変わる。

その姿はまさに、女神を模したかのような神々しさを放つ白い神衣に身を包み、腕、肩、腰回り、膝から下の足にかけて鍊と同じように機械のような装甲に身を包む。

更に胸部にも機械的な胸当てが装備されており、その背部には天使の翼のようなものが付いている。

「私は、義兄さんを守る、そして使命も果たして見せる！」

マドカは地上に降りると、鍊に向かって大声で叫んだ。

「次で決着を付けるわ、鍊！」

鍊はその声を聞き、一つ頷いて銃を構えた。
その姿をみたマドカも弓に矢をつがえる。
直後、二人の足もとに六芒星の魔法陣が展開し、急速に魔力が収束していった。

「未開世界別地点」

二人が魔法陣を展開したところで、五和は二人が決着を付けようとしていることに気がついた。

「バカ、あの二人、あんな魔力同士をぶついたら、ここら辺吹き飛ばわよ」

その言葉を聞いた雪が慌てだす。

「え、うそうそ、どうしよう、五和ちゃん、剛くんどうしよう？」

「……逃げるか」

剛はそう言うなり、雪の襟首を掴み、反対の方へ走っていく。

「あわわわわ、首引つ張らないで」

「あ、ちょっと待ちなさい、二人とも！」

先に行った二人を追いかけるように五和も走り出す。

その光景に見とれていたため、3人が離れて行ったことに気がついたはやては自分たちも後退する決断を下す。

「フェイトちゃん、シグナム、うちらも後退や」

「でも、二人が……」

「テストロッサ、ここでは我々も撒き沿いを食つぞ?」

「で、でも……」

説得しても洩るフェイトにはやては

「あの二人なら大丈夫やろ、ほらいくで」

そう言つて、無理やりフェイトを引つ張っていく

「……鍊」

フェイトは引つ張られながらも最後まで鍊の姿を見ていた。

く 無人世界 戦闘地点 く

二人は魔力をギリギリまで集束させた。

互いに、他の6人が逃げる時間を稼いでいたのだ。

「相棒、行くぞ!」

『いつでも!』

「セレネ!」

『いけるわ!』

6人が逃げた直後、二人のチャージが完了した。

「俺はこの想いを貫く、彼女は俺が守る!」

錬の意地

「私は義兄さんを守る、その上で使命を果たす。」

マドカの意地

「いくわよ!アルテミス、ブレイカー!」

マドカが矢を放つと、前にできていた巨大な魔力スフィアが極大の光の壁となり錬に向かう。

「我に勝利を!煌めけ、極光!サウザンド・ブレイバー!!」

錬が引き金を引くと同時に銃口からはマドカの魔力と同等の魔力が発射され、直後、無人世界は白銀の光に包まれた。

【未開世界上空 戦艦アースラ内】

ヴィーーーーー、ヴィーーーーー、ヴィーーーーー

アースラがフェイト達を急いで回収するため、無人世界の大気圏内まで降下した直後、錬とマドカの魔力が衝突した。

その余波で大気が震え、アースラの船体は激しく揺れ動かされるときともに、船内にはアラート音が鳴り響いていた。その衝撃でブリッジ内も大きく振動してた。

「きゃああああ」

「みんな、何かにつかまるんだ」

クロノが叫ぶもその声はアラート音でかき消されていく。そんな中、帰還したシグナム、そして待機していたヴィータ、ザフィーラの3名は画面をしっかりと見据えていた。

「このままでは撒きこまれる」

「艦長、どうにかマドカだけ転送できねえのかよ!」

シグナムが状況を見て一言告げると、すかさずヴィータがクロノに提案するが、その問いにザフィーラが答える。

「魔力が収まらんとどうにもならん」

そしてもう一人、画面を見つめて呟く人物がいた。なのはである。

「マドカちゃん……御門くん……」

なのはは画面に映る二人の目を見て悟る。

二人は何か強い想いを持って闘っているということ……
だからこそ、彼女は動けなかった。

二人が戦いを始めるのは自然と想像ができた。

軌道上に着いてすぐに出撃すればおそらくこの戦いを止めること

はできたはずだ。

しかし、この二人の間に自分が入ることはできない……自然と自身の中でその答えが出来上がってしまったのだ。

「アースラ、一度軌道上へ上がるぞ！」

クロノの指示でアースラは荒野の上空から離脱した。

【戦闘地点】

錬の放った魔力流とマドカの放った集束砲は拮抗していた。

その拮抗はいまだ続くと思われていたが、徐々に錬の放っている魔力流がマドカの集束砲を押し始めていた。

「くっ……押され始めてる……」

拮抗が崩れ始めた理由、それは二人の攻撃にあった。

錬の魔力流はブリューナクランチャーの銃身に魔力を集束させてから銃口から放つ放出型の攻撃に対し、マドカのアルテミスブレイカーは、なのはのスターライトブレイカーと同じく、自らの魔力、周囲に散った魔力を再集結させ巨大な魔力スフィアを生成し、アルテミスの矢でスフィアを撃ち抜き魔力を開放するという攻撃であるが、なのはのように常時魔力を収束させているわけではない。

つまり、錬は自らの魔力を絶えず流し続けることができ、逆にマドカは一度集束させた魔力を放つ。

セレナが言っていた一撃必殺とはこういうことであった。

「相棒！決めるぞ！」

『yes・Master!』

自らの攻撃が押し始めたことを確認すると、鍊は決着を付けようと更にブリューナクへと魔力を流し込んでいく。

『マドカ、押されてるわ』

「わかってる……………こうなったら、セレネもう少しだけ私に力を貸してね」

マドカは愛機の言葉に何かを決断し、愛機に声をかける。

『っ、あなたまさか！？』

セレナのその言葉にマドカは首を縦に振ることで答えるが、セレネはその決断に反対する。

『バカなことを考えないで、そんなことすればあなたの魔力が』

「お願い。私、負けたくないの……………彼に言われたことが違うつていう証明のために」

『マドカ……………わかった。いくわ、あなたと。私は『蒼き月光』のパートナーだものね』

マドカの言葉に覚悟を受け取ったセレナは自らも覚悟を決める。マドカは銃を構え魔力を放ち続ける鍊を見上げる。思い出されるのは先ほど言われた一言

『君は何も自分で決断できていない』

確かに、そうかもしれないとマドカは思った。

かつて、兄を盾に取られ数々の汚れ仕事を強制された。

天才執務官ともてはやされた時期もあったが汚れ仕事のせいで管理局内でも風当たりが強く、仲が良い局員と言えば、兄の周りにいる局員ぐらいのものであった。

だが、先ほどの錬の言葉でマドカの心はきまった。

どんなにののしられ、冷たくされようと、恩人であり敬愛する兄を必ず守って見せる……たとえば、【非情の月光】と言われようが必ず守って見せる。

それが、家族を失くした自分に新しい家族をくれた兄への恩返しなのだから。

そう心に決め、マドカはセレネを高く掲げ叫ぶ。

「セレネ！フルドライブ！モード、ヘカテー！」

『full drive ignition』

直後、マドカは蒼く輝く神衣に姿を変え、背中にある二対の翼は大きく開かれ6枚翼に変わる。セレネは本体の宝珠を中心に金色の二対の翼を形度ったフレームが構築され、その下に柄がつき、先端には両刃の剣が装備される。

これが、セレネのフルドライブ、ヘカテモードである。

大きさはなのはのレイジングハートのフルドライブ、エクセリオンモードと変わらず、1stモードの大杖とちがい、小回りが利き、槍としても振るうことができる

『私の内包魔力も持って行きなさい』

レジェンドデバイスにはそれぞれ一定量の魔力が内包されている。この魔力と使用者の魔力の波長が合うことで戦士として覚醒できるのだ。

「ありがとう。いくわよ！」

マドカはつぶやき、杖を天に掲げた。

その様子を鍊も確認していた。

『あれは、フルドライブ！？蒼き月光はそこまで覚醒していた！？』

ブリューナクが声を上げた直後、上空に蒼銀の魔力が集っていく

「何だ！？魔力？」

鍊が気づいた時にはすでに上空に巨大な魔力スフィアができていた。

「まさか！二発目の集束砲！？」

マドカは魔力スフィアが完成すると、セレネを大きく縦に振るう。

「光よ集え！闇夜を照らす満月となり、世界を満たせ！月の女神の名のもとに！サテライトブレイカーーーーーー！」

直後、蒼銀の巨大なスフィアから魔力が放出され、衝突していた魔力砲撃ごと荒野一面を飲み込んでいった。

【次回予告】

闘いは終わり、アースラのモニターから確認できるのは荒野にできたクレーターののみ

衝撃で大きく飛ばされた二人は奇しくもゆっくりと語り合う時間を得る。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐ者 第18話『交わらなかった道と運命』

『これが管理局のやり方か、ハッキリわかった。ここは引かせてもらっぞ』

第18話『交わらなかった道と運命』

【戦艦アースラ内】

アースラは爆発が収まった後、再び、荒野の上空まで降りてきていた。

その果てしなく続いていった荒野は大きなクレータができており、地形が若干ではあるが変形していた。

「マドカはどこだ？」

最初に声を出したのはヴィータであった。

なのは撃墜事件の後から彼女は仲間を失うかもしれないということに過敏になっていたからだ。

「マドカ・アーヴィングの魔力反応を探索しろ」

ヴィータの声を聞き、クロノが素早く指示を出し、ブリッジ内にいるオペレーター達がコンソールをたたき、搜索を開始する。

「マドカちゃん、御門くん」

なのはが二人の名前を呟くと、その肩に傷の手当てを受けた後、ブリッジに来ていたはやてが手を乗せる。

「なのはちゃん、二人を探しにいくで」

「っ！うん！」

はやてのその言葉に、なのはは笑顔でうなずく。

「クロノ君、こちらは外に降りて搜索するで、ええな？」

「わかった」

はやてはクロノに声を掛けると、ブリッジを後にしようとする、そのとき、探查をしていたオペレーターの声が響く

「アーヴィング執務官、白騎士の魔力反応、確認ができません」

「魔力残留がひどくて、サーチが上手く働かないみたいなの。これなら直接外へ出て探した方がいいかもしれません」

オペレーターに続き、クラールヴィントでサーチを手伝っていたシヤマルが発言した。

「わかった、みんなすまないが、外に出て探索を行ってくれ。搜索範囲は未開世界全域に設定する。1時間ごとに定時連絡を行ってくれ。探索には僕も出る。」

「了解」

クロノの指示に全員が返答し、非戦闘員スタッフ以外のメンバーが探索に出て行った。

【無人世界 密林地帯】

「う……うっん……」

無人世界にある密林地帯の洞窟内でマド力は目を覚ました。

「ここは……？さっきまで彼と戦闘していたはずじゃ……」

マド力は自分の現状を知るため記憶をたどっていく。

「たしか、サテライトブレイカーを使って……その後は？そうだ、セレネは！？」

自らの格好が執務官の制服に戻っていることに気がついたマド力は愛機セレネに声を掛けるがその返答はない。

自らの耳に手を当てると、そこには待機状態のセレネが付いていて一安心する。

マド力が手を動かした時、パサリと、自らの身体に掛けられていたものが落ちた。

「これは？」

マド力がそれを拾い上げようとした時、

「お、起きたみたいだな。」

「っ、誰！？」

マド力が声のした方をむくと、そこには、果物や木の枝、魚を両腕いっぱいを持った鍊が立っていた。

そこで、マド力は手に持ったものを確認すると、それは鍊の纏っていたローブであった。

「あ、あなたがどうして……？」

「ああ、それを説明しないとな。あの後……」

そういつて、鍊はあるとき何が起こったかを説明し始めた。

【回想】

「光よ集え！闇夜を照らす満月となり、世界を満たせ！月の女神の名のもとに！サテライトブレイカー……！」

天に浮かぶ蒼銀の巨大なスフィアから集束砲が放たれる。

その膨大な魔力流が迫る中、鍊は、この攻撃が魔力と衝突すること、周囲一帯が大爆発を起こす可能性があることに気がついた。

「やばっ！あいつ、自分も巻き込まれるぞ！」

鍊は先ほどの戦闘の連続と、魔力の大解放によって魔力はほぼそこを付いており、防御は愚か、緊急転移による回避もできず、浮いていることがやっとの状況だった。

しかしその時、

『緊急転移、対象、白亜の騎士、蒼き月光、座標設定ランダム、転送！』

「相棒！？」

ブリューナクから詠唱が聞こえた次の瞬間、荒野は魔力の大爆発に包まれ、鍊は気がつくと密林に倒れていた。

「つつ……相棒、ここはどこだ？」

『……すいません……緊急転移を行ったので、同じ無人世界だと思
いますが、座標までは……それと、サウザンド・ブレイバーと緊急
転移で私の内包魔力が……』

「そうか……わかった、相棒、ゆっくり休んでくれ」

鍊がそう告げると、ブリューナクは待機状態の腕輪に戻り、一瞬
コアが光ると、中から氷狼とウィザード形態で着ているローブを出
した。

『今の…私…には、これ…ぐら…いしか…』

そう言って、ブリューナクは休眠モードに移行した。

「サンキュ、相棒……ゆっくり休んでくれ」

その後、鍊は周囲を見回すも、あたりは木しか見えない。

「仕方ない……俺の魔力も空っぽだし、まずは水場を探して、それ
で休めるところを探すか」

そう思い、歩き出そうとしたところで、ガサガサッと、背後の茂
みから音が聞こえた。

「誰だ！」

そう言って、振り向きながら氷狼の柄に手を掛ける

「……………ん……………」

「マド力っ!？」

茂みから出てきたマド力は、鍊を見て、名を呼んだ瞬間、意識を失いゆっくりと倒れた。

鍊はすぐさま、マド力を受け止める。

「おい、大丈夫か？」

幾度か声をかけながらゆするも反応がないため、鍊は彼女を背負って水場を探した。

しばらく進むと綺麗な川を発見し、その上流にあった池の近くで洞窟を見つけ、そこを拠点にすることにした。

【洞窟内】

「と、言うわけだ」

鍊は大きな木の葉の上に果物と魚をおき、枯葉の上に木の枝を並べながらそう説明した。

「……………そうだったのね……………ありがとう。私たちは敵同士なのに……………」

マド力は素直に礼を述べた。

「味方も敵もないさ、お互いに魔力切れで、愛機も起動できない状況だ。そんな中、密林で行き倒れてる女性を放置できるわけがない。」

「

鍊はおどけて言いながら、氷狼を抜き、石を数度叩きつけて火を起す。

「器用なのね？」

「刀するのはいいことではないけど、こいつは特別みたいだからな。それに、これも過去の知識のたまものだな、サバイバルは家族で一度やったことがあったから……っと、すまない」

「……………気にしないでいいわ」

急に沈黙が訪れた。

（やっちゃった……ジェイルからの報告で知ってたはずなのにな……よし）

「ほら、とりあえず、魚が焼けるまでこれ食っとけ」

そう言って、取ってきた果実をマドカに差し出す。

「これ、食べられるの？」

「ああ、密林の動物も食べているところをみたし、それに一度試食してる。」

「そう、じゃあ、いただくわ」

そう言って、マドカは少し大きめなオレンジ色の実を手取る。

「あ、それは「っう」……苦いやつって言おうとしたのに……」

「なんてものたべさせるのよ!」

「お前が、忠告前に食ったんじゃないか!」

「先に苦い奴もあるって言うておけばいいでしょ!」

「あ……いや……なんだ、その、すまん。」

「別に、他の食べるからいいわよ。まともに食べられるのはどれ?」

「これと、これと、あっちの赤い果物だな」

マド力は鍊に教えてもらった果実を手にとると、鍊が笑っていることに気がついた。

「……何笑ってるのよ。」

「ははは、いや、それが地なんだと思ってね」

そう、マド力は普段お嬢様を装って丁寧な口調でしゃべるのだが、本来は強気で負けず嫌いなのだ。

「///そ、そうよ、わるい?///」

「いや、むしろ、好ましいくらいだね」

「な///」

そんな会話をしながら、鍊とマド力は食事を取り終えた。

そして、鍊が唐突に切り出した。

「さっきはすまなかったな」

「さっきっていつのことよ」

「戦闘中、俺は君に自分で何も決断できていないと言ったことだよ」

「……そのことね」

「ああ、君の声は聞こえていたし、君の想いもわかった。あの2連続の集束砲が何よりの証拠だな」

「そんなことないわ、事実、あの時点まで私は自分では決断できていなかったもの。義兄さんのためにとしか思っていなかった。でも、私きちんと決めたわ。どんなことをしても、私を救ってくれた義兄さんを守って見せるって」

そう語るマドカの目を見て鍊は彼女が強くある理由を知った。

「負けたよ……あの勝負、君の勝ちだ。」

「そうでもないわ。あの時、あなたの信念を聞いていなければ、私はあの二発目は撃てなかった。だから、引き分けよ」

「そっか……そうだ、たしか話があるんだったね？幸いにも時間はあるし、ゆっくりお互いのことでも話そうか？」

「それもそうね。」

そう言つて、二人はこれまでどういった経緯で育ってきたかを語ることにした。

鍊は家族のこと、今は別々に暮らしていること、いつブリューナクと出会い、騎士として覚醒したのか、マドカが知らなかったことを話した。

そして、

「とまあ、貿易商の家に生まれて何不自由なく育ったんだが、如何せん親が許嫁を決めるところが嫌なんだよ」

「でも、家督はお兄さんが継ぐことになっているのでしょう？」

「まあ、そうなんだけどね。名家とのつながりも大事なんだろうね」

「私の兄も許嫁がいるらしいわ。まあ、誰なのかは教えてくれないのだけれど」

「許嫁か……」

そう呟いた鍊の脳裏に映るのはすずかの姿が映り、その後、蓮華の姿に変わる。

（すずか、きつと心配してるだろうな……最低だ、俺は……あんなに慕ってくれている娘がいるって言うのに……）

「鍊、知っている？」

考え事をしていた鍊にマドカが声を掛けた。

「何を？」

「私が地球出身ということ」

「ああ、ちょっと調べさせてもらったからな」

「そう、じゃあ知っているのね。」

「ああ、君が藤原円、8年前の飛行機事故で行方不明になった俺の元許嫁だったことも」

「そっか……………ねえ、ちょっと外に出ない？」

そう言つて、マドカは洞窟を出ていく。

鍊もそれに続いて外にでる。

洞窟の外は木々が少なく、池の周囲は空がよく見えた。

「星が綺麗ね」

「そうだな……………」

「私ね、次元漂流者として管理局に保護されたの」

鍊は何も言わずにマドカの話聞くことにした。

「最初は漂流者として丁寧な対応を受けたわ、でも……………私に膨大な魔力があると知った管理局は私を研究所送りにしたの、そこで何度も実験をつけたわ……………鎖につながれ電気を流されたり、変な薬を使われたり……………」

そのことを聞いた鍊は拳を強く握りしめた。

「でも、そんなときに兄さんが助けてくれたの。私が送られたのが違法研究所だったらしくて、当時すでに執務官として働いていた兄さんが来たの。そして、保護してくれた兄さんの誘いで私はアーヴィング家の養子になったのよ。」

「そっか……管理局も一枚岩ではないということか」

「ええ。だから、私は管理局の闇を追い出そうと頑張っている兄さんを守るの、昔、兄さんが私を助けてくれたようにね」

「……君の兄さんは管理局を改革するつもりなのか？」

鍊は話を聞いていて、ふとそのような答えに行きついた。

「……そうね、兄さんは古い体制の管理局を本気で変えるために動いているわ。そのために仲間を集めてる。そして、その為に力のある人を集めようとしているの」

「そっか……君の兄さんは本気なんだね？」

「ええ。だから、一度兄さんに、レオン・アーヴィングに会ってほしいの」

「……すこし、考えさせてくれ」

鍊はそう告げると、マド力を残し洞窟へ戻っていく。
マド力はその背中をずっと見つめていた。

次の日、マドカが目を覚ました時、鍊の姿が洞窟内にはなかったため、急いで外に出てみると、鍊は一人で剣の訓練をしていた。

「起きたんだ、おはよう、アーヴィングさん」

「ええ、おはよう。はいのね。それと、私のことはマドカでいいわ」

「じゃあ、俺のことは鍊でいい。訓練は一日休むと、体がなまるからね。それに、力を持っておかないといざという時に大切なものを守れないから」

「そう、ね。昨日のこと、考えてくれたかしら？」

「君の兄さんに会うこと……か」

鍊は正直まだ迷っていた。

マドカの兄、レオンが本当に管理局を改革するのはいい、むしろそのつもりなら協力しないでもない。

だが、その為にミッドに行っている間に棺が何者かに解放される可能性もある、そしてその際に蓮華の身になにがあるかわからない。

「私は、昨日あなたと一緒に戦っていて、とても居心地が良かった。こんなこと今まで感じたこともなかったわ。戦闘中に安心できるなんて……そして、ようやくこうしてゆっくり話すことができた。」

「俺だってそうだ。最初に会った時はわからなかった。だけど、君が藤原円だと知った時には生きていてくれた嬉しさと同時に、悲しみもあった……まさか、敵対することになるなんて……」

「今からでも遅くないわ。一緒に姫巫女をまもりましょう?」

そう言って、マドカは右手を差し出した。

鍊は悩んだ末、マドカの右手を握り返そうとした瞬間

「ラケーテンハンマー……!」

数刻前……

搜索2日目、密林の上空を飛びながらマドカの魔力を探索していたヴィータは、愛機のグライフアイゼンからマドカの魔力に酷似した反応を発見したとの報告を受け、反応場所に急いでいた。

「アイゼン、間違いなくマドカなんだろうな?」

『高確率で間違いありません。ですが、すぐ近くに別の魔力反応があります』

「もしかしたら白騎士かもしれないねえ、急がねえと」

ヴィータは飛ぶスピードを上げながら魔力反応があった場所へ向かう。

すると、森が開け、池のある場所が見えてきた。そのほとりに見覚えのある後ろ姿が見えた。

「マドカ、よかった。っ、あいつは!!」

ちょうどその時、鍊がマドカの右手を取ろうとしてる場面であったが、ヴィータからはその右腕は見て取れず、鍊がいること位しかわからない。

そして、その鍊の左手には鍛鍊後もあって抜き身の氷狼が握られている。

「あの野郎！アイゼン！」

『J a w o h l . 』

「ラケーテンハンマー……！」

ヴィータは愛機をラケーテンフォルムに変え、鍊に向かって突撃した。

【密林 池のほとり】

「ラケーテンハンマー……！」

その声に、鍊とマドカが同時に気づく。

「ヴィータ三尉！？」「

「ちっ！鉄槌か！？」「

「マドカから離れやがれ……！」

鍊は振り下ろされるグラーフアイゼンを氷狼ではじき、バックステップで距離を取る

そして、マドカと鍊の間にヴィータが下りてくる。

「マドカ、大丈夫か？」

「ヴィータ空尉……どうして……」

「みんなでお前のこと探してたんだよ。まさか、白騎士と一緒にとは思わなかったけどな。アタシがきたからにはもう大丈夫だ」

そう言って、ヴィータは鍊を睨む。

「鉄の伯爵と鉄槌か………またあつたな、小さき赤い騎士」

鍊がヴィータを見ると、彼女は鍊を睨みつけ銀の玉を出現させる。

「今度こそ逃がさねえぞ、喰らえ、シュワルベフリーゲン！」

直後、急速に接近してくる銀の玉を鍊は氷狼で切り裂き爆発させる。

「ラケーテンハンマー！」

直後、ヴィータの追撃が迫るが、鍊は刀で受け止め、ヴィータのから空きになった腹部にめがけ連続蹴りを放つ。

「塵鳴流、ろうそうがれんきやく狼爪臥連脚」

流れるように放たれる蹴りの4連撃を受けて、ヴィータはたまらず吹き飛ばされる。

（魔力が完全回復していないのに騎士相手に戦闘は無謀か）

考え事をしていると、吹き飛んだヴィータが立ち上がっていた。

「くそっ」

「ヴィータ空尉、無理はしないで、引きましょう」

マドカが言うも、ヴィータの視界には錬しか入っていない。
すると、錬が発言した。

「これが管理局のやり方か、ハッキリわかった。ここは引かせてい
ただこう」

そう言って、錬は転移の準備をし始める。

「テメエ、逃がすと思ってるのか！」

「錬！」

「またな、マドカ」

ヴィータが接近し、グラーファイゼンを振り下ろすも、直前で転
移が発動し、錬の姿は消えた。

「逃がしちまったか。マドカ、大丈夫だったか？」

そうやってきたヴィータに、マドカは戸惑いながらも

「ええ、ありがとうございました」

そう答えるのだった。

そしてちょうどその時、連絡を受けたアースラが密林の上空に到

着した。

【次回予告】

闘いの後、二つの道は交わることはなく、悲しき運命は加速していく。

そして、再び出現する棺の前に現れる、全身を装甲で包んだ戦士と誓いを新たにする白い騎士とが対峙する。

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐ者 第19話『ただ、己の信念のために』

『お前に信念があるように、俺にも信念があるんだよ、こいつがな』

第19話『ただ、己の信念のために』（前書き）

今回、パラレルワールドの解釈が入っていますが、私の独自の解釈ですので、あまり気にしないでください。よろしくお願いいたします。

第19話『ただ、己の信念のために』

自然公園の森の中、少し開けたところに白い魔力光が集まり、次の瞬間、その場に鍊の姿が現れた。

「ぐ……魔力が完全回復してないのに……長距離転移は無理があったな……」

鍊は鞘に納めた刀を杖代わりにしてようやく一本の木に近づくとその木に背をもたれさせ腰を下ろす。

「はは……体力も……限界……みた……い……」

鍊はそのまま目を閉じると、乾いた笑を浮かべて気を失ってしまった。

【戦艦アースラ ブリッジ】

同時刻、無事に艦に戻ったマド力はブリッジで報告を行っていた。

「では、彼の説得は失敗したということか？」

クロノはマド力の話を一通り聞き終えた後、彼女に結果を聞いた。

「はい、ですがそれは白騎士のアーベントとしての言葉だと私は思います。彼は……鍊は私の言葉に耳を貸してくれました。」

「とすれば、彼らの説得は……」

「私たち……ってことだね、クロノくん」

クロノの言葉になのはがそう答える。

「そうなるな」

クロノもその言葉に肯定する。

錬達と同じ学校に通うのはたちならば説得も可能と考えたのだろっ。

しかし、その言葉にマドカは首を横に振った。

「いえ、兄に、レオン・アーヴィングに錬の説得をしてもらおうと思います。兄さんの言葉ならきつと錬も聞いてくれると思います。」

「レオン・アーヴィング、緋色の明星か」

クロノはレオンの二つ名を呟く。

レオン・アーヴィング、彼は若くして執務官となり数々の事件を解決しており、本局上層部からはもとより、地上本部の人間からも信頼が厚い、次代管理局を率いるべき人間として各方面から注目されている人物である。

しかし、その反面、彼を毛嫌いする人間や利用しようとする人間がいるということもまた事実である。

現在は独自の捜査チームを率いており、第一線には出ず部隊の指揮を主に行っているはずだが、戦闘になると、その緋色の魔力光と明星を思わせる輝く魔力スフィアから『緋色の明星』と呼ばれている。

「たしか、マドカちゃんのお兄さんだよね？」

「ええ、鍊は確かにあの時私の手を取ろうとしてくれました。だから兄と話をすればきっと協力者になってくれるはずです。」

マドカの言葉にヴィータが顔をしかめる。

艦に戻った後でマドカの報告を聞いた時ヴィータはあの時の攻撃を後悔した。

以前敵として闘ったとはいえ、いきなり攻撃で割って入ったことによってマドカと鍊の交渉を決裂させてしまったのだから。

そんな時、今まで黙っていたシグナムが発言した。

「すまないが、アーヴィング。一つだけ教えてほしい。」

「何でしょうか？」

「私と主はやてはあのアーベントとジャンヌに一度襲撃されている。棺が現れなかったのだ。なぜ、我らだけそんなことが？」

その言葉にマドカはしばらく目をつむり沈黙した。

「答えられない……か？それは、貴様も白騎士の一人だからではないのか？」

そのシグナムの発言にブリッジ内がざわついた。

「マド力が……白騎士……？」

フェイトが恐る恐る呟く。

「蒼き月光と言う二つ名の響きが他の白騎士と似ていることもあるが、あの独特の魔法陣、アレを見てそう判断した。違うか？」

周囲がマド力に視線を向ける中、マド力は一つため息をついた。

「そうです。私は白騎士が一騎、蒼き月光、騎士としての名はディアナ。そして愛機はレジェンドデバイス、月の女神セレナです。」

「白騎士も一枚岩ではないということか」

クロノの発言にマド力は首を横に振る。

「いえ、白騎士の使命は皆同じです。姫巫女を守り、棺の中身を破壊すること、ただ、私と鍊では方法が異なっただけです。」

「なるほどな、じゃあ、話し戻すけど、うちらが襲われた理由をマド力ちゃんは知ってるんか？」

「ええ、おそらくは、夜天の書に記されたとある魔法を回収するためです。」

その言葉にはやては何かに気がついた。

「もしかして、ライトオブデザイア？」

「ええ、光属性の広範囲殲滅魔法、光の姫巫女が持つ唯一の攻撃魔

法……でした」

「でした……とは？」

マドカの言葉にザフィーラが聞き返す。

「かつて、我々が生まれるはるか前の時代に、闇の書が光の姫巫女を蒐集したのですがそれをきっかけに暴走、そのまま当時の姫巫女は死亡しました。そして、その後の姫巫女たちにはライトオブデザイアが引き継がれず、幻影魔物に有効な攻撃魔法はその姿を消し、私たちの前に闇の書も現れなくなっただけです。そして、今代、闇の書は呪いから解放され、夜天の書として今もある。」

「つまり、アーベントとジャンヌはそれを回収するためにはやてちゃんとシグナムを襲ったんですね。」

「ええ、そして、はやてさんがライトオブデザイアを使いこなしたことでその必要性がなくなっただけです。」

「それにしても、マドカ、君は少し事情に詳しくないか？」

クロノがそのことを指摘すると、マドカは細く笑う。

「ええ、それはそうです。白騎士になれる人間の魂はレジェンドデバイスと引き合い、騎士として覚醒すると同時にこれまでの過去の騎士達が蓄積した情報や白騎士の使命を継承しますから」

「それじゃあまるで！」

なのはの問いにマドカは一度頷いて答える。

「夜天の書の無限転生機能、あれはレジェンドデバイスの転生機能を元にしてあると聞いています。」

「それじゃあ、レジェンドデバイスって言うのは……………」

「ええ、エイミーさんが思っておられる通り、アルハザードがあった時代より更に前の時代に作られたデバイス、それがこの子達です。そして、白騎士団と黒き王の棺の闘いもその昔から、この世界や別の次元の世界で繰り返し広げられました。」

「この世界と別の次元？」

フェイトがその言葉に疑問を浮かべる。

「どういうことだ？僕たちがいるこの世界が次元世界だろう？」

クロノが更に尋ねる。

「この世界は他の次元世界を行き来できる多次元世界ではありませんが、それは一つの大きな流れの上に存在する世界だということです。そしてそれ以外のことをここでは別の次元の世界と言います。みなさんは、パラレルワールドというものをご存知ですか？」

「パラレルワールド？」

なのはやヴィータが頭の上に？マークを浮かべたような顔をする。

「簡単にいえば、もう一つの私たちの世界だね。例えば、なのはちゃん魔法に出会わないでそのまま人生を過ごしている世界とか、

フエイトちゃんが生まれなかった世界みたいにいくつかの違った事象で一つのベクトルから分岐した別の世界。極端に言えば、いまだこかで野良猫があくびをしたかしなかったで世界が分かれてしまうってことだよ。」

エイミイがスクリーンに1本の矢印を出し、そこからいくつかの矢印を分岐させる。

「そうです。あくびをしたかしなかったではベクトルからそれることはほとんどありませんが、大きな事象が起きることによって別の世界が発生すること、それがパラレルワールドと言われていますが、この例説が正しいのかはわかりません。ただ、ことは別の全く違う歩みをした世界があるのは事実です。そこには私たちは存在するかもしれないし、存在していないかもしれない。しかし、その世界に命がある限り、自分と同じ存在となりうる可能性があるとしたら、どうします?」

そこまで聞いてクロノは何かに思い当たる。

「まさか、棺や白騎士についての文献が少ないのは古すぎるのではなく、その別の次元に転生していたというのか?」

「はい。棺は巫女姫に封印されると別の次元へと転移し、使命を全うできなかった騎士達の魂は別の次元の可能性に生まれ変わり、デバイスたちもその魂と共に転生し、騎士と巡り合い、また闘いに身を投じる。それが私たちの運命です」

その言葉を聞き、ブリッジにいた全員が絶句していた。

「私たちは今度こそ、この運命から解き放たれる。それはきっと鍊

達もそう思っているはずです。」

沈黙を破ったのはマドカ自身だった。

「でも、どうやって？」

「スクライア司書長が発見した石板です。今まで私たち騎士が知らなかった言葉があったんですよ。『悲しき運命は、神々の血を受け継ぎし子が光を受け継ぎしとき、子は戦神となり、運命を断ち切るであろう。』それがきつと希望になると私は思っています。」

なのはの言葉にマドカは目を閉じて答えた。

それが核心であるかのように

「そうか、それじゃあ、レオン執務官に連絡するついでに、ユーノにも連絡してこっちに来てもらおう、もう少し、君に話してもらいたいことがあるからな」

「はい、わかりました。」

クロノの言葉にマドカは素直に答えた。

「それじゃあ、これで解散だ」

そのクロノの言葉で皆がそれぞれ動いていく。

「それにしても、マドカちゃん、やけに御門くんのことこだわってるな？」

はやてがマドカに尋ねる。

「そうね、でも、許嫁のことを気にするのは普通だと思うな」

マドカの言葉に一瞬場が凍る。

「「「ええー……!?」」」

なのは、フェイト、はやての三人が同時に叫ぶ。

「え?え?どういうこと?」

「御門くんの許嫁ってすずかちゃんだよな!」

「これは………修羅場が見れるかもしれへんな」

上から、フェイト、なのは、はやての順である

「許嫁といつても、“元”だけだね。私、実は地球出身なの」

そう言つて絶句した3人を置いてマドカはブリッジを出て行った。

【???】

鍊は不思議な浮遊感を感じていた。

何も見えない真っ白い霧に包まれ、湖の上に浮かんでいるような感覚であつた。

次第に視界が開け、向こう側に和服を着た自分とよく似た男性が

淡い桜色の着物を着た美しい女性とどこか庭のような場所を談笑しながら歩いている。

しかし、何を話しているかわからない。

そこで、鍊は頃が夢だということに気がつく。

本家で肖像画を見た後、蓮華と出会った直後から身体が疲れている時に見るようになった“夢”だ。

視線の先にいる男女は楽しそうに談笑している。

すると、女性が何かに気がつき、男の手を取ると、自らの両手でその手を握ると淡い光が溢れ、男性の手にあった傷を癒していく。

その光景を見た時、自らの身体に暖かい何かが流れ込んでくる感覚がして、意識が急速に浮上していく。

『ありがとう、桜さま』

その言葉が耳に残った。

【自然公園】

鍊が気がつくと、先ほどの場所であった。

時間はさほどたっていないのか、まだ日は高い所にあった。

「よかった、気がついたのね。」

不意にその言葉が聞こえた。

とつさにその方向を向くと、そこには桜守姫蓮華が立っていた。

「……………蓮……………華？」

「うん」

鍊の言葉に、蓮華はほほ笑みながら頷き、事情を説明してくれた。

自然公園を散歩していたらたまたま、森の奥で光が見え、気にな
って進むと、鍊が倒れていたということである。

（体力と魔力が完全回復している？まだ少ししか休んでないのに……
傷も……………ない……………）

「驚いた？」

鍊の思考を読むかのように蓮華が尋ねる。

そして、そつと鍊の右腕についた待機状態のブリューナクと脇に
置かれている氷狼に視線を向ける。

その後、鍊の顔を見てそつとほほ笑むと静かに言った。

「鍊が私の騎士だったのね」

「……！」

鍊はその言葉に驚くしかなかった。

そんな鍊を気にせず続ける。

「小さいころからずっと夢で見っていたの。私を守ってくれる銀の腕輪をして淡く輝く刀を持ったと銀髪赤眼の男の人。そして、昨日、私は全てを知りました。」

蓮華は静かにそして力強く、言った。

「私が、光の巫女姫だということを」

「……………姫さま」

「蓮華。私のことはこれまでのとおり、蓮華と呼んで」

鍊はその言葉に頷くことしかできなかった。

たったの一晩、それだけで運命が急速に回り始めた。

「逢いたかった、鍊」

直後、その言葉と共に、鍊は蓮華に抱きしめられる。

それだけで、鍊の中にあつた何かが崩れ、かつての記憶、御門家初代当主【御門鍊】の記憶が蘇る。

「さ……………くら……………?」

「はい……………鍊」

巫女姫には覚醒と同時にかつての記憶も蘇ると言われているが、

彼女、蓮華は巫女姫ではなく、【桜守姫桜】の記憶が鮮明に蘇っていた。

「こんどこそ、ずっと、一緒です。」

鍊はその言葉に涙を流し、蓮華を抱きしめ返した。

「今度こそ、必ず貴方を……………守って見せる。今度こそ必ず」

どれだけ抱き合っていたのだろうか、ようやく二人が離れ、落ちて着ける場所に移動しようとした時、周囲の気配が変化した。

『マスター！棺です！！』

突然の愛機の声に鍊は自らの背に蓮華を下がらせる。

「相棒……………いけるか？」

『ええ、巫女姫に回復していただいたおかげで完全復帰です』

「よし、セットアップ」

鍊がバリアジャケットを纏った瞬間、幻影が軽く見積もって20体位現れる。

周囲の林の中にはもつというだろう。

「広域結界展開」

蓮華の声と共に周囲に結界が展開される。

「蓮華？もしかして」

「うん、攻撃はできないけど、防御と回復ならできるからバックアップは私が」

蓮華はいつの間にかバリアジャケットを纏っており、金色に輝く二ヶの杖を持っていた。

『……………巫女姫のデバイス……………ミスティックデバイス「イーリアス」』

「錬、来ます！！」

蓮華のその声と同時に

「玄武剛弾！！」

上空から魔力の渦が幻影を一掃していく。

「どけ、言い気に片を付ける。青龍鱗！！」

その言葉と同時に青い魔力弾が無数に林の中に降り注ぎ、幻影の気配が消えていく。

直後、フルスキンの装甲を纏った戦士が舞い降りた。

「傭兵が何の用だ？」

「白亜のアーベント、お前の力を試させてもらっつ。」

「断ると言ったら？」

「後ろの女がどうなるか………わかっているだろう？」

錬はウィザードフォームからファイターフォームに姿を変える。

「…………錬」

蓮華が心配して錬に声を掛ける。

「蓮華、少し待っていてくれ。こいつとは何故か闘わないといけない気がするんだ」

「……………わかったわ」

そう言つて、蓮華は二人から離れる。

直後、レーヴェと錬は同時に突撃して拳を振るうとお互いの右拳が衝突する。

「誰に雇われた、傭兵！」

「それを言つとでも？」

錬がすかさず右足で蹴りを放つがレーヴェはバックステップでそれを回避する。

「なぜ俺と闘う！？」

「お前に信念があるように、俺にも信念があるんだよ、こいつがな」
そう言い放つと、レーヴェは自身の魔力を開放した。

【次回予告】

衝突する拳と拳は新たな闘いの序曲でしかないのか、鍊とレーヴェが相対している同時刻、管理局では不審な動きが起きていた。
そして、鍊の前にレオン・アーヴィングが現れる。
果たして白騎士達は自分たちに課せられた運命を変えることができるのか

次回、魔法少女リリカルなのは 光を継ぐ者 第20話『緋色の明星』

『鍊、私と共に来い。それが君にとって最良の道だ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9212j/>

魔法少女リリカルなのは 光を継ぐもの

2011年11月15日11時48分発行